

江戸名所圖會

四

西垣文庫

文庫10

6556

4



天璇之部目錄

東海寺

新敷山

光嚴寺

貴船明神社

天龍寺

海晏寺

上古海道

西光寺

長徳寺

寄本明神社

海龍寺

來福寺

光福寺

磯の清水

中の橋

本光寺

常行三昧寺

品川寺

千代丸神社

妙因寺

大龍寺

洲邊辨財天

品川驛

千代丸神社

納経塚

萩頭明神社

原島明神

千代丸神社

妙因寺

大龍寺

洲邊辨財天

品川驛

千代丸神社

納経塚

萩頭明神社

原島明神

千代丸神社

妙因寺

大龍寺

洲邊辨財天

品川驛

千代丸神社

妙因寺

大龍寺

洲邊辨財天



宗興寺

雲松院

折本淡島明神社

本覺寺切通

版綱権現社

姥島

惟子里

大神宮

蒔田城跡

青木明神社

神明宮

金澤 同敷島

観音山

小机城跡

本覺禪寺

袖ヶ浦

本牧十二天宮

惟子川

品野坂 一名権太坂

乘蓮寺

くさ妙寺 天満宮

杉田梅園

独見堂

徳重権現山

泉谷寺

多目周防宅地

陽光院

富士沙間祠

吾妻の神社 天祖

程ヶ谷新町

古町街道

二位禪尼彩堂

同海流と製子圖

擲筆松

慶雲寺

師是徳重権現宮

西向寺

道灌山

側乾無姓天祠

杉山神社

津戸川

界本 地蔵堂

任吉明神社

稱名寺

金澤文庫舊址

薬王寺

浦の郷

野島の渡

照天松

圓通寺

仁寺齋院

六浦川

光傳寺

菅根権現社

烏帽子島

名産甲番

新所ヶ谷

薬師堂

善應寺

測崎

瀬戸明神社

金龍院

上行寺

当光寺

界地藏

雀ヶ浦 一名天

夏島

兼好法師因居舊址

天然寺

野島 土人百軒島

瀬戸

泥半菴

岩松寺

油堤

三艘浦

中尾岩根付岩

猿島

新華寺

金沢系

乙瓶の浦

瀬戸橋 旅亭本屋

瀬戸辨財天 福石

日荷上人加持水

六浦

侍従川

太寧寺

榎戸湊

裸島



萬

松山東海禪寺 呂川北馬場あり花浴大徳寺派の禪宗

江戸觸頭の一員より當寺ハ輪番中より年々八月より交代を

寛永十五年戊寅 台命を奉して澤庵和尚開創を

所の禪園なり塔頭十七

佛殿 釋尊の像を安を額 祈禱堂 天倫筆 二重家根額

世尊寺殿 同筆 山門樓上に觀音を安を額 潮音閣 大明院宮

公辨法親王真跡 中門額 東海禪寺 天倫筆

鐘樓 本堂の右あり十境の要津橋 南の方あり千歳杉 同所橋あり

十境の一に宝曆の雨暴風あり吹折あり今ハ其幹あり千歳杉あり是も是も浴鳳池

方丈の庭の泉あり十境の一なり寺後 釣玄室 池の北あり二十年仲秋の頃澤庵和尚と

山下清泉流出師引之開一池於室之北面云云 東海和尚年賦云寛永二十年仲秋之夕

此所あり法向あり則に十境の一なり東海和尚年賦云寛永二十年仲秋之夕

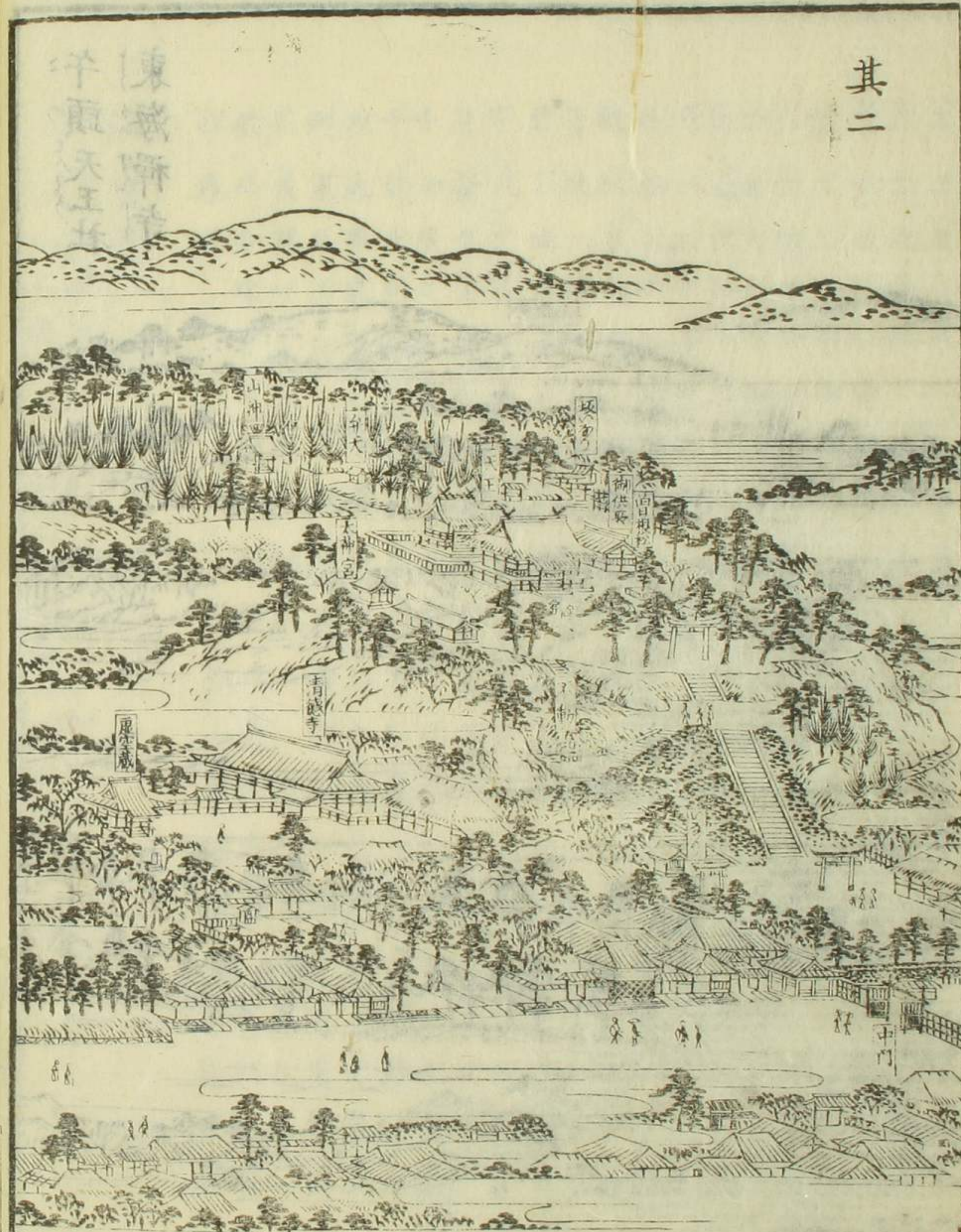
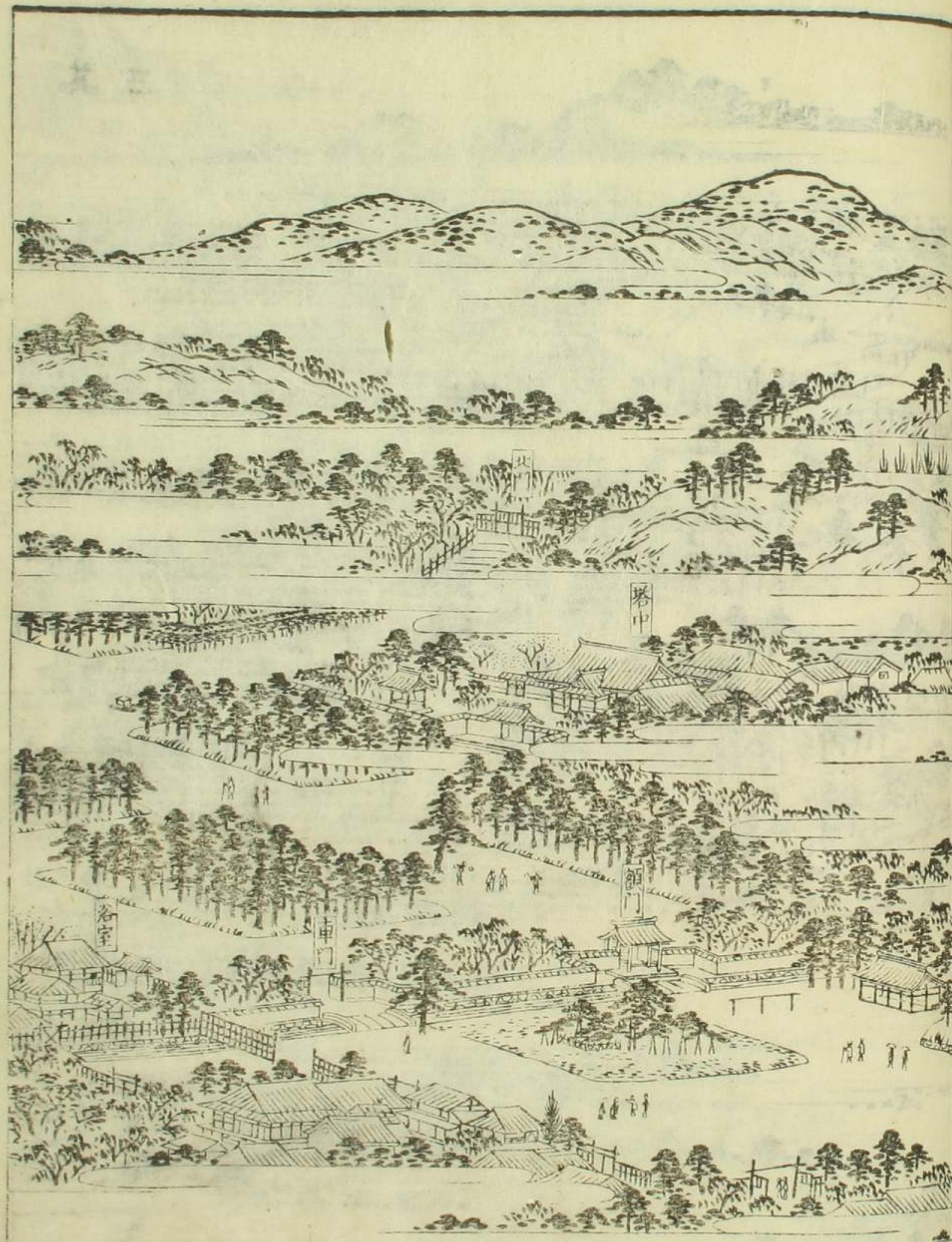
台駕入東海あり月あり山亭台顔治而出山亭猶兼月明倚池上小亭亦侍傍云云

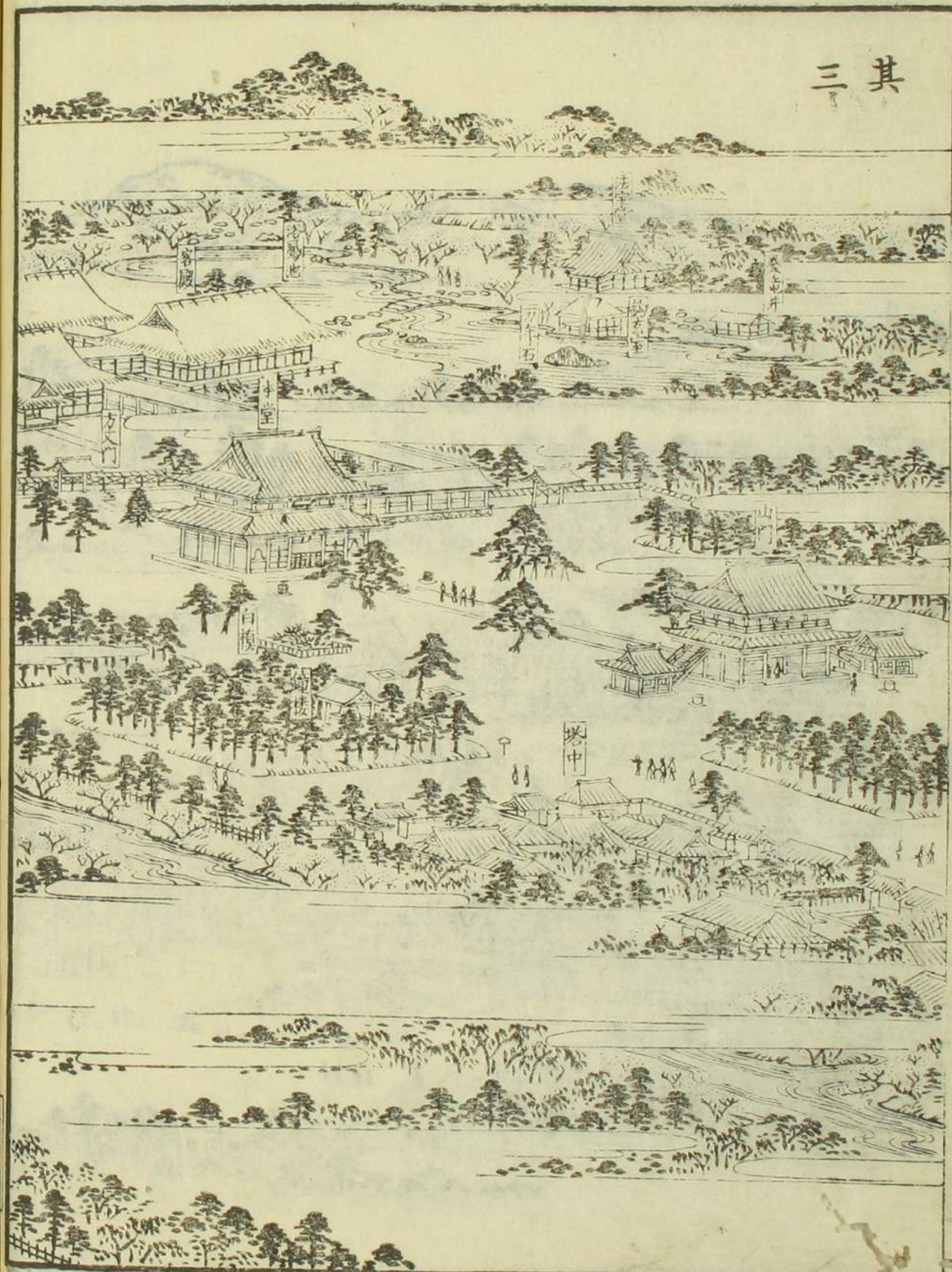
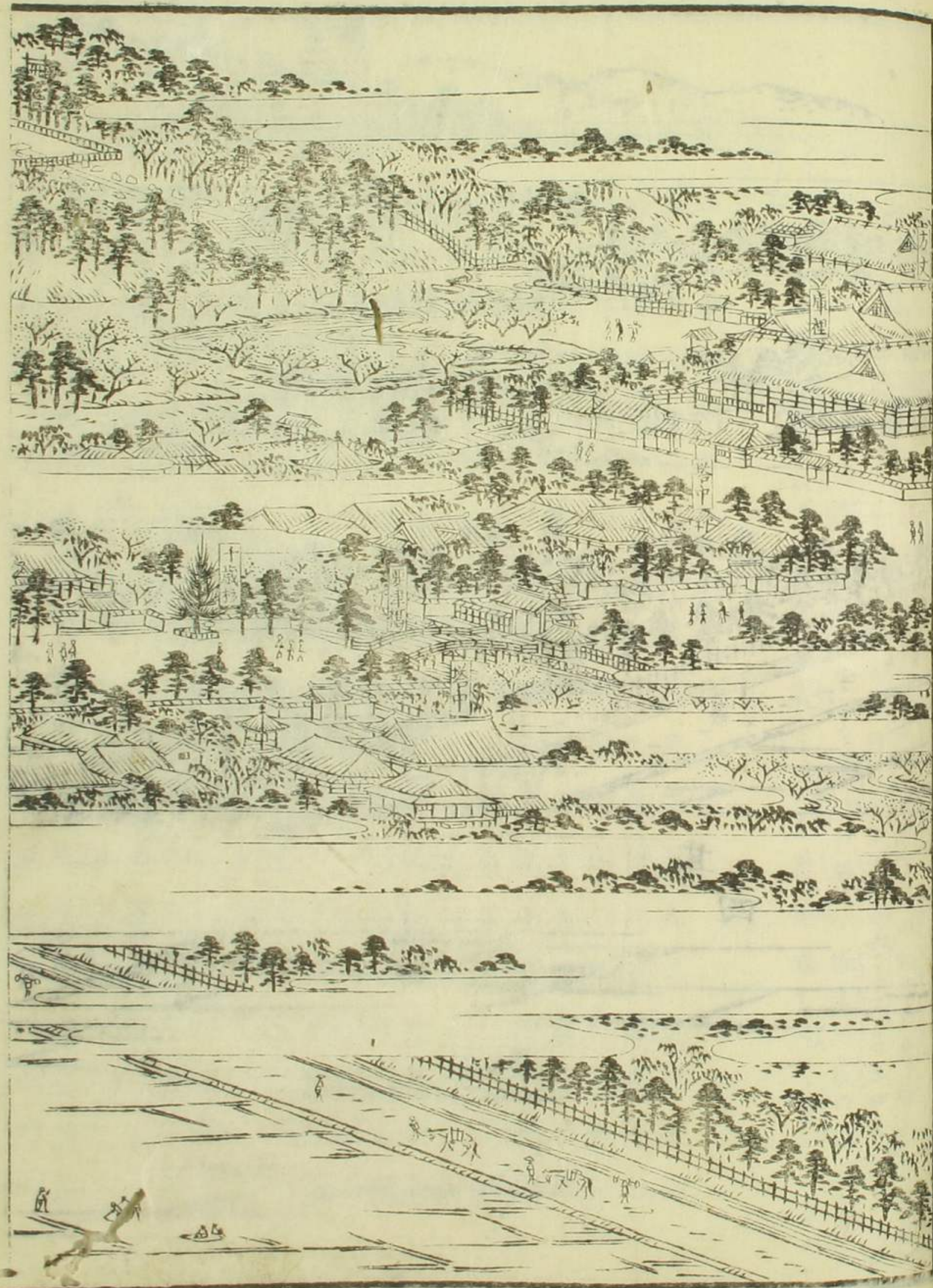
泰龍井 鉤玄室の東あり並に寛永の頃 大樹あり茶の水あり萬年石 池あり東の方

其時遠州侯小堀政一命せられり大樹當寺へ台駕を移させせり





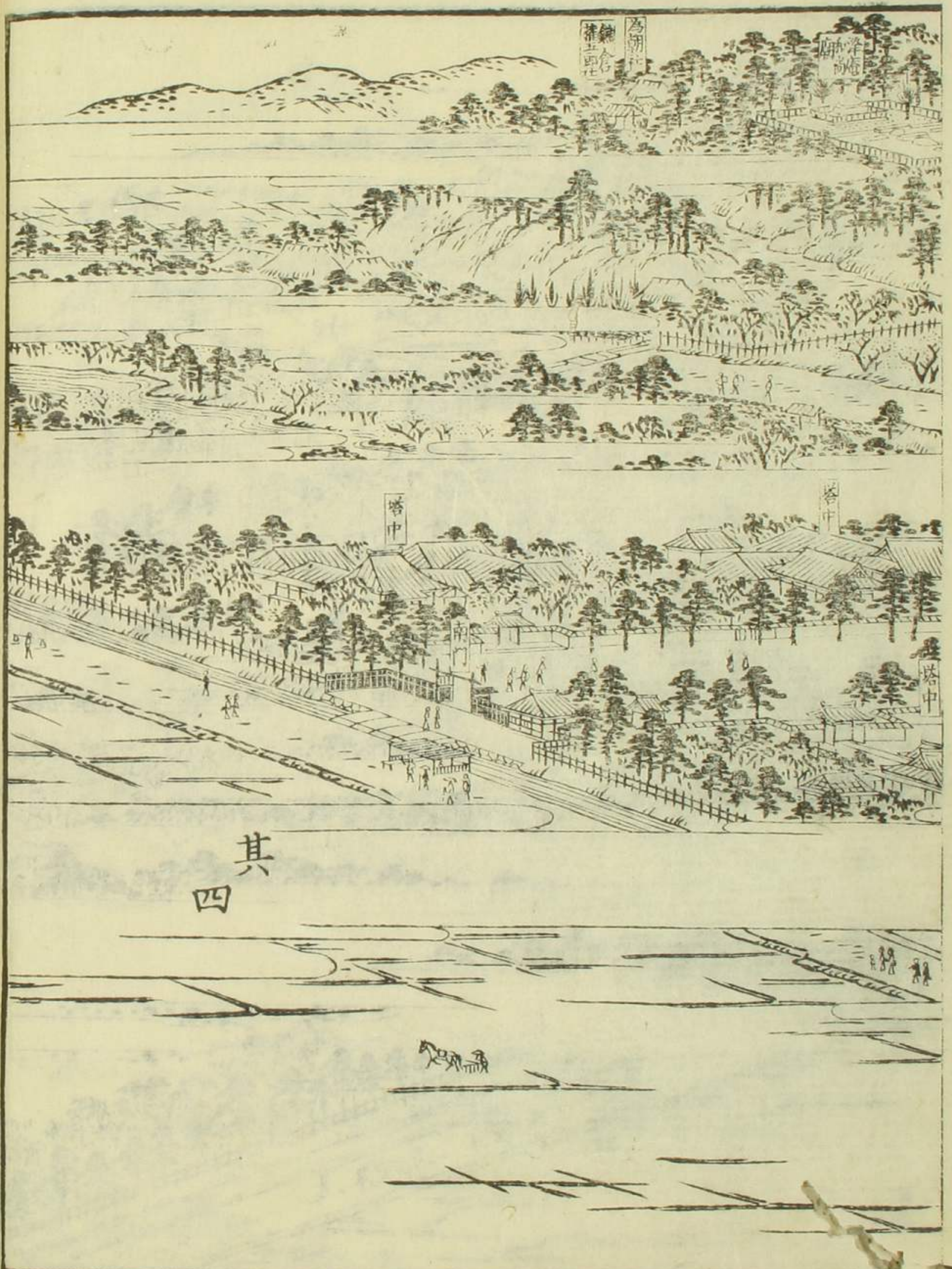






開山澤庵和尚塔銘  
 昔山澤庵和尚塔銘  
 正印者一師有餘人啟迪其法者以洪大計精興  
 其室燈國師明而後也二師燈之相續明起不盡方今  
 無變色得證明而後也二師燈之相續明起不盡方今  
 耀朝廷其化者澤庵初禪師也彭明起不盡方今  
 挑其焰昭其化者澤庵初禪師也彭明起不盡方今  
 也晚稱東海翁天正初禪師也彭明起不盡方今  
 氏少受業於有而宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 諱先年十有四而宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 典每先年十有四而宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 德禪師董仲公居宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 大德禪師董仲公居宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 寺師董仲公居宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 國師董仲公居宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 師師董仲公居宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 朝師董仲公居宗鏡禪師也彭明起不盡方今  
 派朝師董仲公居宗鏡禪師也彭明起不盡方今

開山澤庵和尚塔銘  
 石を數十立並へり是を羅漢石と号くまゝに廟地の趣ハ小堀遠州侯の指圖ありと  
 之り傍に和尚の行實を記せし石碑を建たり是を慈隱塔と号く當山十境の一  
 たり銘文  
 左の  
 開山澤庵和尚塔銘  
 方丈の西北の開立の上あり  
 開山澤庵和尚の遺志あり石塔を



弟命身月月号受疾如寺復之入寺幕黑号河大問卓鈞然飢下生  
子也於十不而道預一其舊筆山曰下不無 上法庵命師色扁涯  
武門東一產煨俗知點可規固草東於日國 皇嬰曰召知寬投爾  
野人海日一 予緣墨知之識木海金而師皇召曉檢還其永淵後  
氏在之也日 賻盡書也 新生落城下号情入遇東二行己軒歸  
安泉西世曉朝衆遺于正 筑輝成南謚也大 優暫翁止已折山  
齋南北壽天奏僧誠贊保鈞之師之品天願悅 渥寓師係師脚陰  
翁者岡七接莫著云詞乙命久奉日川應下師仙耐止抵數有鑑之  
往祥唯十筆入衣瘞於酉益昌 賦創大 奏院望焉武不事內故  
年雲種有書木契全其夏是辛 賀草現綸我講愈 陵慶昇煮里  
昇樹松三夢牌飯身上令依已鈞頌梵國旨山原高 於容玉麻構  
師塔乎僧一於如於以畫師歲命致利師 第人戊幕城色室麥一  
行名其臘字本平後為師之降賦登使有 二論寅下外壬翁粟把  
實曰上五泊寺日山壽劃所使和祝師功上世辨秋徵民申同豆茆  
求寂不十然之矣莫空一願本歌廠住于皇徹瀾師師村 賤給於  
銘然樹有而祖且誦同圓也寺一後持曩允翁激之於一 于日宗  
其曩塔九逝堂莫經年相有出首 山祖之唯起京營牛幕窮食鏡  
塔肯益瘞實云為設仲相功世祈 曰若圭有如師中鳴下卿而主  
因參依于十云求齋冬中于制國台萬此章禪懸 時之降遐無山  
循學遺今二彌謚莫示親本法基與松也寶師江 時地 微有之

勝添塵色在寅禪峰延驪綽寺本歿于師襲彭界難命師驪亟之之  
槃靖埃之雲再室視師喜有經寺也陽入寶禪而寫畫有也見弗典  
抱有視南門造問其為如古二板師春室護子能平匠所鏡之就籍  
烟時聲再巷大道去開見人年着昔聞師同麼殺素寫契移機明附  
霞寓色建乙仙詰雷山點風而繼衆師之邑予佛作鏡悟同辨堂師  
沈南若南卯之且知祖佛味入臨陽勘酬有失着略壽投邑縱古初  
痼京泡宗南拾馳其也同亡院德春辨對宗笑快入像印南橫鏡雲  
有之幻不宗雲書輕師邑何于禪補而敏無云拂魔索證宗應禪英  
時芳有巫罹軒謝重綽有告本同席驚捷者何子界贊語寺答師偉  
橋林時不鬱師之陽法宗退寺年慶典而為不突而鏡号師如一公  
城菴在徐依禪癸明語印還大秋長嘉玉先問出還涉日執響東玉  
州韜泉尋之坐旦履慶者于德八月未云珠齋大父魔書菴中透公珠  
新光南復災之一下之創泉一月未云珠齋大父魔書菴中透公珠  
之匿天舊師暇新信讚建南杏主師真回緇平攘宗曰賦瓶網住公  
妙耀下觀告緇南尹之一泉為龍年跨也恬天羊活鹿祇日金邑以  
勝有邑師色大宗公于菴南古興三竈此殊下隱機面夜夜鱗之法  
寺時而視宰燈之一泉名緇鏡山十兒時請師之自易抒參而陽器  
守入愛名相年鐘夕南曰素供南有也鏡圓領底由描其究頤春期  
空泊幽利攸譜樓入于祥郊住宗五於臥鑑之不入中義鏡響菴師  
寂瀨遠右於杖甲師龍雲迎山禪遷鏡病國珍是佛眉師知青師招

海峽の影を拜し 天下の東海を小隠れ

あゝ人の影を拜し

無野海坐家麥修些彌法杜呼鉢添爹生萬所前將正  
名點一子告即予日遊得和仰尚之真展見則一圓相也  
錄九點十書曰遊得和仰尚之真展見則一圓相也  
中麻谷作九箇人蛙軒泥沙南泉曾劃一圓相也  
此圓相包天女地無外窮塵元無瑕類相如漫誰秦  
似此圓相包天女地無外窮塵元無瑕類相如漫誰秦  
法方彼諍衆包天女地無外窮塵元無瑕類相如漫誰秦  
彌身全埋列麟鳳此似粟如麻九塵元無瑕類相如漫誰秦  
杜勤不募前體顯諸阿難我羅漢出雲是太列門無邊六世藝起  
呼多却增聲課湯我菓不窺王難摧寶蓋嗟迦葉間我為俊六藝起  
鉢衣蒲童子聞侍菓不窺王難摧寶蓋嗟迦葉間我為俊六藝起  
添茶下童聲聞侍菓不窺王難摧寶蓋嗟迦葉間我為俊六藝起  
爹我氣請看閻羅卒得擣以聖者我冥官等踊如氣得  
生我猶氣請看閻羅卒得擣以聖者我冥官等踊如氣得  
萬般已野喜奈落罪人佳時誇捉鬼然我鈇五逆日  
所捨無已野喜奈落罪人佳時誇捉鬼然我鈇五逆日  
前絕等無已野喜奈落罪人佳時誇捉鬼然我鈇五逆日  
將來空差底求中若任落邊邪佛經祖傳錄方語點檢

開澤庵和尚影像一幅  
正保二年乙酉師歲七十三畫工余  
親筆之其中心  
總讚南語の南宗精舎の藏せり讚ふ云く  
一圓相と作りし親筆の點を其中に  
八則

未果今茲賣之不己講習道義於乃師者莫若余也  
於翁正孫泐然故賣之不己講習道義於乃師者莫若余也  
虛堂十世孫泐然故賣之不己講習道義於乃師者莫若余也  
經師過其室大鏡現東聊記蔓乙遂為之銘曰通  
道播四海規真眼覲空相呈輝圓陀地且大應圓鍊  
一矩疊中規真眼覲空相呈輝圓陀地且大應圓鍊  
淵才圓相勇中規真眼覲空相呈輝圓陀地且大應圓鍊  
語而明矣笑筆頭溫該有竈東盛路且大應圓鍊  
橫機峭峻矣笑筆頭溫該有竈東盛路且大應圓鍊  
姑射山峻矣笑筆頭溫該有竈東盛路且大應圓鍊  
塔去寂然此幻景  
無地載來此幻景  
天覆南祥雲禪寺寂然此幻景  
右泉興國南禪寺寂然此幻景  
大平泉興國南禪寺寂然此幻景  
撰興國南禪寺寂然此幻景  
寶曆三年癸酉冬十二月十一日  
山東海禪寺慈蔭塔下  
僧錄司最岳元良和尚所  
現住閑田義問併拜書  
德如祥誰扶大纖粟東盛路且大應圓鍊  
業如雲敢顛亞塵棘海大絕要人鍛圓鍊  
存體陰攀危軒泐航明稀鍊

少林院  
林泉  
縣居大人  
墓  
南郭先生  
墓



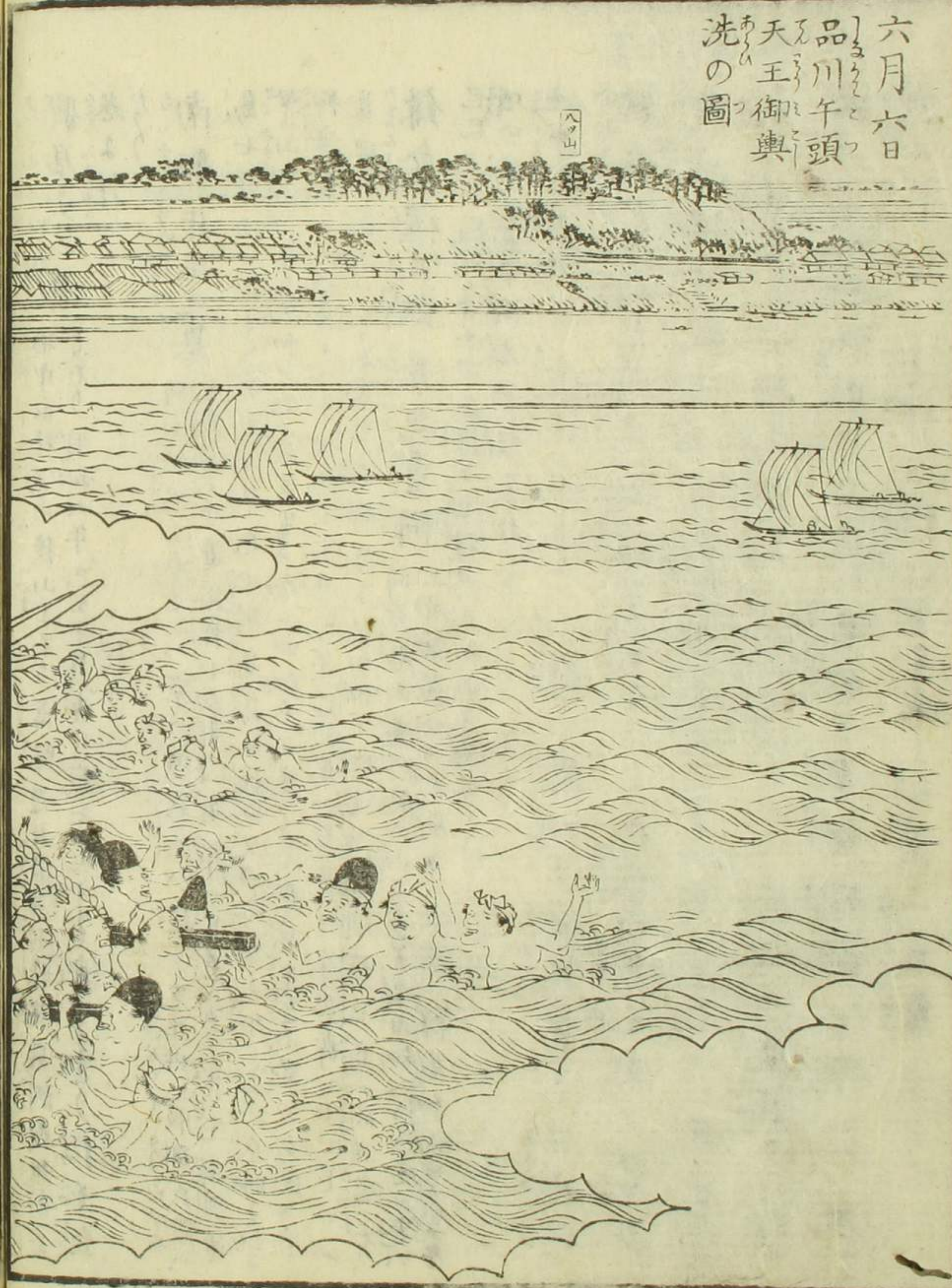
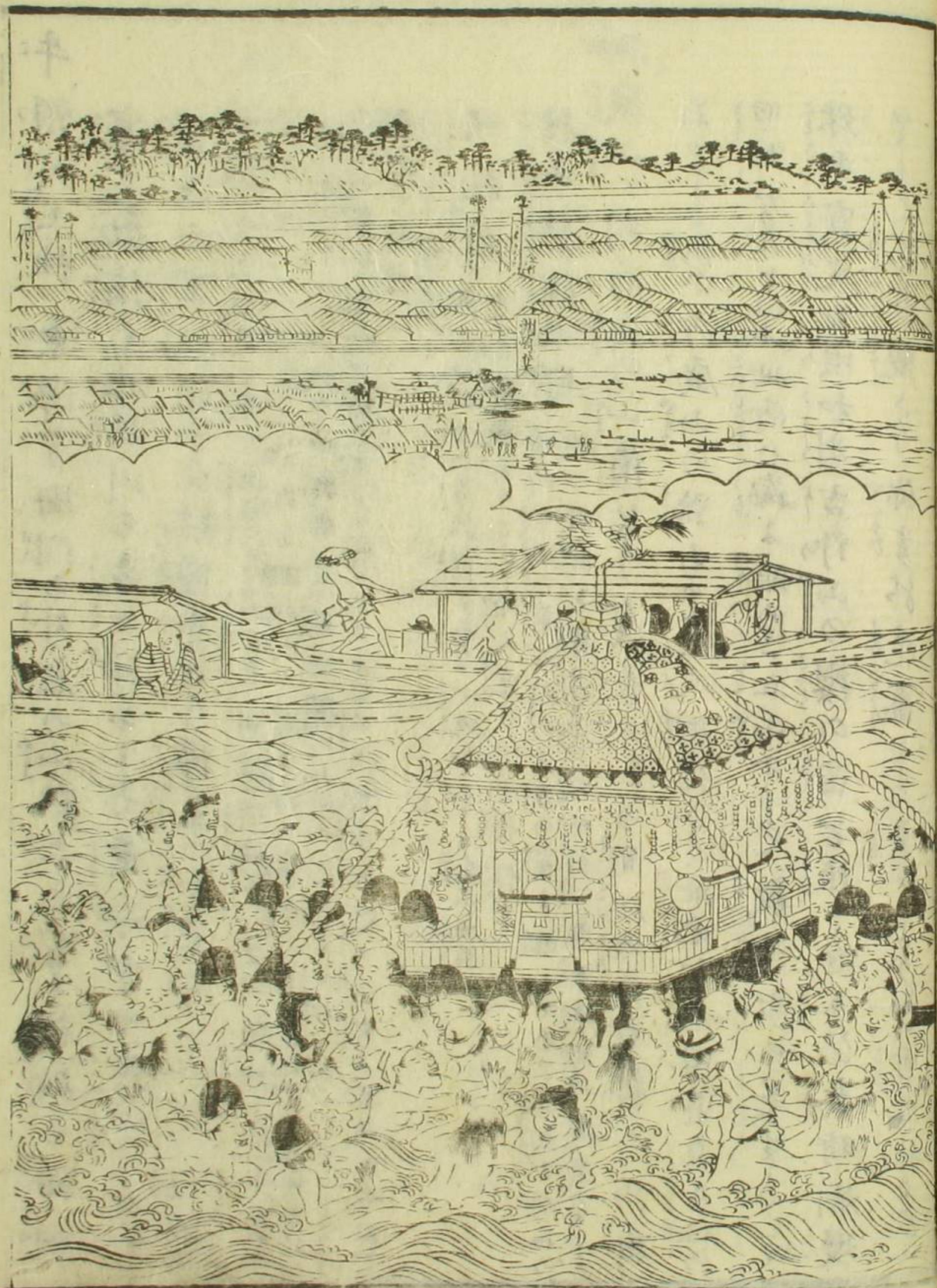
縣居大人墓

塔中少林院の後山あり當院過去帳に玄珠院真彌義龍居士  
とあり明和六年己丑十月晦日歳七十三や七身すうさり

南郭先生之墓

同柳谷あり一家の墳墓並び建り先生姓ハ服部氏講ハ  
元齋字子遷俗稱小右衛門南郭ハ其号なり其先尾州津  
島七黨の一わし曾祖父某越中國高島ハ徙る父の諱と元相との京師に移る  
母ハ山本氏なり天和三年癸亥生る歳十四江戶に米り祖傳先生不業と受後三年  
柳澤侯ハ仕入後十八年致仕寶曆九年己卯夏六月廿日卒ハ壽七十七也此墓ハ  
墓碑の銘文ハ其畧也其碑陰ハ後四位下侍後源頼順撰臣高元碩謹書とあり  
鎌倉權五郎景政靈祠 同所春雨庵の後の山ハあり津由知ハ此墓ハ  
記ハあり同九年壬申至る迄羽州上の山ハ諱せられ  
項の草薙春雨庵と移され

此寺ハ品川の勝區中門前の緑水を潺湲と品川乃  
流海口は通も屋後青山崔嵬と祇植の祠松間ハ聳ゆ  
茂林脩竹風帆沙鳥の勝覧筆の乃みあ庭作の規範と都て  
文の林泉ハ小堀遠州侯の差図中庭作の規範と都て  
滿地青松丹楓枝葉と交へ晩秋の奇觀錦繡と晒りや常に  
寂く寥くと實ハ禪心とを



牛頭天王社 東海寺柵門の外左の山に上りありて相殿に神明

宮を勸請を北品川の産土神なりて東海寺の鎮守とせし

官造の宮社なりて社領等あり神主ハ小泉氏也

中太田道真品川の城に勸請を祈り洲崎明神或ハ品川明神ともいふなり

祭礼ハ例歳六月七日に修行を南品川の産土神ハ貴船なり當社ハ由緒あり

少や祭礼の日ハ両社の神輿南北の驛中橋の上より行進又左右に立ちて

此橋を移合の橋と号く同十九日また品川驛中社遷の中央に旅所の假家と

儲けし神輿と

坂指荷 同社右の方には奥より小坂を下りて此名

傍本神詠之碑 同所本社の前石階の上左の崖に臨みてあり石面は明石の

御殿山 同所北の山續なり慶長元和の間に此地は首耕の御殿

ありし船小舟殿山の跡あり土人相傳へて此地を太田道真居住の

旧趾なりとのみ此所ハ海に臨り丘山ありて數千歩の芝生あり

殊更寛文の頃和州吉野山の櫻の苗を植ふせり春時爛熳

やしく尤莊觀より弥生花盛なり雲とよりひ雪と乱して

花香ハ遠く浦風は吹送るて磯菜摘海人の袂を襲ふ樽の

前ハ酔を進むる春風ハ枝を鳴さる鶯の轉りも大平を奏

する小似たり 寛永十七年九月十六日大樹此地は遊獵ありせられ頃

々々れと情をよむ木の剛なりをささの風を海歌有 澤庵

月の光の清杯はうつりては松一首と 上意あり前の日雨の降り

其日ハ止る空晴るなりありし

享保の頃檻を多く植ふに晩秋の紅葉も又一奇觀なり

鑄鐘松 増上寺の鐘を鑄る地あり其地の

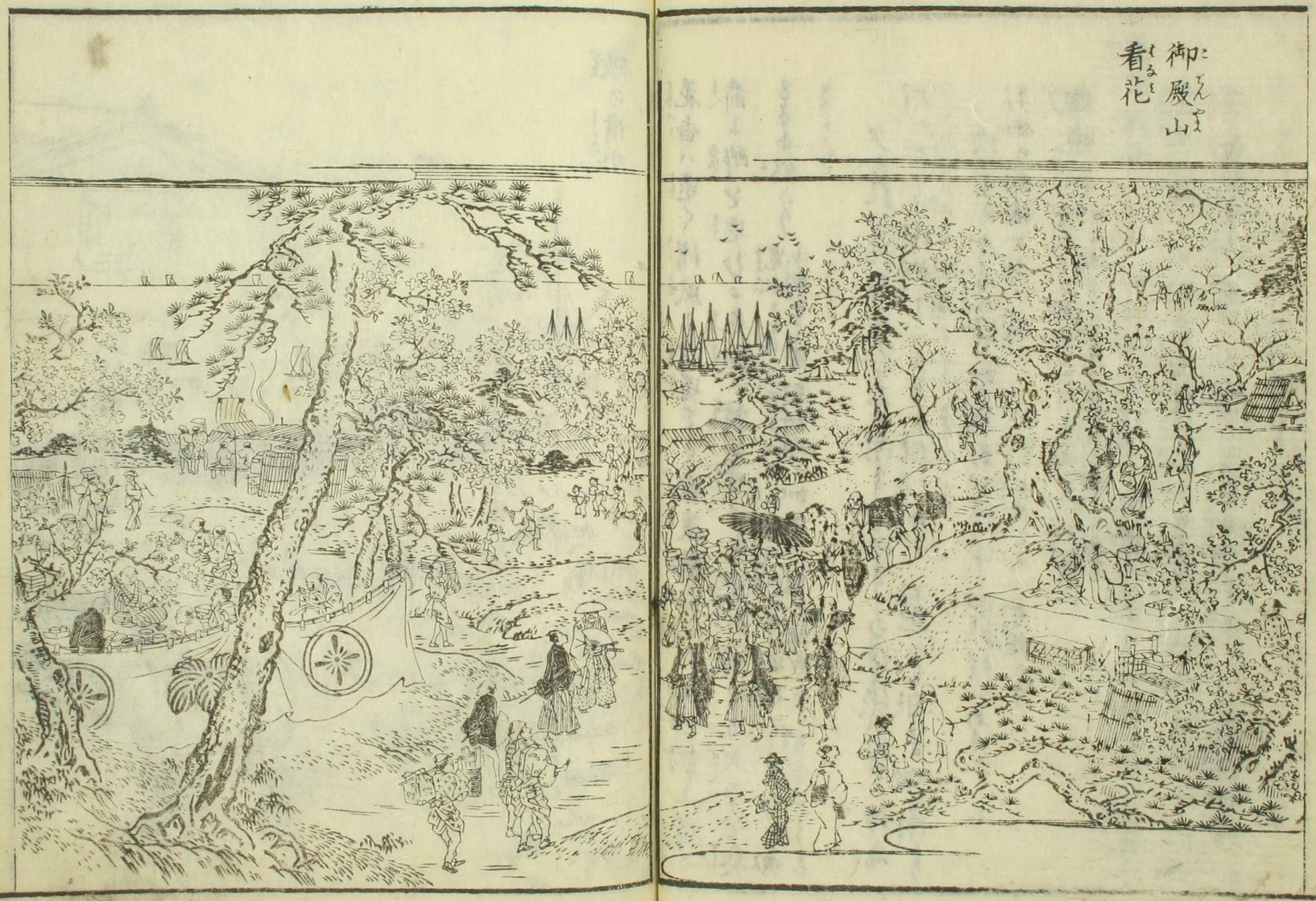
問答河岸 又御船雁木ともいふ新宿の東の海岸なる相傳ふ

寛永の頃 大樹東海寺へ至らせり頃津原より此時

澤庵和尚津原後を見送るなり此所迫来り 津問答あり

しとかなる故に此唱ありしなり

御殿山  
看花



磯の清水



磯の清水

浄殿山の麓清水横町と云ふあり往古ハ此辺まで

磯辺

なりしと云ふ此井清泉や々々早魁も酒もなり

と云ふ

或人云く昔砂利を堀

品川驛

江府の喉口や々々東海道五十三驛の首なり日本橋

より二里南北と分つ

東海寺の南は傍々貴船の社の側を流る川を堺

旅舎数百軒端を連ね常々賑々々往來の旅客絡繹と

絶々

梅花無盡藏曰品川注云隔五十町有江戸城多

法華宗云云

蓮紅二五層兼一層

問宗旨答法華僧

同書曰長亨丁未小春二十又二日扣品河之岐軒

之途城壁也瀆而見六七小舟二擧品河之土蓋為塗江戸

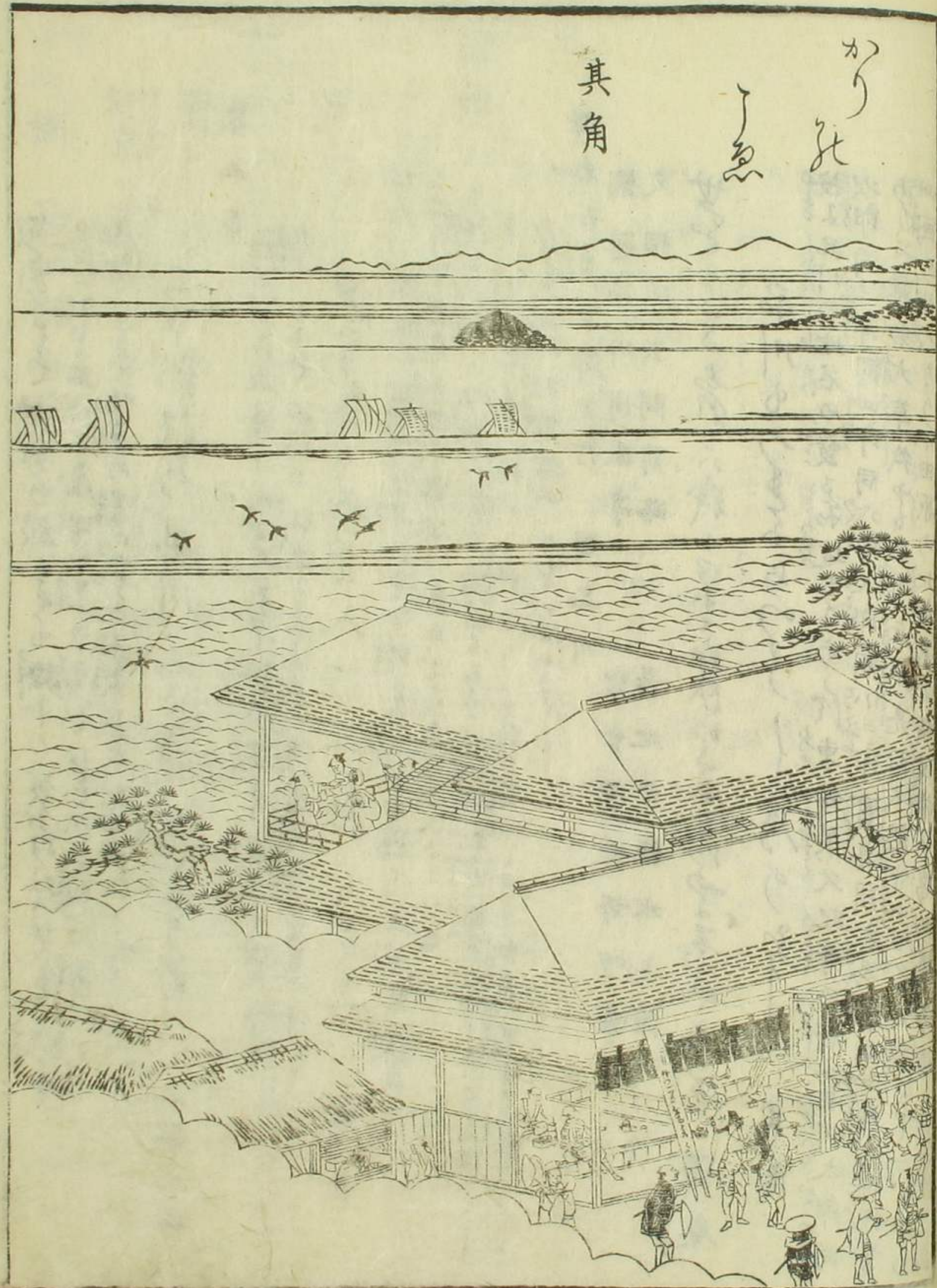
潮氣吞瀆萬頃連殃及舟楫莫无惜作是詩

心敬僧都記

かきくわりの品川と云ふ傳はるるのやうく海路の

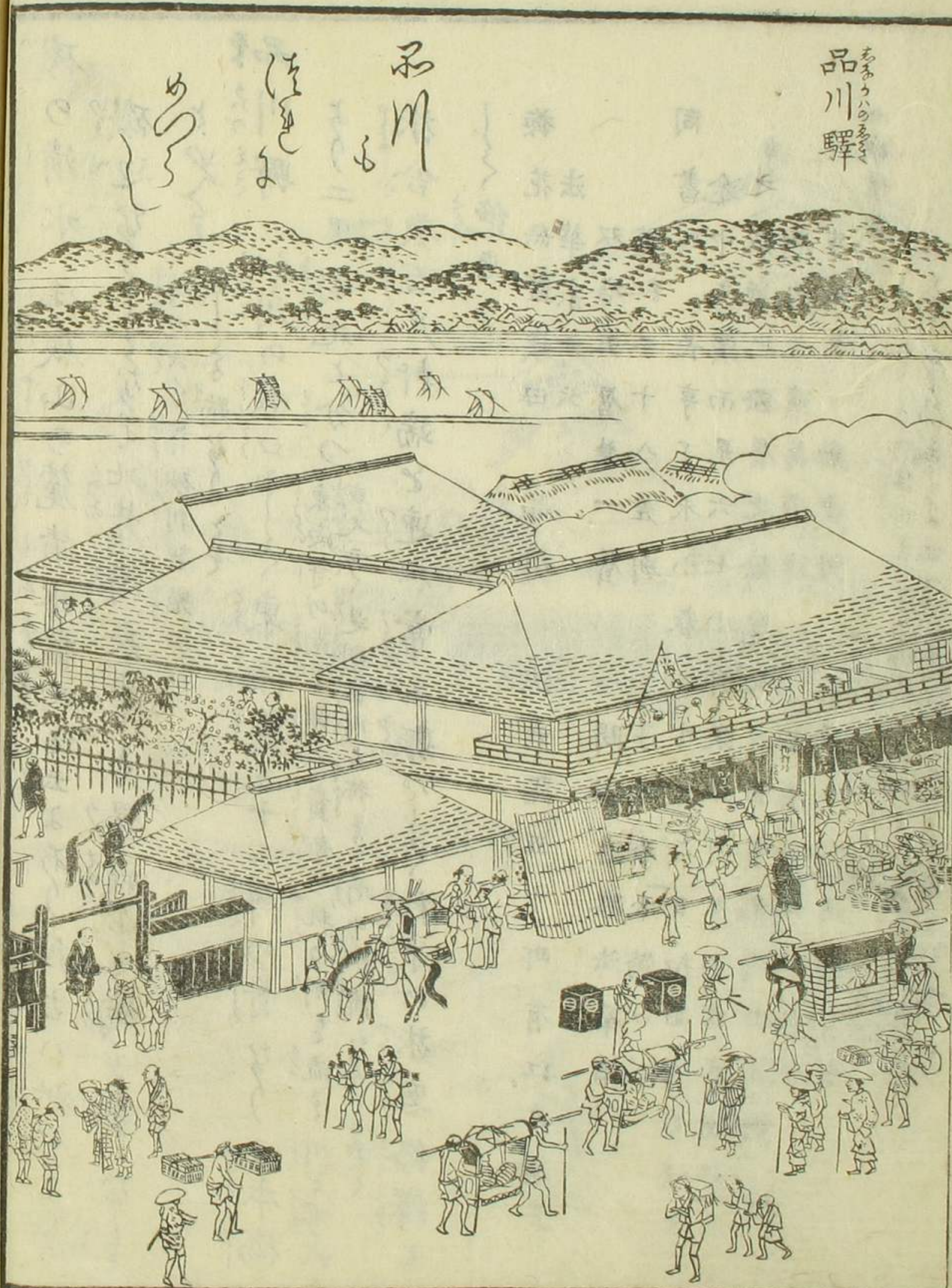


其角  
か  
し  
は



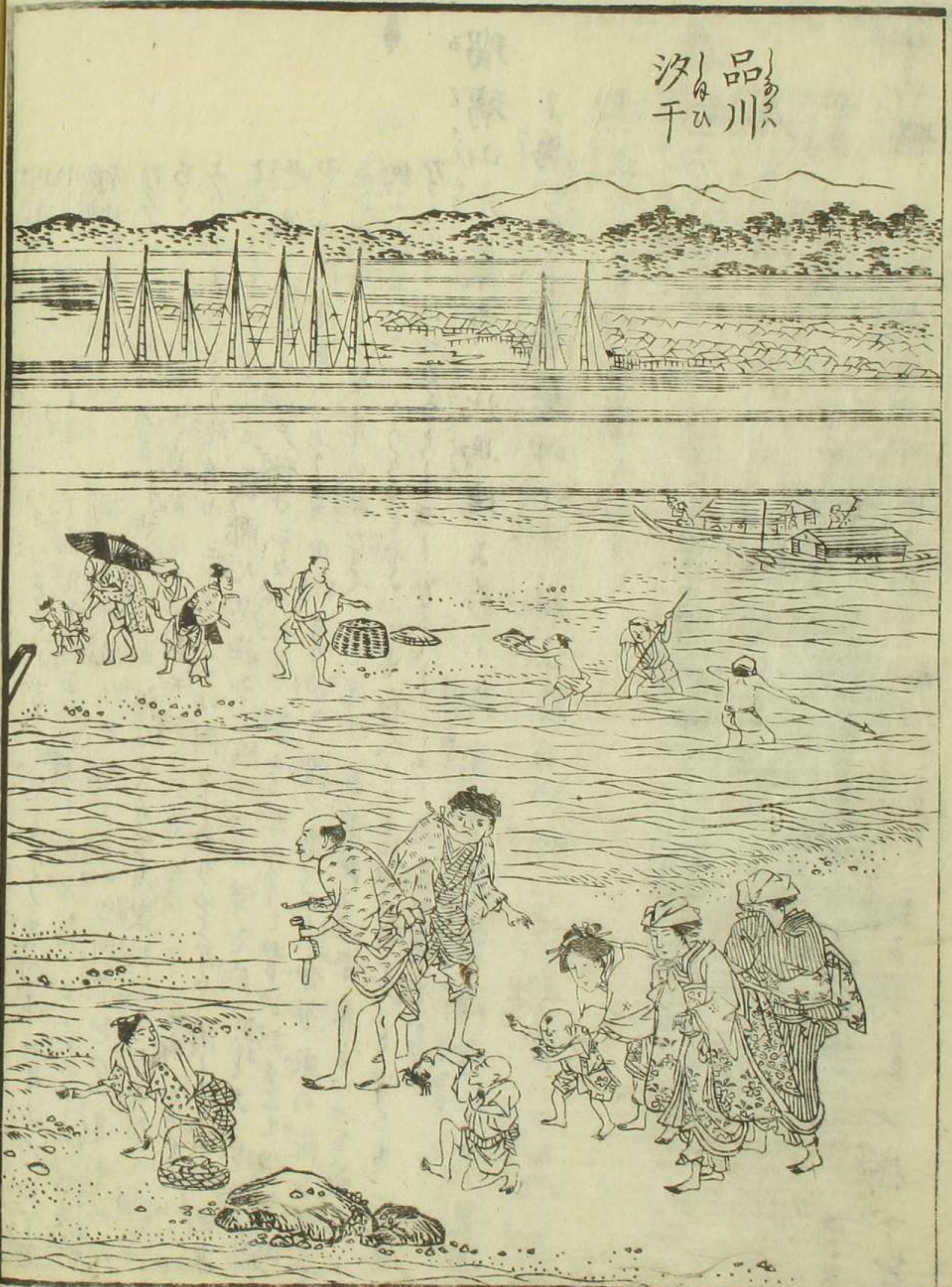
品川  
は  
な  
ま

品川驛

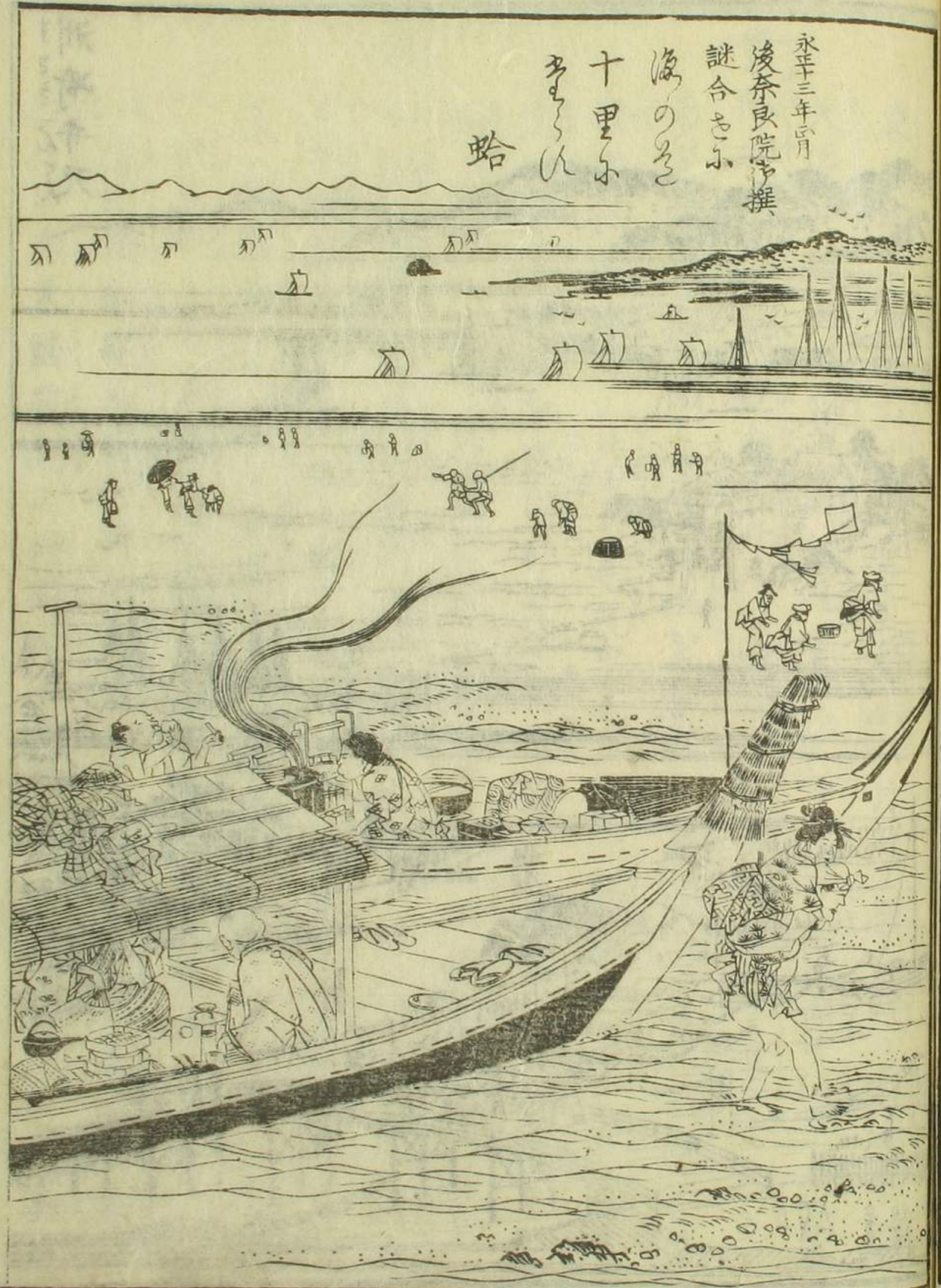




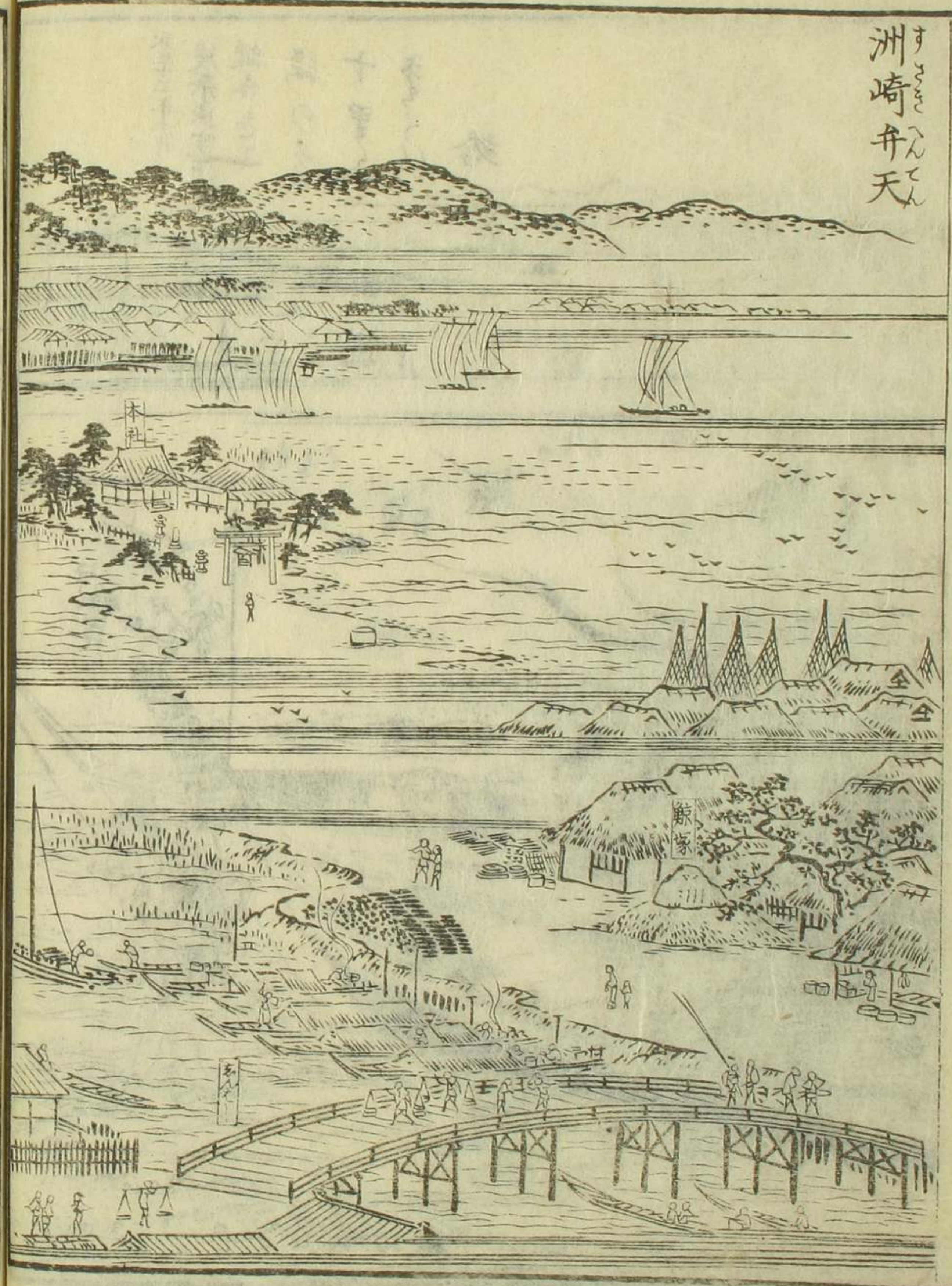
品川  
汐干



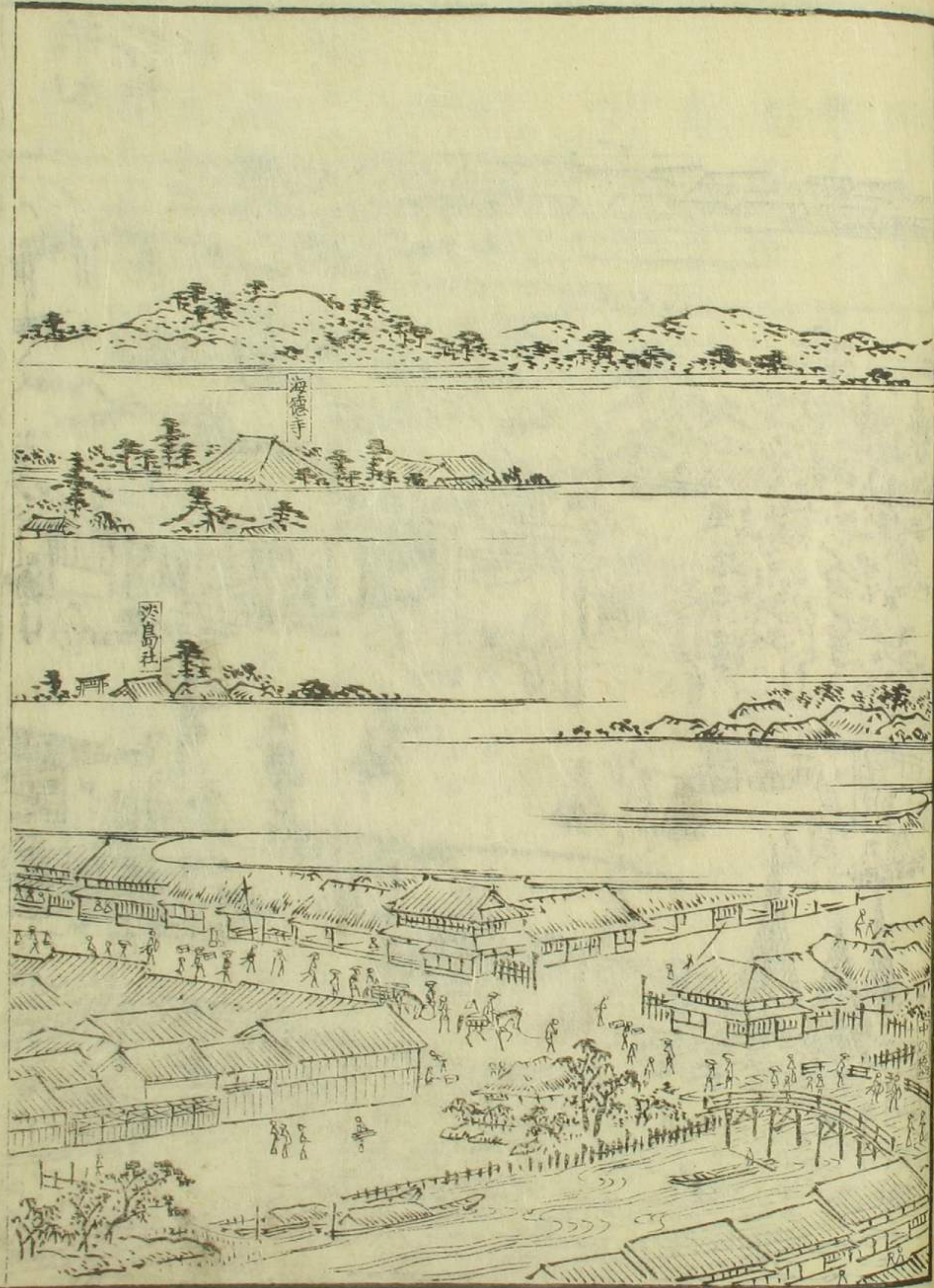
永享三年  
後奈良院御撰  
謎合さふ  
海のそ  
十里ふ  
あまの  
蛤



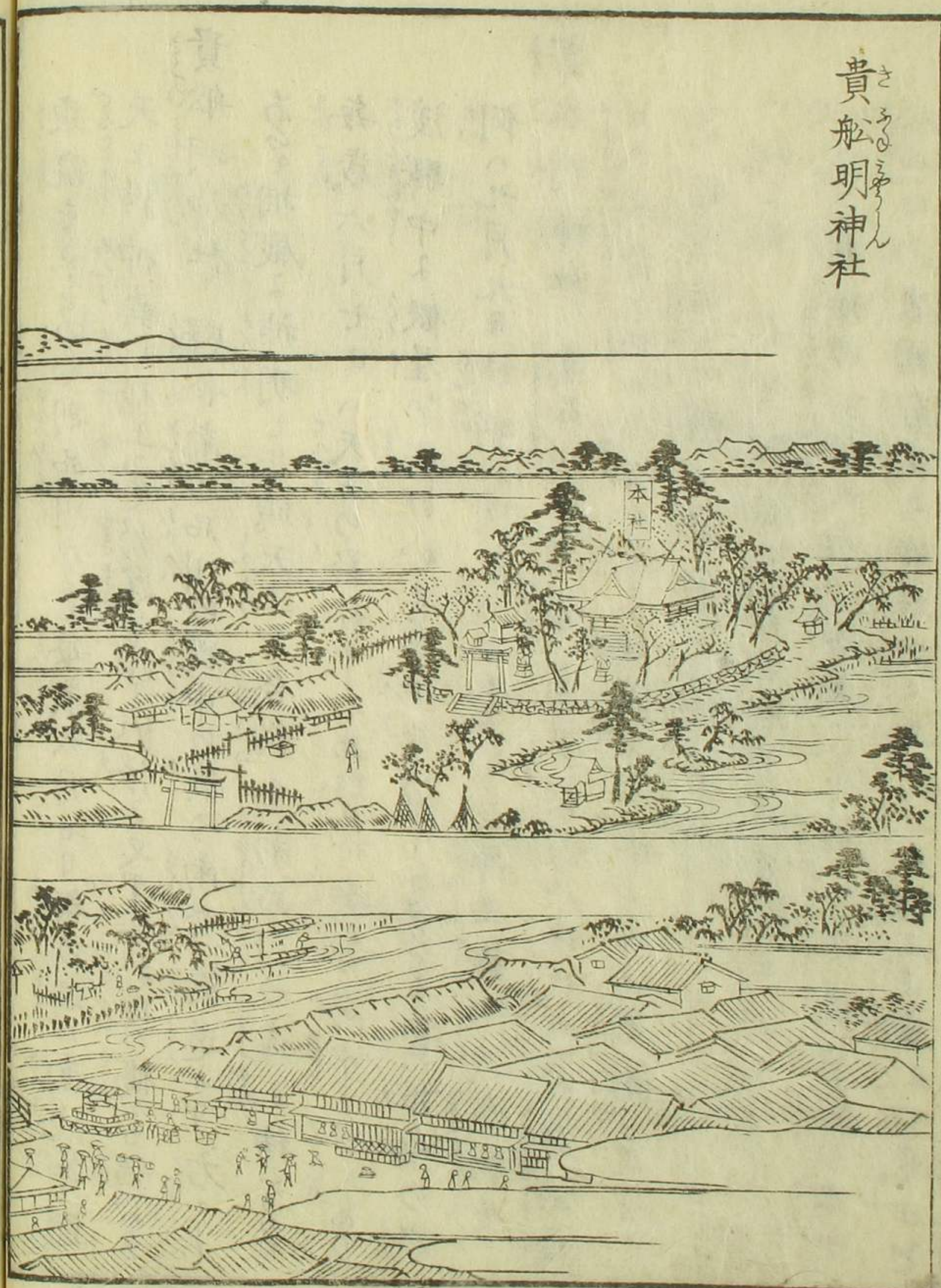
洲崎弁天



東流するもの則品川なるを毎歳六月七日祭の時ハ南北牛頭  
 天王此神輿此橋上より行違ふあり依り又里俗行違の橋も唱へり  
 貴船明神社 驛舎南北品川の境中の橋の南岸海道より右  
 ありと相殿は神明と牛頭天王を合祭を南品川の産土神なるを  
 毎歳六月七日ハ天王の祭礼中々其前神輿を海中より昇入り  
 後驛中ハ假屋を假げかゝる神幸なりと貴布祢の祭  
 例ハ九月九日神明ハ同月の十五日なり 神主鈴木氏奉祀也  
 寄木明神社 南品川の洲崎ありと相傳ふ神代の昔弟橘媛  
 日本武尊と共に王船に乗し此海上を渡りて頃覆つたり  
 その船材所々の浦に漂着し此地に流しより入りてハ土人  
 一社に奉じて弟橘媛の靈を祭りて寄木明神と号せり  
 作の遙の後船魂西宮大神を合殿とせり往古源義家朝臣奥州  
 征伐の爲東國發向の時此地に馬を止め漁人ハ當社の来由を



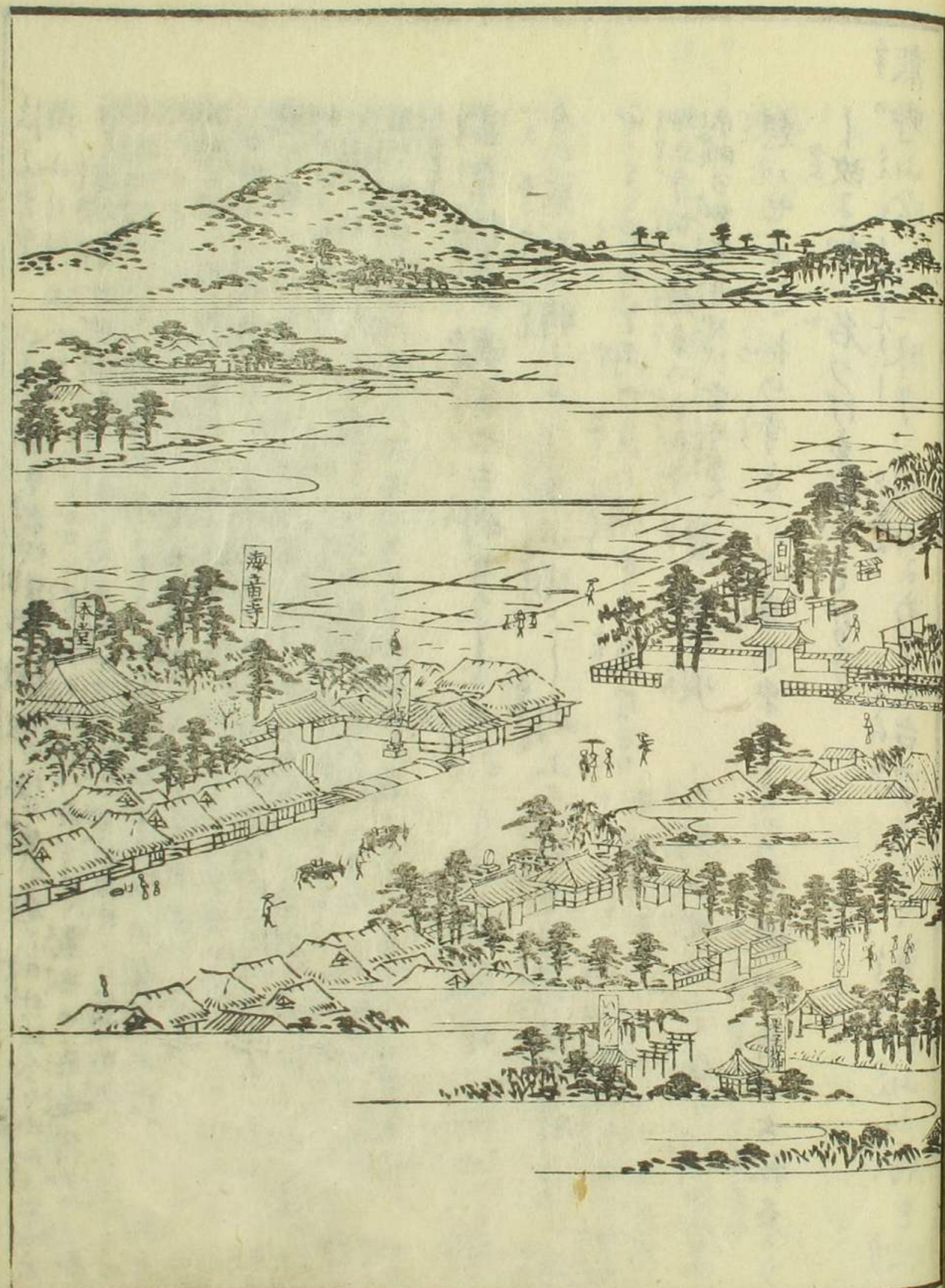
貴船明神社  
きふねあきみじん  
 社



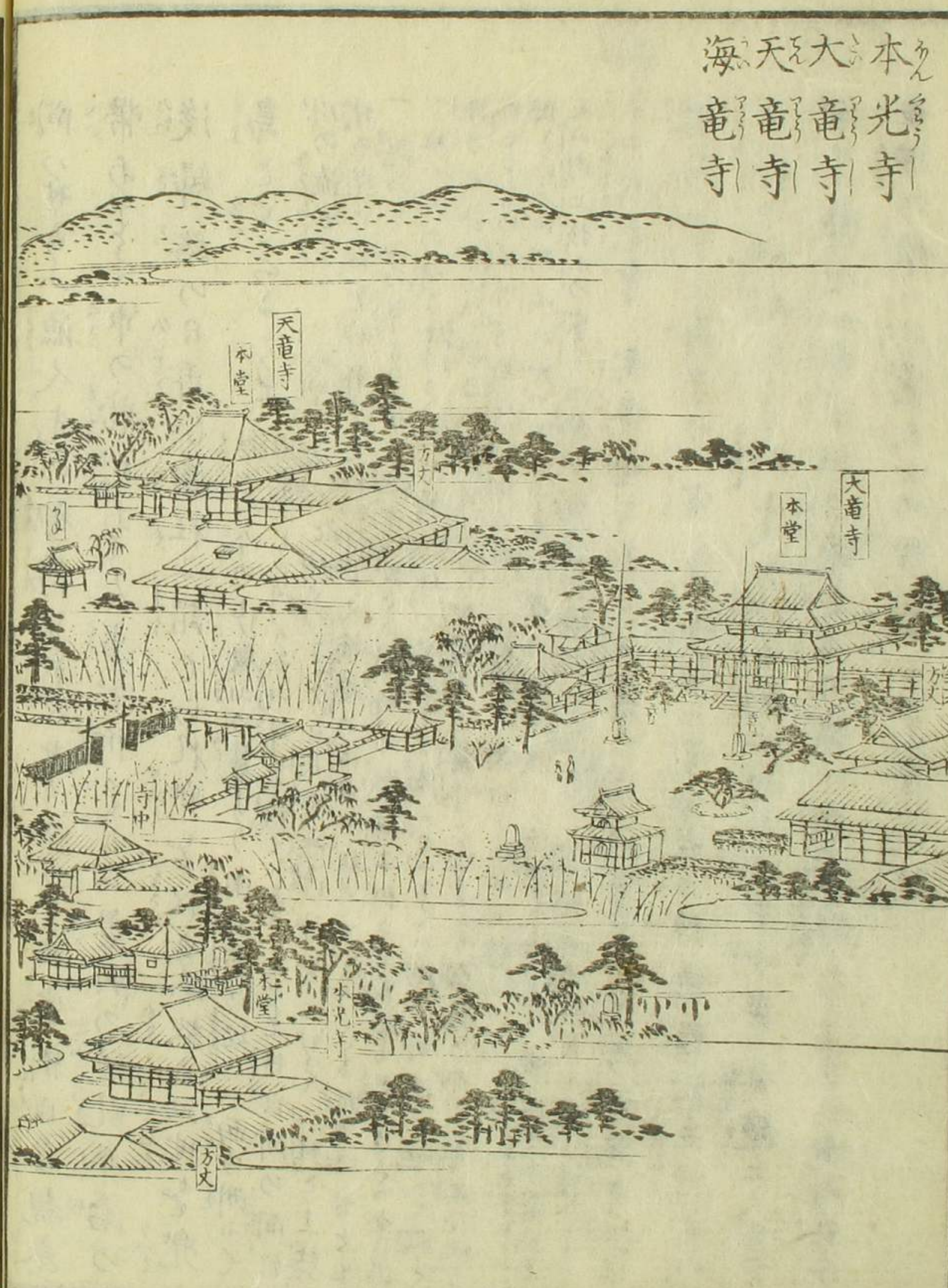
寄木明神社



向いせり漁人先の神傳を吞へりハ義家朝臣自親奉  
 幣ありて軍の勝利ありん事を祈りて奥羽の逆乱平治の  
 後歸路の日再び當社に詣てられ兜を収りて故よ此地を兜  
 島と号するを  
一社ハ洲の時ありて洲の崎神と号けり後に至りてハ洲の明神と唱へ又稱そ  
 詠方明神といひ誤る此社ハ今引く妙國寺の鎮守とありて當社の外ハ寄木の社と  
 稱するもの品川河崎の間に往くこれありて來由は云はれず  
又山内上杉の家々の制札數箇の條目と注せり今も此地何某の家は傳へり  
 經 王山本光寺 南番場あり日蓮の宗流中々京師妙満寺派の  
 觸頭江戸三箇寺の一室より永徳二年壬戌二位推僧都日什上人  
 草創の佛刹ありて則上人を以て開山祖と稱せし中興ハ日鏡上人あり  
 本尊釋迦如来宗祖日蓮大士の像ハ作者詳ならず又境内鬼子  
 母神の像ハ日蓮大士の作なりといへり



本光寺  
大龍寺  
天龍寺  
海龍寺



開山日什上人墓 當寺累代住持の御塔の内、並に建日什上人を祀り三年甲寅

法相宗の宗立、蓮師の弘法、ありてを永徳元年辛酉舊宗を興く一流を

二条授政源義満公と、室津延長の御塔、宗門の利益を奏せしむるに寺

境を賜り、同年七月正二位僧都に任ぜられ、浴内弘宗の勅免を蒙り、其年關東に

當寺往古ハ真言の古刹なり、日什上人の時蓮師の弘法を慕ひ

今の宗風ヲ轉シ、法華道場トシ、則上人創建の體用六箇寺此一真

六箇寺ハ、所稱關東會津の妙法、寺遠州見付の玄妙寺、同國吉美の

大樹此地、法遊獵の頃、當寺ハ、上意ありしとなり、境内昔ハ古松多かり

一故、かく名づけしなり、熊野山常行三昧寺 同所ありて天台宗中より東叡山に屬を相

傳入 仁明天皇の嘉祥元年戊辰慈覺大師常行三昧を修

行し、白跡中より則當寺の開祖と稱せし、本寺阿彌陀如來

同大師彫造なりといへり、鳳凰山天妙國寺 常行寺の南海道の右ありて日蓮大士の弘法ハ

京師妙滿寺の觸頭江戸三箇寺の隨一なり、本堂日蓮大士像 天目上人授与の靈佛なり、五層塔 文安年間

多寶塔 造営、詠訪明神祠 當寺の護法神なり、此祠ハ先記

崎明神と稱せ、後世誤り傳へ、洲の俗傳、昔ハ社鎮の地、海の面、竟ニ

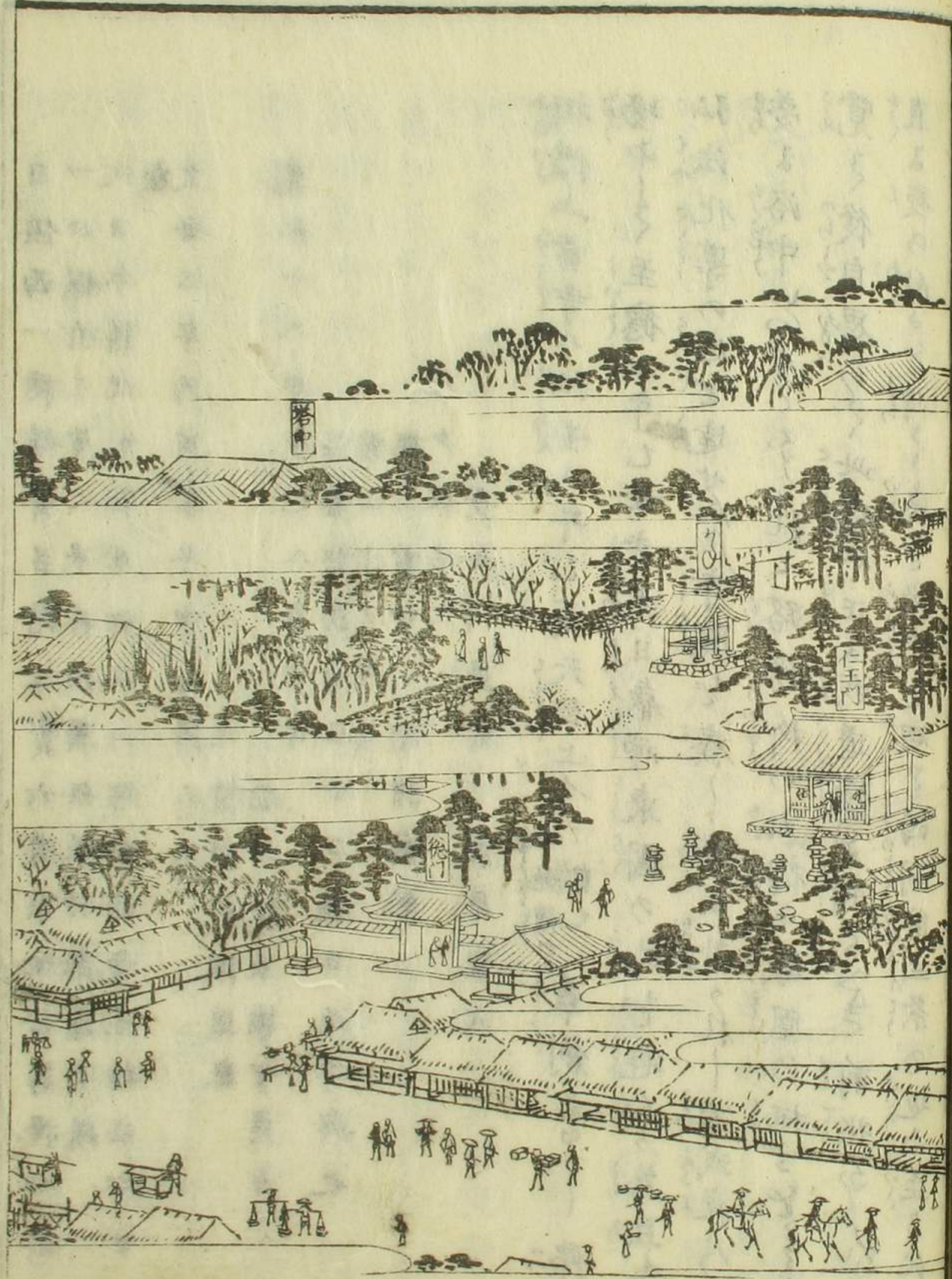
十八丁四方ありと云、二王門 左右ハ金剛密跡の二王の像と置、運慶の作

山王宮の二王、山王宮、東叡山、總門 東海道名所記云、妙國寺

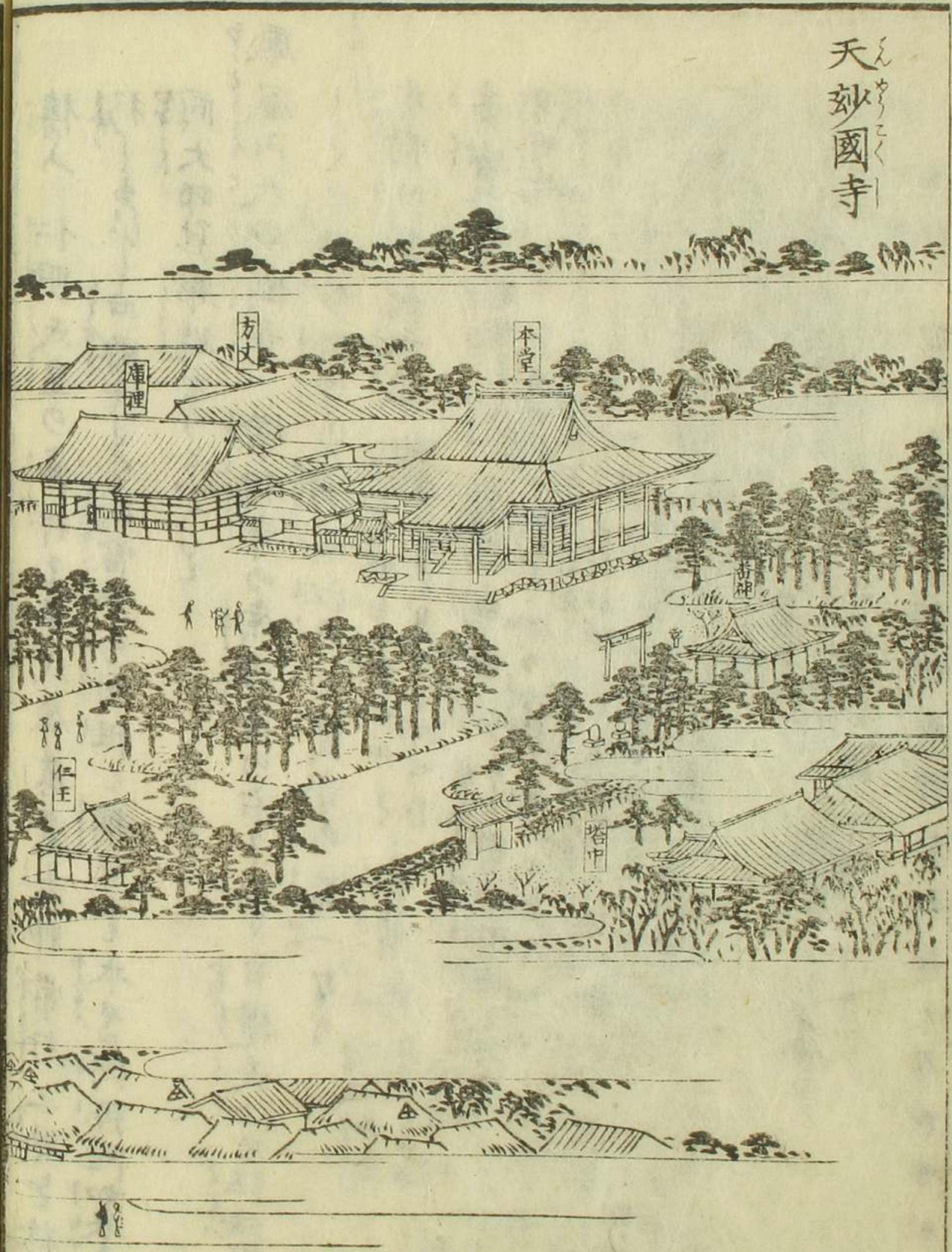
駿河大納言殿、屋敷の御成門を引、建らる、鐘 舊鐘、文安中鑄治せし、寛永十八年鑄改し、と云、日鐘の

往代鐘銘曰 聖衆之影向宛如萃散風結縁之得脱亦似





天妙國寺



日傾西一聽鐘聲召請三寶六道衆生發菩提心鑄  
一口鐘祈三身之果善根廣無功德遍有幾  
大日本國武州荏原郡品川郷妙國寺住持法印日  
文安三年丙寅季冬中旬第三天  
檀那沙弥道胤  
鑄師和泉權守貞吉

寬永十八年辛巳八月下旬

洛陽妙滿寺三十三祖日延再興之  
當山十代目  
施主當寺一結諸檀那  
江戶住右工  
長谷川豊前守藤原重次

相傳ふ當寺ハ弘安八年乙酉天目上人中老僧の草創あり佛  
場中々至徳二年乙丑寺主日叡師東國の乱を避んる為且  
弘法化導の志を達せんと寺院を廢し京よ赴くれ頃或夜乃  
夢よ浴中つくとふられと路傍柳の大樹ハ鳳凰の栖ると  
覺る後自思らく此瑞や正よ我道場を閑くへき前兆あると  
直よ夜の夢を待く急き洛中を廻り西洞院三条の辺小至るに

黒く大樹の柳の茂るあり則夢兆應なりと其地を闢き  
一字と營み鳳凰山青柳寺と号し日蓮大士よ天目上人ハ附屬  
の大曼荼羅を安置し廣く妙經の法を弘む其日蓮ハ花洛西洞院  
名井の中柳の水と  
いハ則其旧跡あり嘉慶元年丁卯天下疫疾流行を後小松帝  
詔あり師を此災を除くむ依奇験の料とて康應元年南北四丁  
東西二丁此地を賜る然ととも其寺院ハ徳の大乱ハ廢せし  
故よ寺を妙滿寺と撮む彼大曼陀羅并連師親筆の  
一部一卷の妙徑ハ妙滿寺ハ寄ハ其後旧里を  
慕ひ又武州よ至り天目上人の靈蹟を興起し舊貫よ復さんと  
其頃熊野鈴木の後孫沙弥道印鐘銘道胤  
品川領主鈴木光純  
等叡師の誦演よ信伏し七堂建立の財をとり叡師小力を  
をあげ文安年間彼旧地を象し則鳳凰山妙國寺と号け  
當寺を閑創し此文安永亨の年号前後せり永亨六年既ハ妙國寺ハ  
地境寄附ありしハ上杉憲泰の證状あり文安ハ  
先立り九十有餘永亨六年前の將軍義教公の執り上杉憲泰  
報不審とせ

先境の由緒を奉此地の四至を定めらる其外数通の判形の  
書あり其後天正十八年當國寺打入の時  
大神君當寺に入らせし時止宿ありし其の後寺領を  
賜ふ朱章を添らる江戸寺社領を附し又寛永十一年伊奈  
半左衛門を奉給し諸堂を營建かとしり院主日延を  
し中興山たし旨命せしれ此時より紫衣を免る以て  
永規とす

上杉憲泰

宛武州荏原郡南品川之端芝原地より  
右依佛地之形望永代八郎三郎之所補任之仍四至境  
東南八大道堺西八田堺北荒居道ヲ陽堀堺  
以之竹本可調植者也仍宛状出件

永享六年甲丑五月十三日

妙國寺別當沙坊

憲泰 判在

同 寄進武州荏原郡南品川妙國寺地より

右彼地此間七字不分明南着四波堀堺西着大々道堺北着  
塔中堺彼内畠同勢阿弥作畠一段并四廓より寄進地  
より寺家之内在之此外常金可作畠一段同東着海堺  
南着觀音堂垣堺西着大々道堺北着大堀堺為金澤  
智光院之沙菩提并為南小路雲光沙菩提永代彼寺に  
令寄進處之然間至子孫於此寄進者不可有異後  
仍寄附之状如件

永享十年戊午七月十八日

憲泰 判在

足利持氏將軍

武藏國荏原郡南品川妙國寺より附預之状出件

享德二年五月八日

從四位下 判在

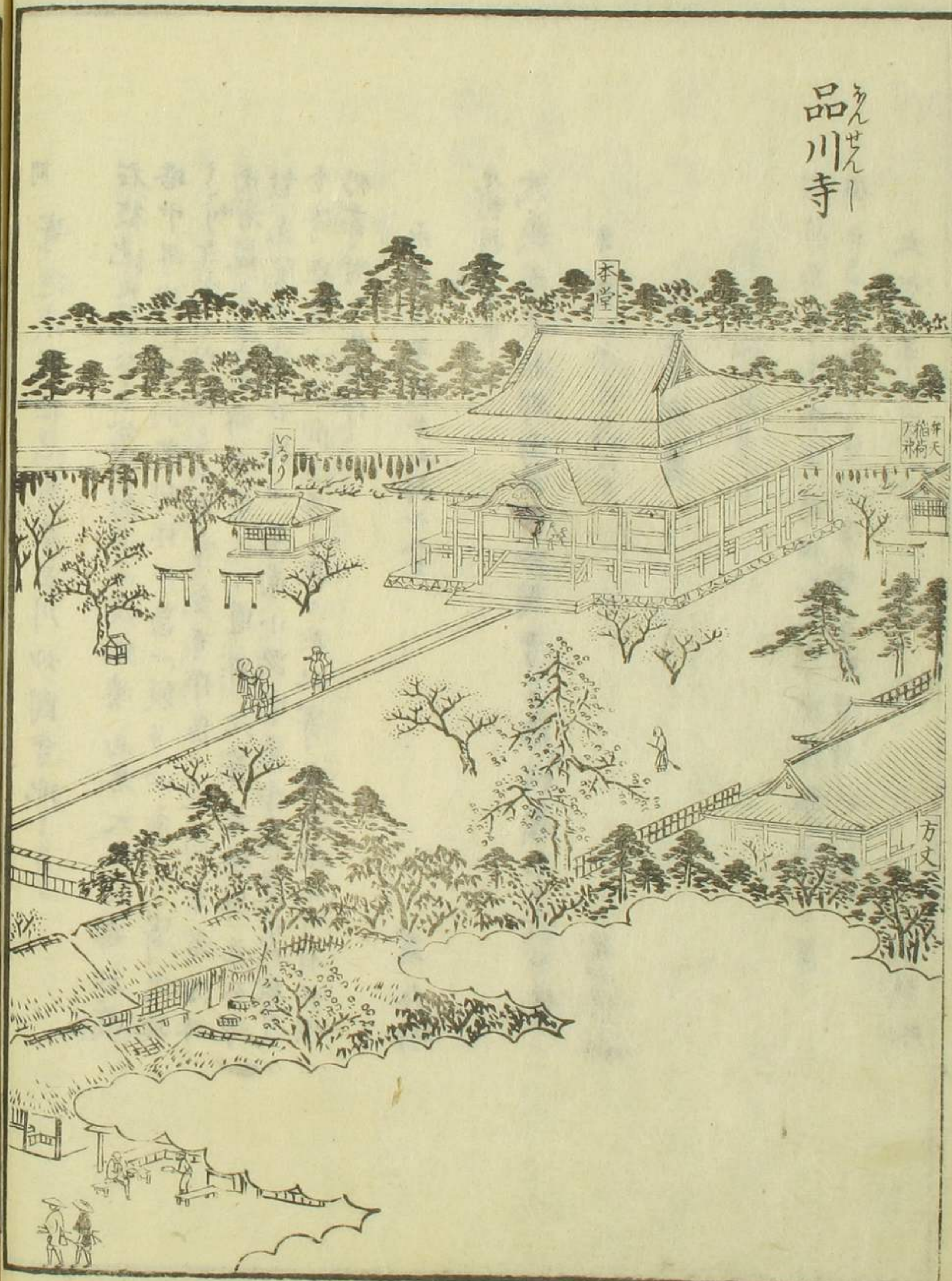
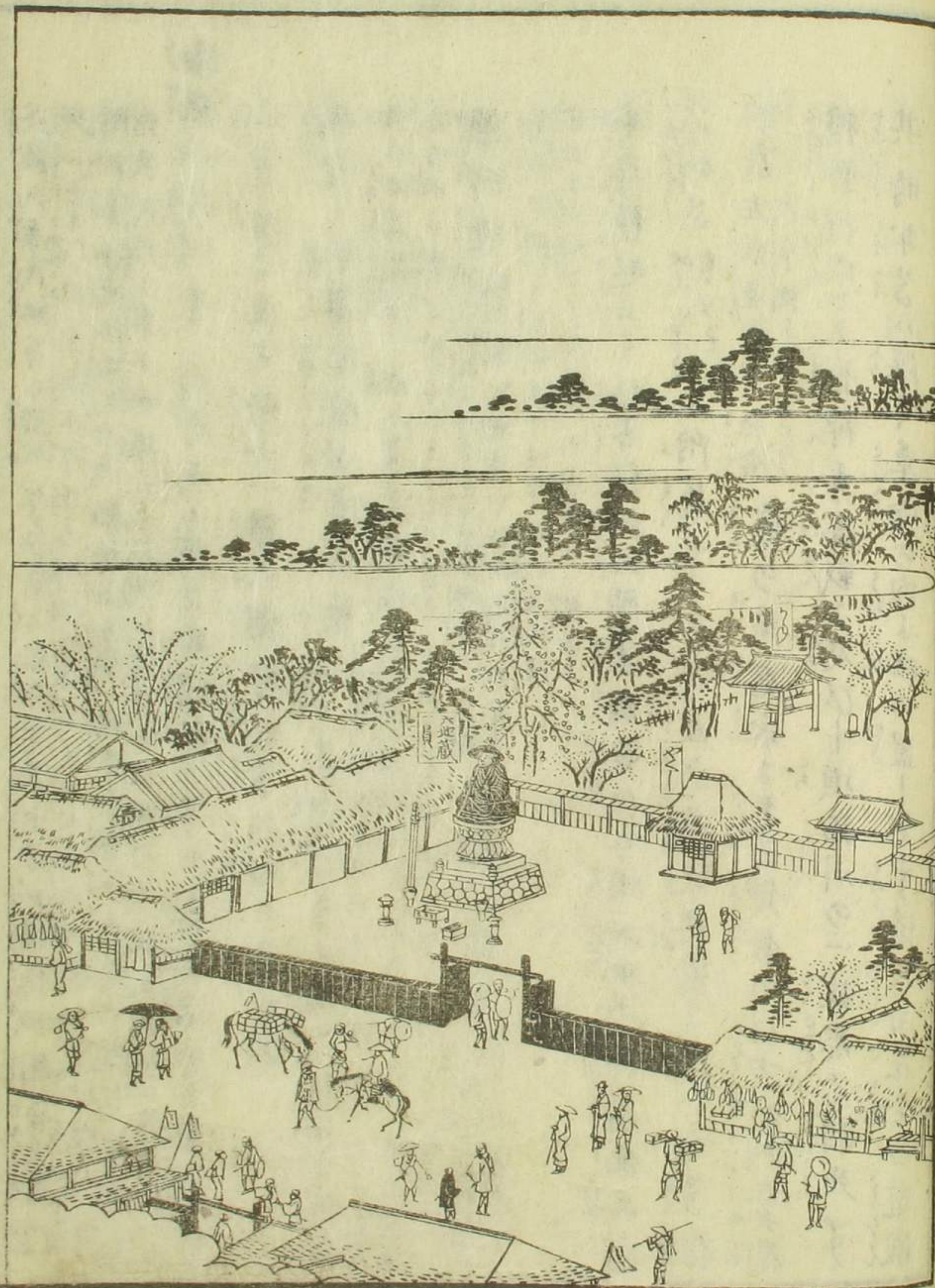
當寺別當

制札妙國寺

右該寺為寺手軍勢甲乙人等盤坊狼藉之輩  
停止之若至于違犯軍者之處罪科状出件

大永四年正月十二日

氏綱 判在



其餘氏康氏昭等の燈火のひ前上総介定景中務少輔持助開善左衛門  
總修理亮伊東右馬允石巻勘解由左衛門南条光範入道等の連判代連山  
海照山品川寺 同所南隣る普門院と号を真言宗中興部京師

三寶院は屬を岡山ハ權大僧都弘法印と号せり

本堂 本尊聖觀世音菩薩 海中より出現あり 圓淨檀金の靈像

世よ水月觀音と稱へる此靈像の利益感応のまゝなりハあり

藥師堂 中門の左あり 并に深淵あり 十二神 紫銅地藏尊 あり石を臺とす

本尊縁起云く 往古弘法大師東國遊化の頃此地の押領使品川

氏何某 此人の名は 附屬せり 同左京亮迄其家は傳へる信

推督持氏と上杉禪秀合戦及び一頃品川の一族悉く討死す

其時かきハ深く草堂の内ハ秘り置くと後太田左金吾道灌

品川の地を領せし頃深く此本堂を崇信し一字を建立し

大圓寺と号し夫より後又總倉管領上杉の両家不和中

關東大亂る依り諸の寺社破滅せり少かり永祿九年

小田原の北条氏政今川家へ加勢あり信玄と戦ふ時信玄武

藏の北の方より不意に押寄せ江戸城より品川を追捕し民

家を焼拂ふ此時甲州方の中より竹森蔭村とて二人の侍品

川觀音の御堂を焼く本堂を奪ひ甲州へ歸る其者大

狂亂し本堂元の地へ迂るべき旨威靈の示あり武藏ハ

敵地なるハ其便を好む一人の乞食の聖を頼り元の地へ還

座なりまるといふ御堂も焼亡しこれハ其礎石の跡を

地を求めり形をかりの草堂を營て造り安置なり

遙く年月隔り後兼應元年壬辰法印弘善堂宇を建立

し名を海照山品川寺普門院と号し今來日降普門示現の

千躰荒神堂



威力著く惠日の光煩惱の闇霧と破る感應の水月ハ長夜を照

按は妙國寺什室は存する所の永享十一年上杉憲泰寺境寄附の證文ハ南ハ觀音堂坂と畧とせとありて則當寺の觀音の尊と云なる也

千體荒神堂 同所半町をわたり南同海道の右の方海雲寺也

の禪林ありて本尊荒神の靈像ハ毘首羯磨天の真作也

昔九州肥後國天草荒神の原といふありて邪宗門一揆の

項邪徒等社と破却を故ありて當寺ハ勸請せしめしと靈驗

ありて衆人常々系詣す毎月廿八日を以て縁日とて祭礼ハ

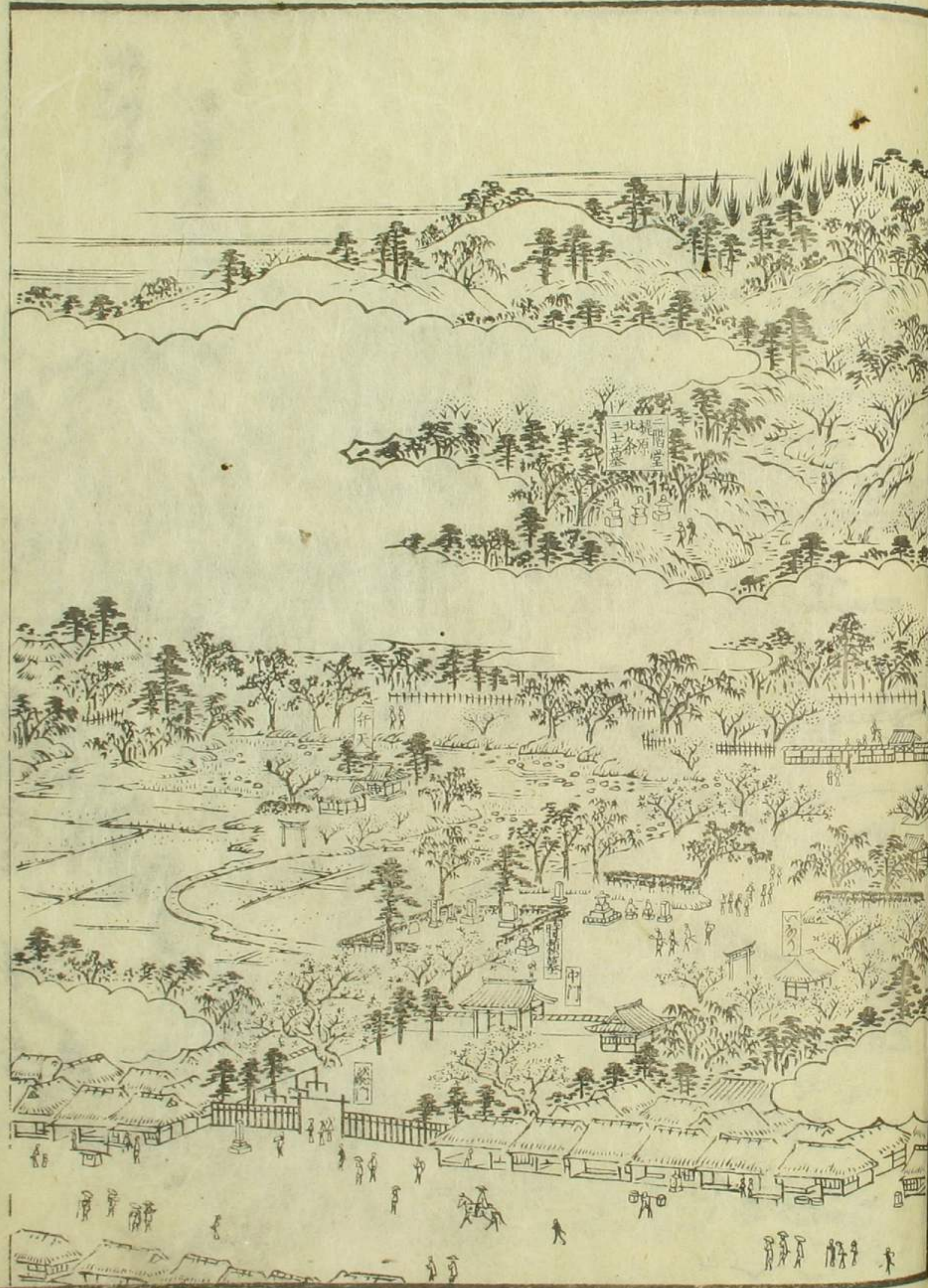
三月十一月共々廿八日なり

補陀山海晏寺 同所一町をわたり南海道の右にあり曹洞派の

禪宗の三田の功運寺ハ屬を北條相模守平時頼朝臣の

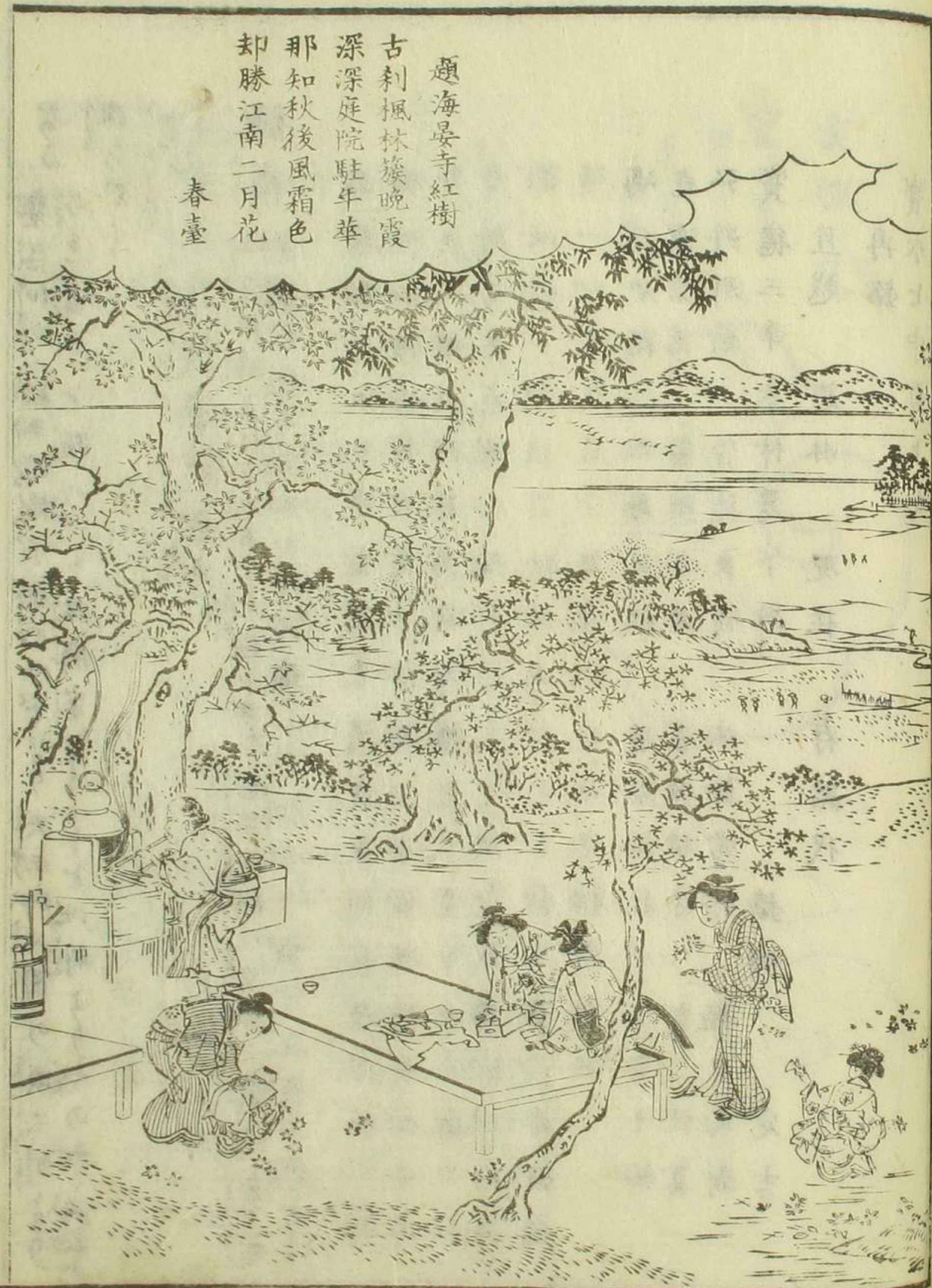
開基とて大覺禪師と開山と稱し古山和尚を第二世ハ

天叟慶存和尚慶長元年丙辰當寺を再興し中興也



海晏寺

題海晏寺紅樹  
 古剎楓林簇晚霞  
 深深庭院駐年華  
 那知秋後風霜色  
 却勝江南二月花  
 春臺



海晏寺  
 紅葉見之圖





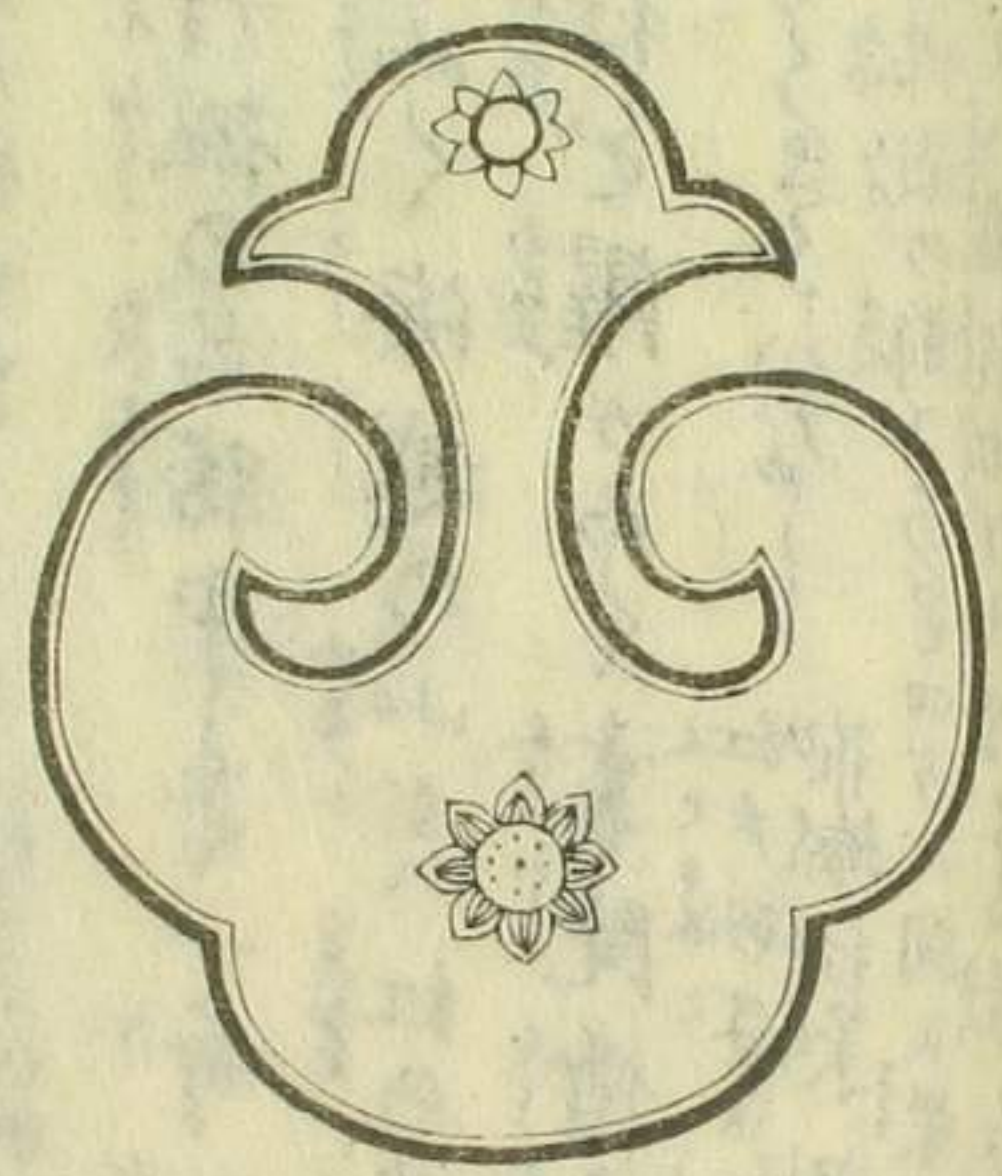
ある慶和尚八松平因幡守康元の子なり天正初年國の頃三州より  
 召も當寺を賜ふ曰く臨濟宗なりと此時より今のめく同家  
 改られし

本堂本尊鮫頭觀世音  
 本堂の前左の方より元禄十五年當寺田録の災より罹る舊鐘  
 鐘樓焼損を依り室永七年改鑄し往古の銘を其終に刻せり

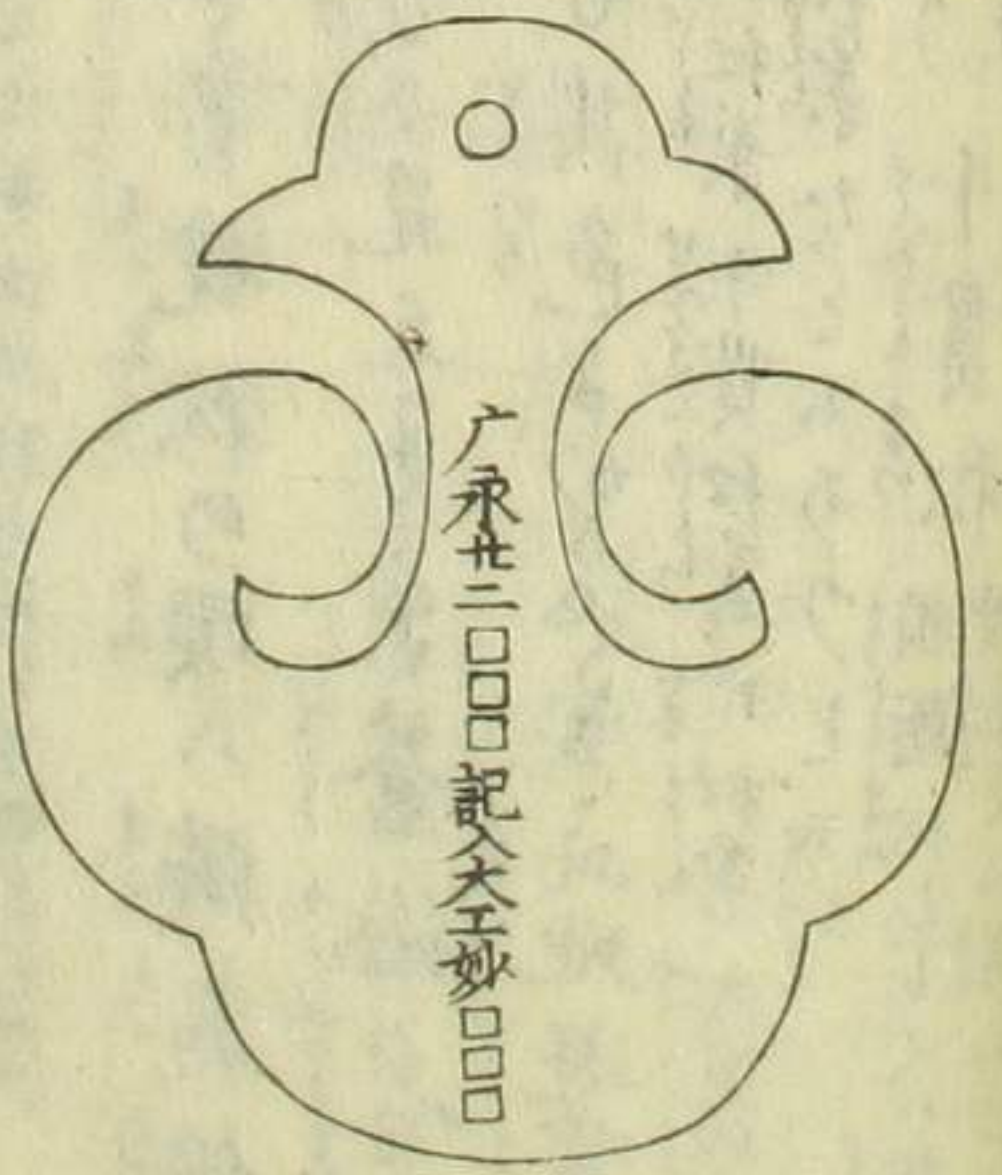
南膳部州大日本國關東道武藏州荏原郡品川郷  
 補陀山海晏禪寺差十方施主屢捨祥財聚銅金專  
 命良工鑄成佛器高掛層樓美哉堂々大器落落々洪  
 音斯迺見色明心聞声悟道之因是故鳴鐘相念偈  
 願此鐘声超法界錢困幽暗悉皆聞塵清淨證圓  
 通一切衆生成正覺是以虎溪老拙厥銘曰  
 鳴氏炉鞴四海九根當陽掛起法音千鈞  
 色透碧落響徹利塵法破睡夢忽性真  
 弘濟群類普結良臣法輪常轉佛日尚新  
 寶德三辛未仲夏下斡鑄師佛日尚新  
 且越道琳現住存紹代鑄師定吉  
 寶永七中夏上旬

雲版一口

高四尺四分  
 横二尺三分  
 蓮花大サ  
 二寸四分



背



元永二〇〇〇記天嘉〇〇〇

北條相模守時頼朝臣石塔  
 本堂の前右の方あり碑面不最明寺慶  
 寛政癸卯道崇碑陰弘長三癸亥十月

廿二日正五位下行相模守平元帥時頼と彫付てあり  
 按小東鑑弘長三年十一月二十二日松岡過去帳成刺入道五位下行相模守  
 平朝臣時頼三十七最明寺の北亭ゆく卒時をある今鎌倉山内ふある所此  
 禪興寺とある寺院ハ街古最明寺の旧地なる由鎌倉志よるなり當寺に  
 ある所の石塔ハ其模一々石碣の形淺世のものなり

二階堂出羽守石塔  
 本堂の後の山腹あり往古より當寺の門前ハ鎌倉

北条家迄ハ執権の中より關門の守護と大森の辺ハ屋形を建てる官人を  
 置れしなり故に此出羽守も其項呂川の守護と此地はあり一なる  
 當寺ハ香花院ハ此階堂出羽守三人とあり一ハ左衛門尉五位下出羽守行義入道道空  
 按よ二階堂出羽守三人とあり一ハ左衛門尉五位下出羽守行義入道道空

此号を文永五年閏正月二十五日歳六十六中卒元二八同後五位上出羽守  
行藤正安三年八月出家道曉と号元元八月二十七日卒歳五十  
七三八同從五位下出羽守入道道蘊吉野城攻の大将なり以上二階堂出羽守  
三人あり何れも是れなり然るも惣門の額に海晏寺と書せしむ  
寺僧相傳へ二階堂出羽守行氏の筆なりと云れ行氏ハ後五位下隱岐  
守正俊の私長三年十月出家一法名道智と号れ文永八年六月七日五十  
一歳なり卒

梶原平三景時石塔 同所小並入景時謀叛を討つに治二年庚申正月廿日  
甲子人等と一戰一竟は景時討死せしむ

北条左京權大夫平時宗石塔 同所小並入建宗を文永元年より時宗  
宝光寺殿道果大禪定門と号す 將軍執權次弟正安七年甲申五位下相模守平時宗  
三月廿日所勞四月四日出家法名道果同日酉時死三十五云

楓樹江戸丹楓の名勝ゆく一奇觀とて晩秋の頃ハ滿庭錦  
繡と晒せゆく海越の山々ハ紅の葉分不見えそそそと蒼海夕日小

映しゆく又紅を濯ぐゆく書院僧房も其色よかりゆく此地遊賞  
の人酔色なるともハな 江戶砂子ニ蛇腹紅葉 千貫紅葉 花紅葉 浅葉紅葉  
千貫牡丹 佛殿の前ニあり四方八間は榮えそと 千貫松 瀬朝松とも又ハ龍  
又ハ楓影向の牡丹とも号する

龍淵 庭前の池とてゆく 兩溪橋 池手洗池ニ架せ橋下の池とて蛇の  
蛇身ハ愛せ二世古山和尙教化して蓬萊山 方丈の庭の山と云北の方ハ昔を  
畜身を解脱せしむといふ 梶原屋敷 梶原家の石地藏 私法大師  
權現御手洗池 延命水  
明神森 山王社 八幡宮

**海晏寺**

總門額  
二階堂出羽守  
行氏筆

寺記云後深草帝御宇建長三年辛亥五月七日此地乃海  
中より敷一口漁夫の網よかりて揚れを腹中より正觀音の  
靈像を得るも此より鎌倉へ聞えしハ時頼朝臣希代に  
みとて是祥瑞なりとて其邊に佛閣を闡くと觀音の  
浄土なれハとて補陀山と号し四海安平の義よりて海晏  
寺とせしむ瑞林瑞應廣正東悦等の四院をも造営あり同  
六年の春諸堂落成し翌る七年入佛供養を修行せ敷の

地を鯨濱と云ひ又鯨頭嶺と云ひ海の方へ百八十間余  
南北へ八町の洲崎なり依り鯨洲崎と云ひ江戶砂子あり  
町東西十町の地を寄捨あり五箇の僧坊は百八十貫文を附せ  
りる八十宇の房舎ハ巍然と云く覺をなす又天竺の靈鷲  
山は準へ南紀の高野山に擬しあひら有信の輩ハ月牌を置石  
塔を建 弘安五年ハ北条時宗願主とて堂塔重修  
され月牌料とて二十貫文寄附ありと云り  
殊更重罪の輩たり  
とも當寺は入者ハ其罪を免許せしめ則を定め山庫僧供ハ四  
方十里の間頭陀の免許ありと云り  
往古當寺開創の頃松樹各二十  
株を植洲崎ハ八幡三社を當り  
建其松の枝葉は路を覆ひて繁茂せし其頃郷童の唄ハ西川浦ハ名所なり  
海晏寺前のまうら松樹代もさうさくめと云り  
鄙言擧ふ不堪と  
云くとも老と云くとも小と云くとも

鯨頭明神祠

砂水の海濱あり祭神詳なく土俗傳へ云往古

此地一丈餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流せし

りハ此鯨の祟なりと恐怖して漁人其頭を一社の神に祀り

按此祭神を鯨の頭と云るは恐らく海晏寺本尊の縁起は混し附會  
せしなり或人云く砂水昔ハ鯨洲は作りしと云り鯨洲の明神と云へ

佳なるん或冊子云く此所は佐美津川と云く細き流の瀬と交らそく佐美津

上古海道

品川より池上へ行道大井あり北の方東海寺南門に

向の谷往古の品川の驛路なり

矢口と云きし路なり今も八景坂あり西南池上へ行道ハ昔の一里塚の榎一株

式大井驛傳馬の證と云へ

延喜式曰 諸國驛傳馬 中略 武藏國驛馬 店屋 小高

海賞山來福寺

砂水御林町あり真言宗中々本尊ハ地藏

菩薩を安置を弘法大師の作 佛丈九 あり梶原氏の草創也

則此地ハ其宅地なりと云る縁起云此本尊ハ梶原氏代其家ハ

相傳く尤靈威なり然元亨の頃智辨と云沙門眼疾を患ひ

此本尊を祈念し不日ハ本快を得り其後世の中大子乱るハ

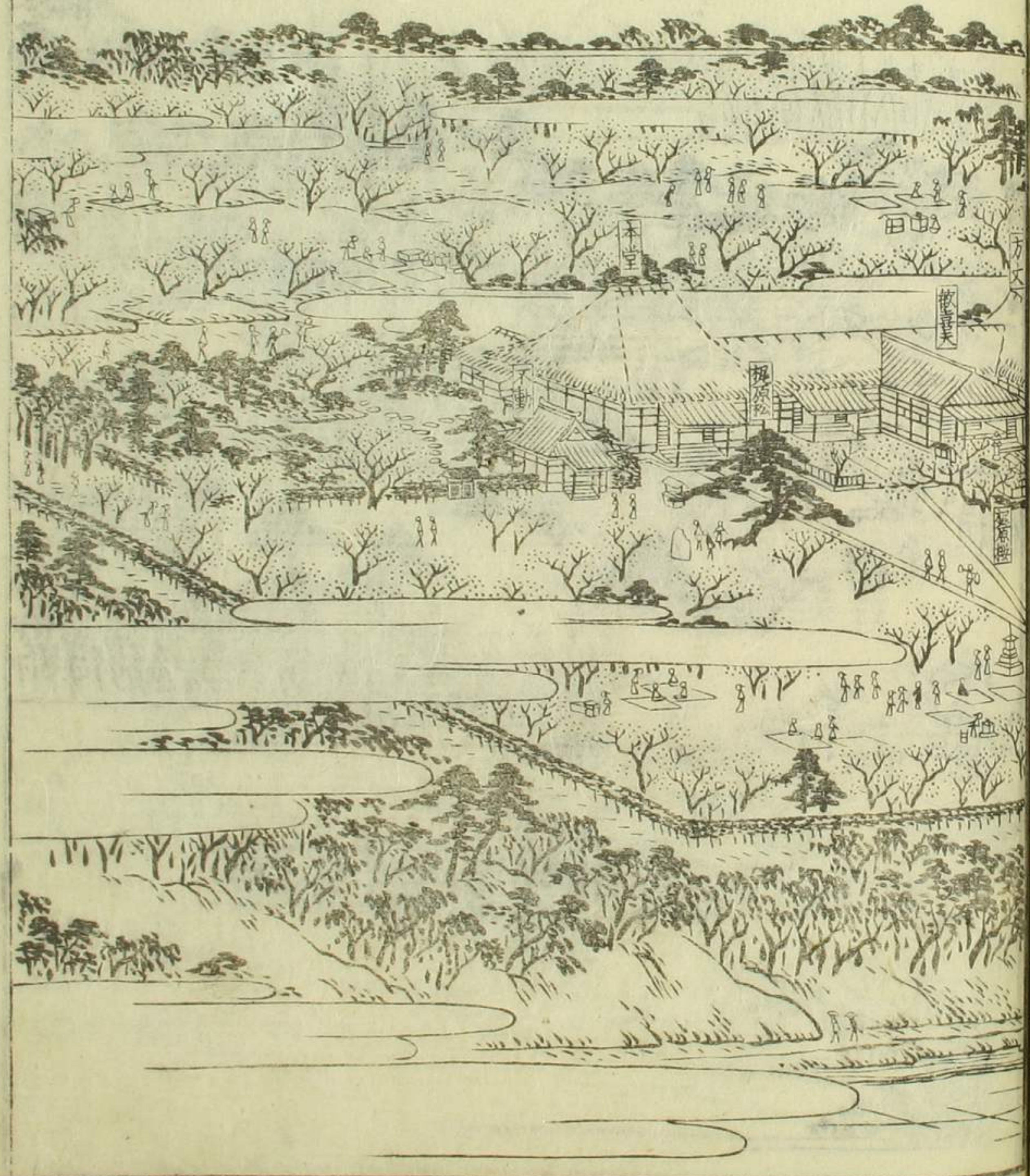
本尊の所在をれりハ小文龜年間梅巖阿闍梨當寺より四五町

西の方徑塚といふ地中これを感じ得せと云り

徑塚の由来ハ  
次ハ詳なり

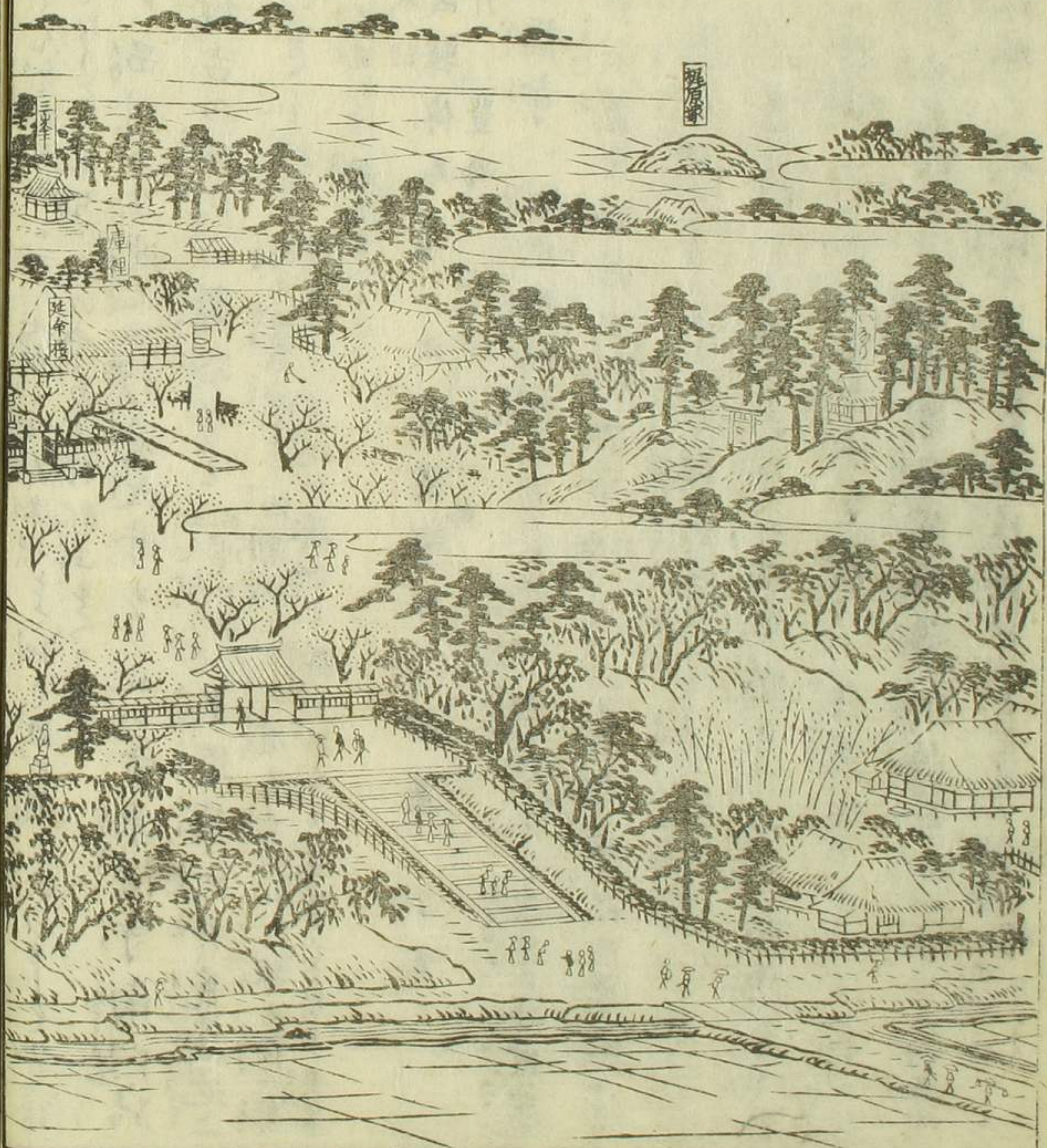
雪中菴  
蓼太

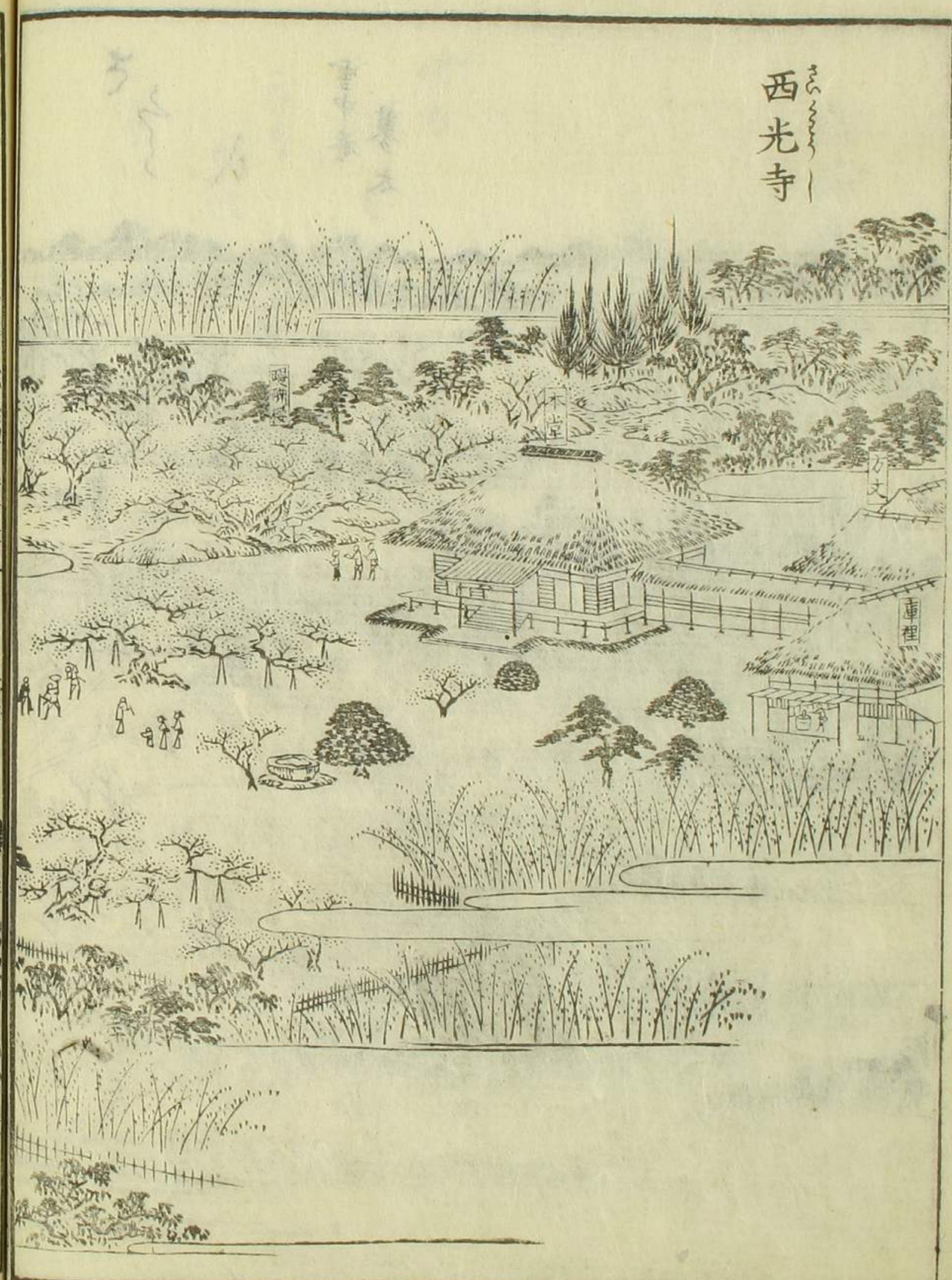
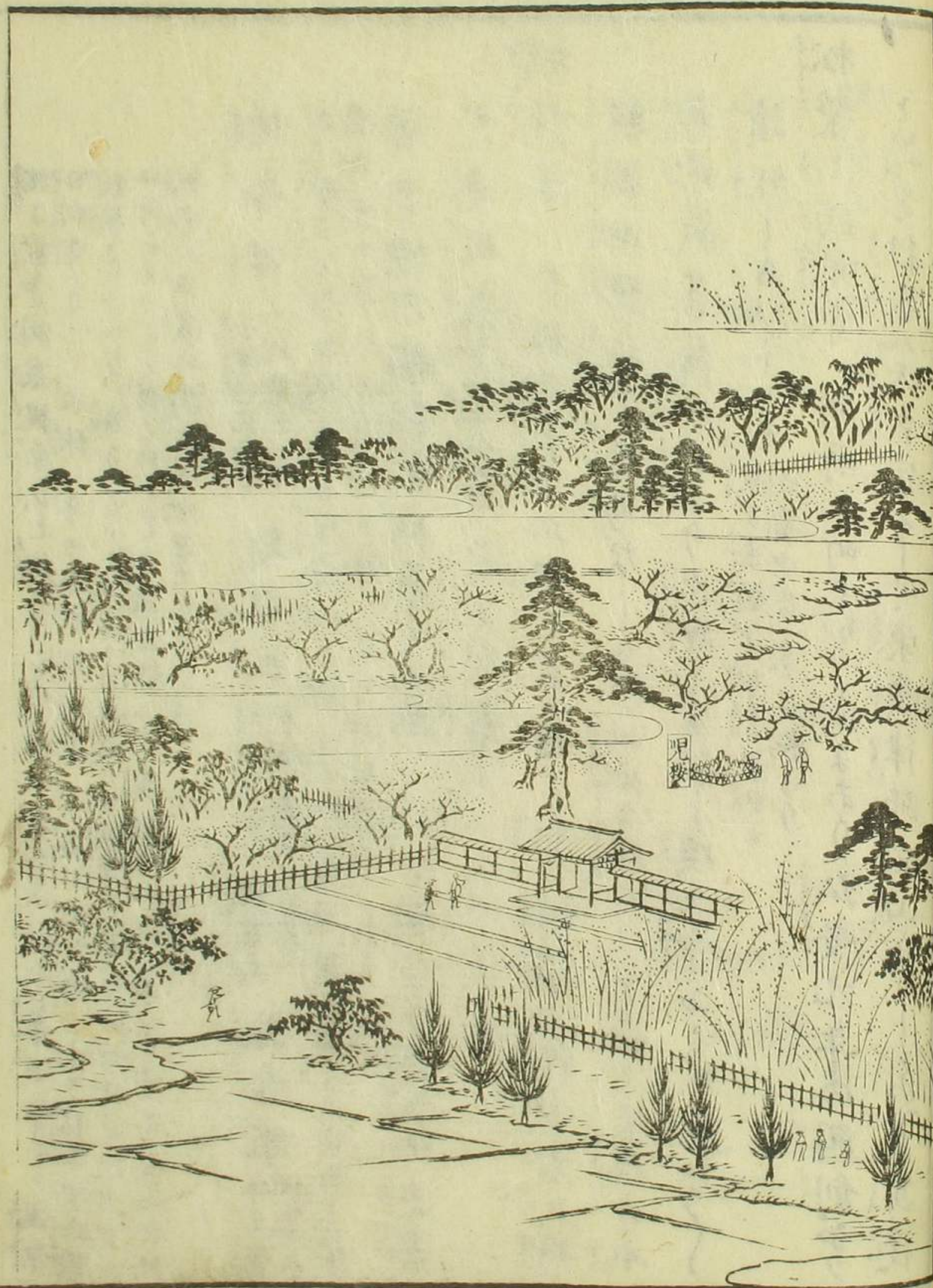
そ  
ろ



来福寺

世の  
中  
ろ  
ろ





此寺は當寺開基梶原氏と稱するもの、小田原北条家の幕下たり。梶原  
 日向守なる一、永祿二年の頃六郷内新井宿の地を領せしむ。北条家所領  
 役帳より見ると是より考ふるに、此所は日向守の采邑の地なり。又其宅は  
 此所ありしと思はれ、土氏お侍りて、其宅の跡跡ハ來福寺あり。ハ砂水  
 松平土佐族の別荘の地なりとも云り

延命 櫻 本堂の左の方 梶原松 同所あり 梶原氏 梶原塚 寺の後  
 あり塚上ニ杉を植へり此辺農氏の構の中ニ梶原塚と号するものあり是  
 其氏族の墓所なり其族の石塔當寺あり

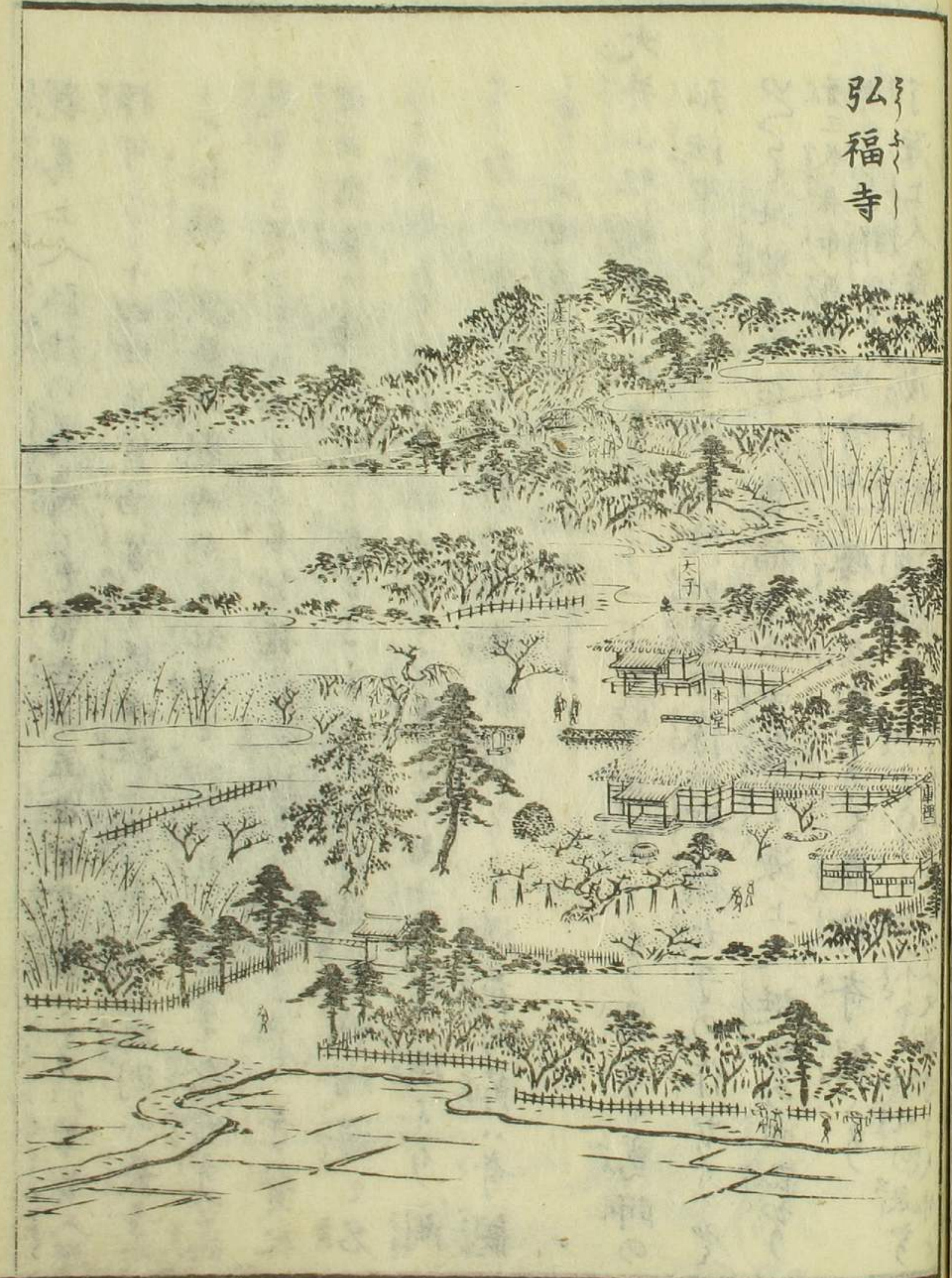
當寺境内櫻樹數株ありて悉く品を領り弥生の花盛  
 ぬハ遠近蕙を慕ひてあふ遊賞も人少りす

納経塚 來福寺より六町を西にあり相傳へ往古右大将  
 頼朝卿佛經を書寫なす此地は収らるるなり來福寺本

尊地藏菩薩此所より出現し一頃土中にて夜な  
 讀經し一ひしとを 故に來福寺を世に 經讀地藏尊と稱せり

松榮山西光寺 同所二町をかり南にあり弘安九年の開創を  
 とし往古八天台宗にて榮順律師開山たりとあり其後

弘福寺



大井おおい



親鸞上人弘法の道場と當寺十五世を空善と号し芳賀入道  
 禪可より十四世芳賀伯耆守後五位上清原真人元則の長子小  
 して俗稱ハ武藏五郎西光又幼名を伯玉丸と号へる今當寺を西  
 光寺と号す此西光の名を摘み号けたる一寺寶に  
 武田信玄の陣羽織と稱するものを収む庭前醍醐櫻と名  
 する老樹あり花ハ單瓣中々立春より七十日目の頃より開  
 ちむ其餘却々への櫻の老樹数株あり満花の節ハ奇觀  
 あり此地第一花の名所なり

大井山弘福寺 西光寺あり一丁をかり西南より當寺ハ鸞師の  
 弘法中々中々阿彌陀如来の像ハ聖德太子の作なり也  
 此地ハ麻布山善福寺の中奥了海上人誕生の旧跡あり  
 茅三卷麻布善福 當寺ハ櫻の老樹あり春時奇觀なり  
 寺の下ニ詳なり 了海上人產生湯井 横ハ岳の下ニ又當寺ハ大井と

同三郎等の名あり何れ此地より起る人も東鑑に大井太郎光長同次郎實春

鹿島大明神社 同所一丁を西にあり社記に云く當社ハ安和二年

己巳九月十九日常陸國鹿島の御神を遷し奉ると云く別當也

山常林寺と号し天台宗也東嶽山に屬せり本尊ハ藥師如來

慈覺大師作開基ハ尊榮法印なり貞和三年丁亥再興す了覺

阿闍梨也中興と稱せり境内櫻多く春時一奇觀也

本地堂 智燈大師の作ありと云く

古鵜口 別當常林寺に取む松女故白とある上の文字にむつらに按ふ

奉寄進武州荏原郡大井郷鹿島宮鵜口 寛正二年癸未十一月日掃松女故白

鈴森八幡宮 同南の方繩を隔て十町あり不入斗村あり

號するものハ和名抄に所謂 祭神中殿應神天皇 左殿仲哀天皇 不入斗村

餘戸とありの則是れ一 祭神中殿應神天皇 右殿神功皇后 總社盤井

神社とも稱せり 別當ハ真言宗也 八幡山密嚴院と号し

神主ハ森田氏なり

按は當社ハ延喜式に當國風土記殘編等に載る所謂磐井神社是れ也 後世に至り祭る所の神心定ありと云くハ磐井は因て石清水正八幡宮を 勧請せしむる

武蔵國風土記殘編云 圭田三十六束二字

武蔵國荏原郡磐井神社 圭田三十六束二字

田敏達天皇二年癸巳八月所祭大己貴命也社

造有磐井祈事土俗有妄願則御手洗井水變之

味事正直則如清水近國奇之祈病者取之服之

其功實錄云 神土俗曰藥水云云

貞觀元年冬十月七日己丑幾内幾外諸國遣使

班幣於天神地祇去九月無風雨之災誠有感

於歲以有年仍賽之武蔵國從五位下磐井神列

鈴石 當社はあり相傳ふ他の石をこのと撃ハ其石鈴の音ありと當社

傳記に此靈石は遠遊記行は此社に舊有一石轉之則其聲如鈴とあり或ハ

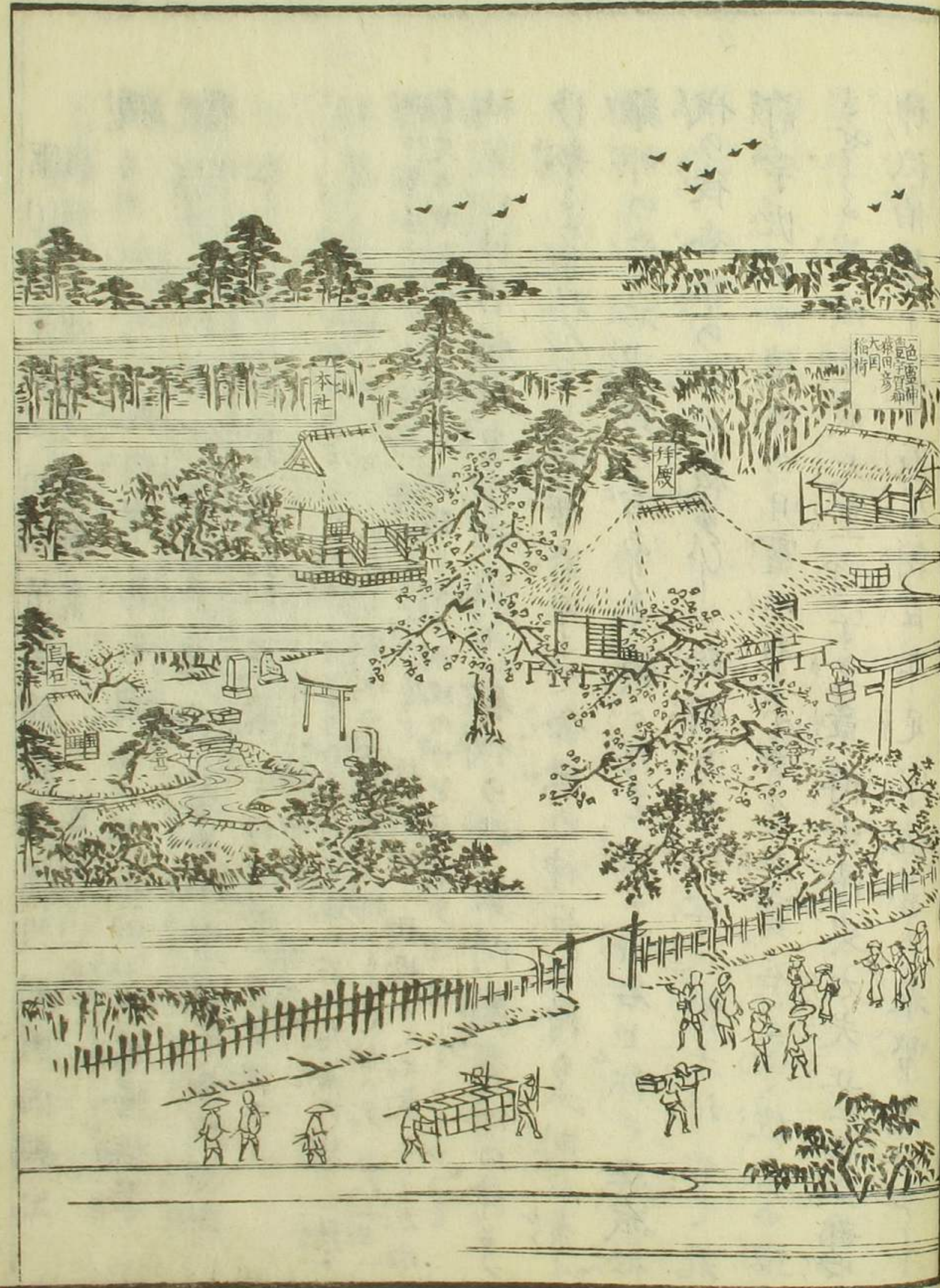
云昔の石ハ賊の爲に奪はれたり云 烏石 社地の左の方あり四五尺あり石の角は南朝先皇の銘あり烏石葛原是を鑄

を記せり葛原自り烏石と号せり此石を愛せしより後此地へ遷すとあり書

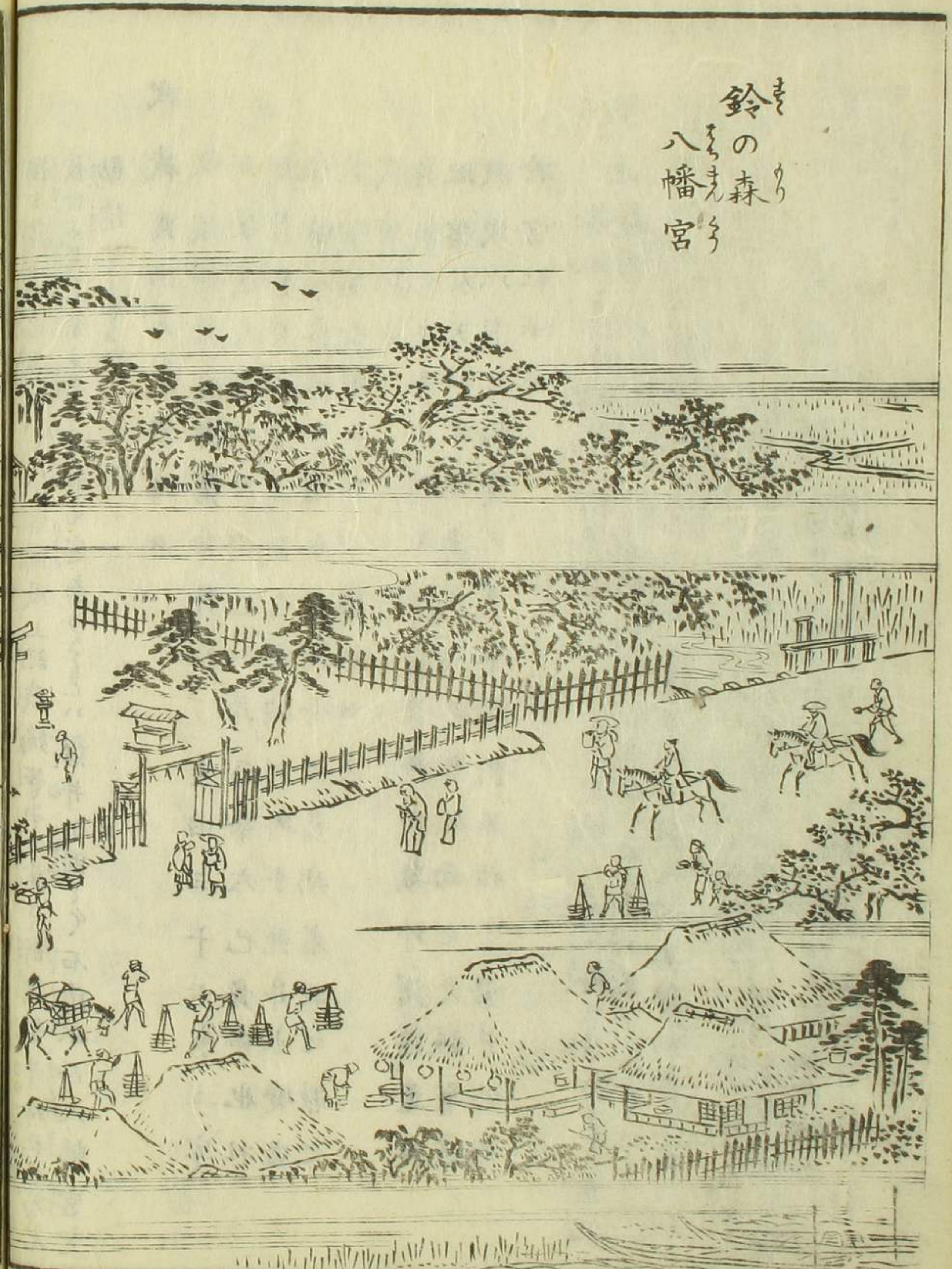
舊麻布の古川町より三田の方へ移すの三辻ありと云く

古篆なり





鈴  
 の  
 森  
 八  
 幡  
 宮



匪<sub>一</sub>匪<sub>二</sub>星<sub>三</sub>昌<sub>四</sub>石<sub>五</sub>而<sub>六</sub>條<sub>七</sub>不<sub>八</sub>黃<sub>九</sub>維<sub>一〇</sub>昌<sub>一一</sub>魯<sub>一二</sub>隸<sub>一三</sub>到<sub>一四</sub>死<sub>一五</sub>而<sub>一六</sub>祠<sub>一七</sub>出

額<sub>鳥石</sub>阿野公繼卿筆鳥居額鳥石祠吉田二位兼隆卿筆

聯<sub>左君</sub>新<sub>右君</sub>秘<sub>左君</sub>的<sub>右君</sub>珠<sub>左君</sub>之<sub>右君</sub>島<sub>左君</sub>而<sub>右君</sub>梅小路三位參議定福卿

僊降蒼海欽森風

石華表六七町東の方今海面となり中昔の頃遠ハ石の鳥居の柱の礎は水面に顯れあり寶永の大地震は折りて今見たり石治

社記曰往古神功皇后三韓涉征伐の時長門國豊浦の津より

涉<sub>舟</sub>舟<sub>よ</sub>を<sub>れ</sub>んと<sub>一</sub>其<sub>二</sub>海<sub>三</sub>邊<sub>四</sub>中<sub>五</sub>て<sub>六</sub>含<sub>七</sub>珠<sub>八</sub>の<sub>九</sub>神<sub>一〇</sub>石<sub>一一</sub>を<sub>一二</sub>得<sub>一三</sub>り<sub>一四</sub>則<sub>一五</sub>石<sub>一六</sub>青<sub>一七</sub>く

雞<sub>卵</sub>の<sub>也</sub>石<sub>中</sub>鈴<sub>の</sub>音<sub>あり</sub>錡<sub>たる</sub>故<sub>も</sub>鈴<sub>石</sub>と<sub>稱</sub>も<sub>異</sub>賊<sub>征</sub>

伐<sub>の後</sub>香<sub>推</sub>の<sub>宮</sub>小<sub>藏</sub>ゆ<sub>ひ</sub>う<sub>欽</sub>明<sub>天</sub>皇<sub>御</sub>宇<sub>八</sub>幡<sub>大</sub>神<sub>始</sub>て<sub>筑</sub>

前<sub>宇</sub>佐<sub>宮</sub>は<sub>鎮</sub>座<sub>の</sub>日<sub>靈</sub>示<sub>あり</sub>此<sub>實</sub>石<sub>を</sub>宇<sub>佐</sub>宮<sub>の</sub>遷

其<sub>後</sub>聖<sub>武</sub>天<sub>皇</sub>御<sub>宇</sub>文<sub>章</sub>博<sub>士</sub>涉<sub>史</sub>太<sub>夫</sub>正<sub>二</sub>位<sub>文</sub>部<sub>の</sub>

神<sub>祇</sub>伯<sub>勲</sub>十<sub>二</sub>等<sub>石</sub>川<sub>朝</sub>臣<sub>年</sub>足<sub>宇</sub>佐<sub>宮</sub>の<sub>奉</sub>幣<sub>使</sub>たり

時<sub>ハ</sub>幡<sub>大</sub>神<sub>再</sub>ひ<sub>靈</sub>告<sub>あり</sub>依<sub>之</sub>此<sub>靈</sub>石<sub>を</sub>年<sub>足</sub>の<sub>家</sub>は<sub>移</sub>り

崇<sub>信</sub>は<sub>嫡</sub>孫<sub>中</sub>宮<sub>太</sub>夫<sub>從</sub>四<sub>位</sub>中<sub>納</sub>言<sub>豊</sub>人<sub>卿</sub>桓<sub>武</sub>天<sub>皇</sub>の

延<sub>曆</sub>年<sub>中</sub>武<sub>藏</sub>守<sub>は</sub>任<sub>せ</sub>る<sub>當</sub>國<sub>は</sub>下<sub>向</sub>荏<sub>原</sub>郡<sub>に</sub>在<sub>せ</sub>り

頃<sub>終</sub>り<sub>此</sub>地<sub>を</sub>封<sub>じ</sub>て<sub>當</sub>社<sub>を</sub>徑<sub>營</sub>し<sub>神</sub>石<sub>を</sub>鎮<sub>座</sub>なり<sub>是</sub>乃<sub>是</sub>

當<sub>社</sub>是<sub>れ</sub>故<sub>に</sub>宮<sub>地</sub>を<sub>鈴</sub>石<sub>森</sub>と<sub>云</sub>其<sub>後</sub>清<sub>和</sub>天<sub>皇</sub>御<sub>宇</sub>貞<sub>觀</sub>

年<sub>間</sub>八<sub>幡</sub>宮<sub>宇</sub>佐<sub>宮</sub>より<sub>山</sub>城<sub>國</sub>石<sub>清</sub>水<sub>は</sub>鎮<sub>座</sub>在<sub>る</sub>とき<sub>六</sub>十

餘<sub>州</sub>國<sub>毎</sub>に<sub>總</sub>社<sub>ハ</sub>幡<sub>宮</sub>を<sub>擇</sub>定<sub>賜</sub>み<sub>依</sub>り<sub>武</sub>藏<sub>國</sub>に<sub>於</sub>て<sub>ハ</sub>

當<sub>社</sub>を<sub>以</sub>て<sub>總</sub>社<sub>と</sub>す<sub>とい</sub>ふ

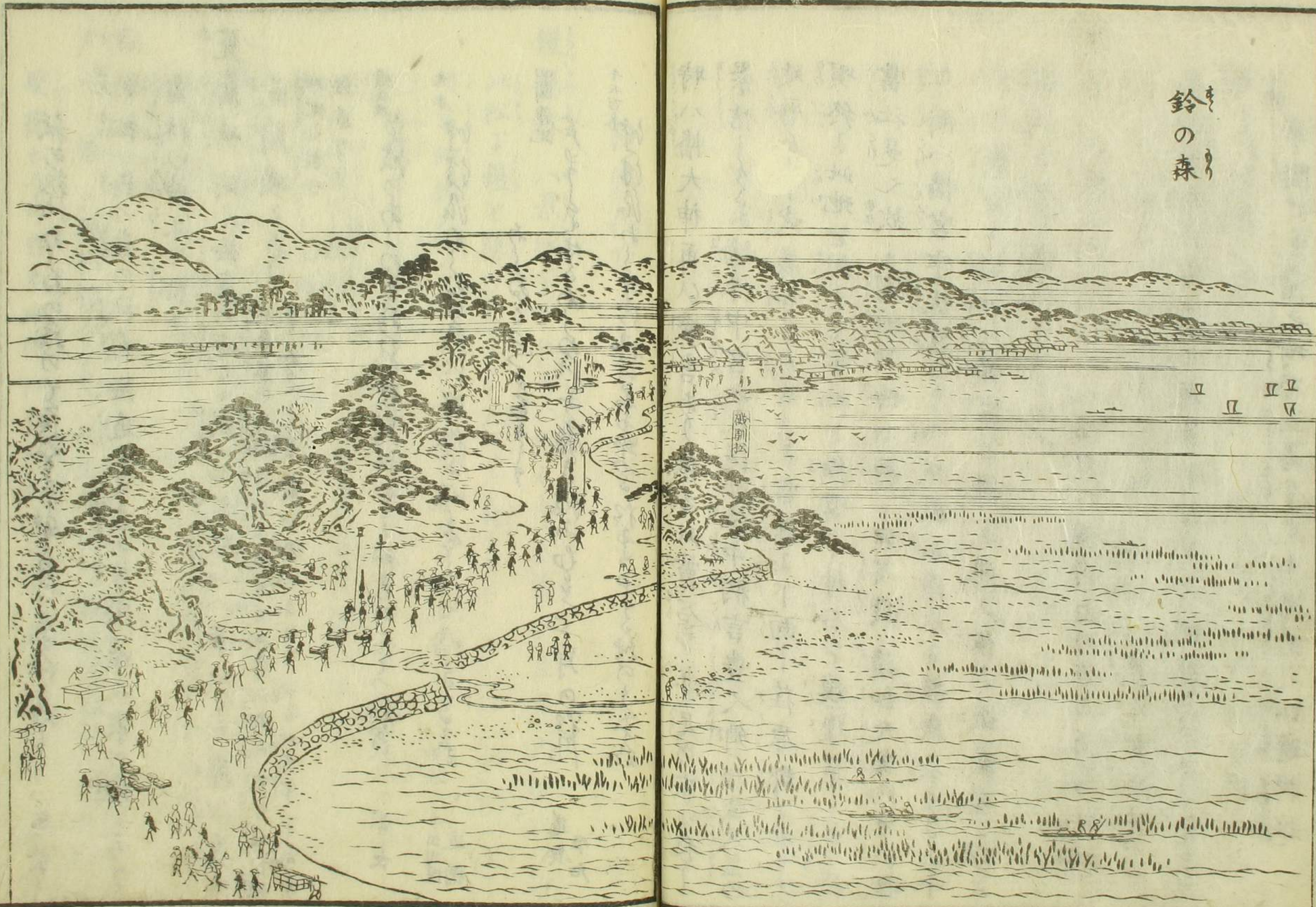
笠<sub>島</sub>鈴<sub>森</sub>の<sub>地</sub>を<sub>以</sub>て<sub>八</sub>幡<sub>宮</sub>の<sub>境</sub>内<sub>左</sub>の<sub>方</sub>は<sub>笠</sub>島<sub>神</sub>社<sub>と</sub>

稱<sub>せ</sub>る<sub>その</sub>あ<sub>れ</sub>と<sub>も</sub>定<sub>ま</sub>り<sub>祭</sub>る<sub>神</sub>六<sub>前</sub>豊<sub>宇</sub>賀<sub>姫</sub>猿<sub>田</sub>彦

菊<sub>理</sub>姬<sub>天</sub>滿<sub>宮</sub>淡<sub>島</sub>鹿<sub>島</sub>等<sub>乃</sub>奥<sub>州</sub>笠<sub>島</sub>の<sub>神</sub>と<sub>等</sub>き<sub>欽</sub>

未<sub>だ</sub>を<sub>考</sub>へ<sub>ず</sub>草<sub>陰</sub>之<sub>荒</sub>蘭<sub>之</sub>埼<sub>乃</sub>笠<sub>島</sub>乎<sub>見</sub>乍<sub>可</sub>君<sub>之</sub>山<sub>道</sub>將<sub>越</sub>

鈴  
の  
森



秋の松花あゝの松のまきとさゆり月ハまけしめ 為家

磯馴松 鈴の森の社前海道より左の方海濱人家の前よりあり

當社の神木と称せ

荒蘭崎 同く鈴森の邊とも或ハ云木原山ハ景坂とも 藻汐草に

荒蘭磯とあり 北条家の所領役帳に梶原日向守六郷内新井宿を領

此地ハ古の 海道なり

續後撰 白波のあゝの松花磯列松をぬきのくつれ丸 家長

夫木 沖津浪あゝの松花磯列松をぬきのくつれ丸 今出川院 近衛

四國雜記 あゝのくつれ丸

千五百番 道與 准后

沖津浪あゝの松花磯列松をぬきのくつれ丸

沖津凡ゆる舟の浦より松のうもくもす人々き 信實

鎧懸松 ハ景坂よりあり往古ハ幡太郎義家朝臣奥州征伐の時

此松ハ鎧を懸らせしと云傳ハ高さ六七丈あり大と牛とを

枝葉柳條のゆく垂下りて地を離るる其間ハ四五尺ハ過せ

尤比類なき古松あり一ハ荒磯松磯馴松とも呼ば或ハ震松とも

号く 枝葉共ハ動揺せし此地より望めハ海上眼下よりあり美

景の地なり 土俗ハ景を誤りて

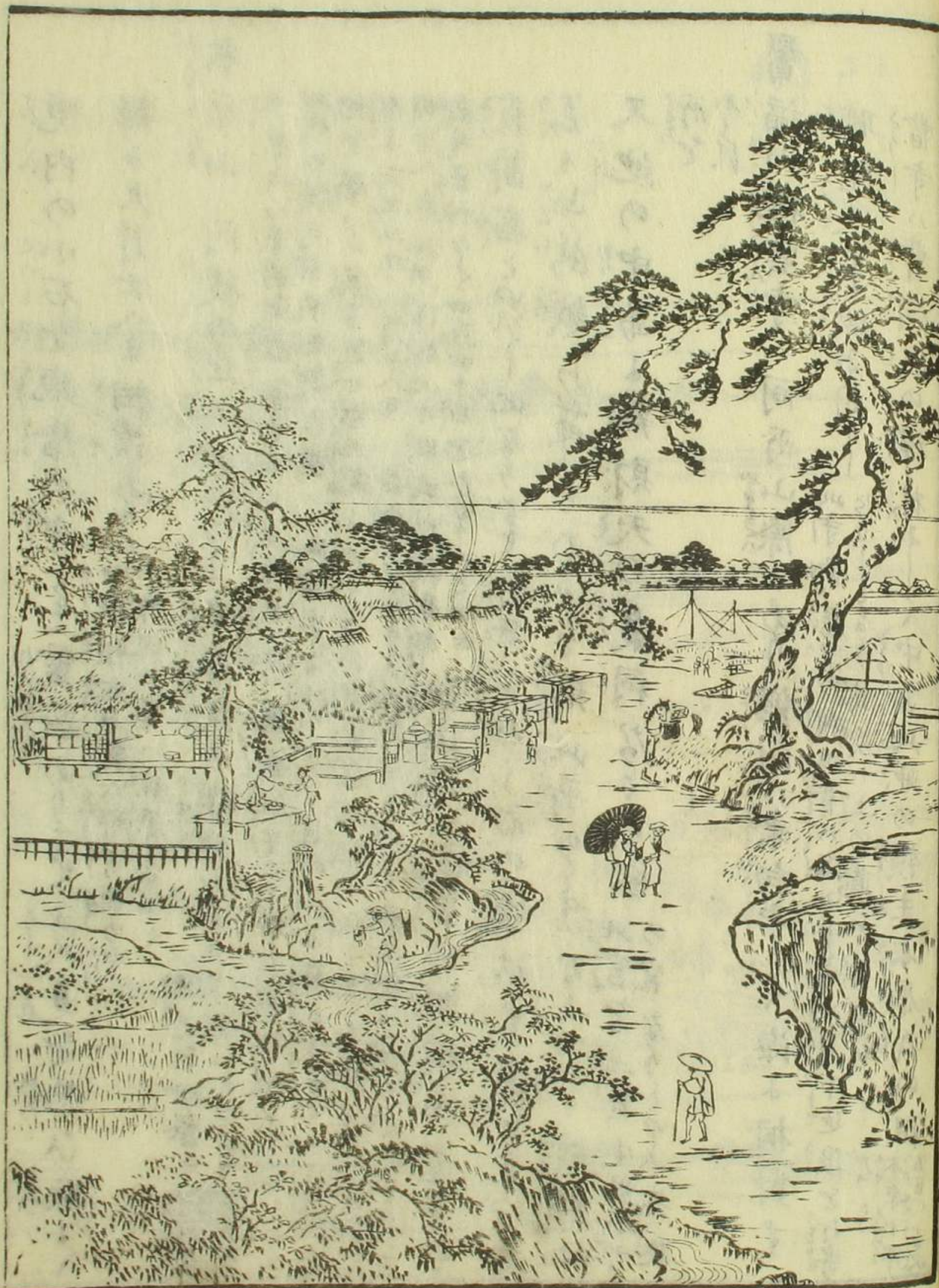
八幡山行慶寺 大崎より東海寺裏の方戸越村よりあり文祿元年

立淨土宗中々 岡山念譽上人戸越八幡兼帶なる願成院と号

梶原氏竹室

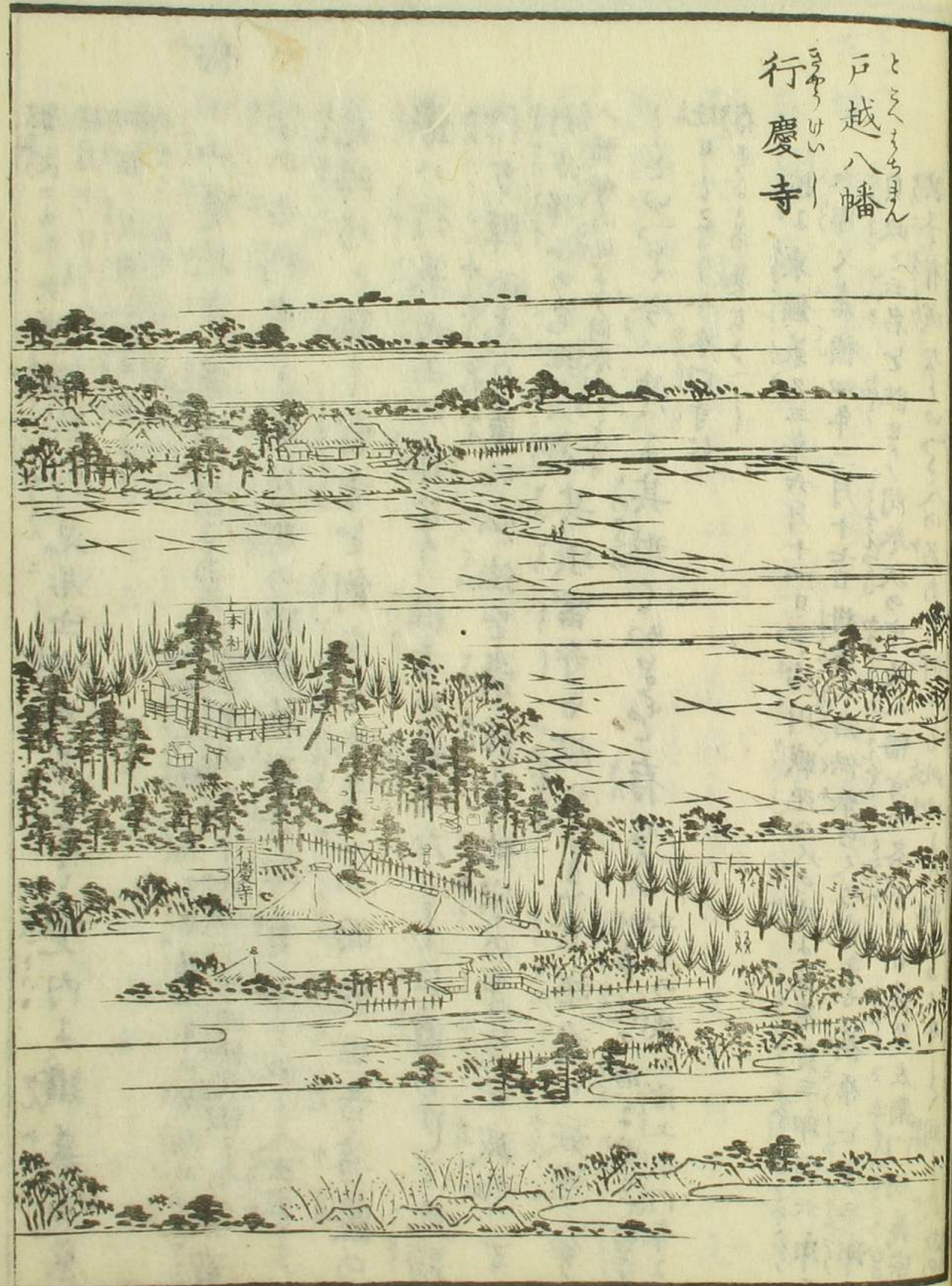
戸越八幡 戸越村鎮守なり 天文年間鎮座ありと云御正躰を

聖徳太子の作本地佛阿弥陀如来の像ハ春日の作なり當社



ヤ  
八景坂  
鏡掛松

戸越八幡  
行慶寺



境内の小石を疱瘡の寺とて靈驗ありとて土人は是を拾ひ取  
 歸る九月廿八日相撲あり  
分限帳太田新六郎所領の中  
 六郷内戸越ハ梶原欲云

木原山 同後の丘山とつり木原氏の領地なり  
祖先を伊豫の河野の  
 族とつり誤り

木原氏の系図を歴観を云く木原氏姓ハ穂積祖先を鈴木掃部介吉行とつり  
 四代の後同苗平兵衛吉頼 御當家ト仕へたり 遠州山名郡木原五貫文の  
 地を賜り其子を七郎兵衛吉次と号し其采邑木原ト住し 伊普請方を勤む  
 然天正三年二月十八日 台命あり 在名とつり 鈴木氏と改め木原と号す  
 桐十八年江戸浪打人の時 武州荏原郡 此山頂ハ上古の相模街道や  
 新井宿村や四百四十石をたす云云

荒蕪宿といひ地なりと古哥トありぬの崎ハ釜巻とつり  
 又池の中島ト辨財天の叢祠なりとある 則此所のつりなる一熊野社  
此宮を土民小野ト  
 の宮なりとつり其地

醫福山桃雲寺 同所山際トあり徳門ハ東向中々海ト相對す

眺望八景坂ト同一 此寺前崖下の耕田昔ハ海トつり此崖下迄浪を打寄  
 當寺ハ曹洞派の禪林や中古此地の領主木原氏の祖ト云云

慶長十五年庚戌 桃雲淨見居士中興せし境内墳墓あり

福

田山蓮花寺 蓮沼村あり 此地六郷に属す永禄二年の頃雄田真言

宗の古刹中々荏原郡の地頭荏原兵部有治と云一人出家と

蓮沼坊と號し當寺を創立す本寺十一面觀世音菩薩の

像ハ行基大士の作なり往古ハ巍々たり巨藍ありしが地頭

行方彈正忠日蓮の弘法を崇信し他宗の寺院を滅却す

行方彈正の宅地ハ六郷 其頃當寺も焼亡す堂塔悉く灰燼とす

八幡塚の辺に同卷の遺跡あり 此争乱の時當りて當寺

存せしなり今本門寺に 二王の像ハ池上本門寺に

按東鑑兼久三年六月十四日宇治川戦死の人中は荏原弥三郎同六郎

六郎又嘉禎四年二月十七日將軍入浴供奉の人中中も荏原七郎三郎

貞政と云名を註せり同卷次の中延八幡宮の条下も荏原左衛門尉義宗

其子有成なりといふ人の名あり何れも此地より出づる人なりといふ

女塚 女塚村農氏太左衛門の地あり相傳往昔竹澤右京亮新田

義興を害せん為都より宮方の御所の少將殿と申上臈の女房

年十六七計なる美女を呼下し義興もなす又其後九月十三夜

義興を己う宅に迎へんと謀し小彼女凶兆ありとて是をどしむ

輦

長榮山本門寺

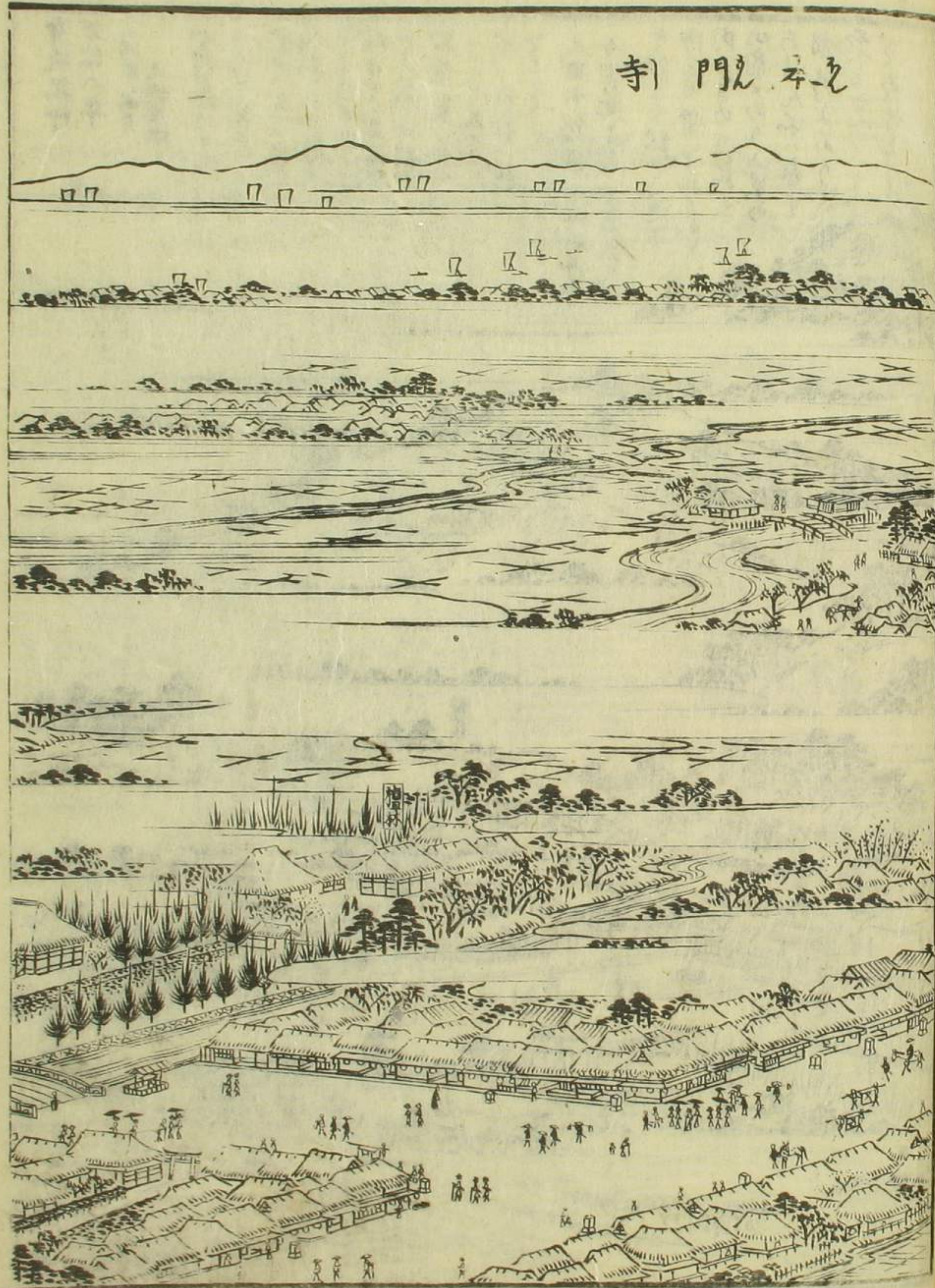
大國院と号し池上邑あり日蓮大士弘法の

一本寺中々三頭と稱する一員あり 甲州身延山總州正中山

當寺日蓮大士終焉の古跡なり弘安年間の開創なり 佛の出世

小湊なり得道ハ清澄あり持法輪ハ身延あり入涅槃ハ池上なり云々 則宗祖

寺門之



大士を以て開山祖とて文保元年丁巳六老僧弟二位日朗上人  
 當寺を修造して大刹とせしめ於て諸門徒推して開基と稱す  
 日朗上人は筑後公正法院大國阿闍梨と云姓八源父ハ新羅三郎義光の子南徳  
 平賀の住人父盛義四世の孫平賀有國の子なり十歳中より出家文永八年大士  
 後平賀の口土軍は籠りて同九年佐州に至り私安元年上足の弟二となり文保  
 二年北条時宗の命を受時明と號す諸宗の徳と法義を論せり昔ハあり元應元年  
 二月廿日池上は寂せし壽七十八 如花園漫録云文保の初ノ者昔ハあり元應元年  
 禪宗の如く入門との意ありと云ハ玄閑の上の師下下駄草履を  
 ありぬ近く京都ゆく皆ありと云ハ古老の人の物語なり今池上本門寺の如く  
 祖師堂 忽鹿子室 永七年庚十月十三日炎上と云ハ正徳三年 渡辺幸庵老人對話  
 右馬頭頭李一揆を起すの時此本門寺諸堂 日蓮大士像 弘安五年十月十三日  
 回録及及りて日蓮上人再建す 又和漢三才圖會は當寺  
 宗祖大士の像ハ大士存在の日昭上人其側ありと云ハ又和漢三才圖會は當寺  
 額 祖師堂 太虚庵光悦筆 釋迦堂 當山弟二十五世日朗上人の  
 本寺釋迦如来母ハ四菩薩の 額 釋王殿 伏見親王真跡 轉輪藏  
 像ハ共ニ運慶の作なりとの 鐘樓 同題目堂の 題目堂 同樓門の左ハ常ニ法華  
 一冊を安置あり 樓門 石階の上ハあり下の左右ハ金剛寶迹の二像を置  
 鬼子母神 妙見堂 樓門 行基菩薩の作なりとのハ古川葉師より述せり



其二



身延記行  
万治二年

深草隱士  
元政法師

そのれは二見  
とらて上へ

新てこり  
志のふた  
あつて  
あつて書院  
あつて外  
ぬれぬふん  
あつて  
あつて

人世以智音  
追師斯再尋  
今宵池上月  
依舊照天心

手紙とて  
汚者堂と  
肉つきの  
山園とあり  
あつて八  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

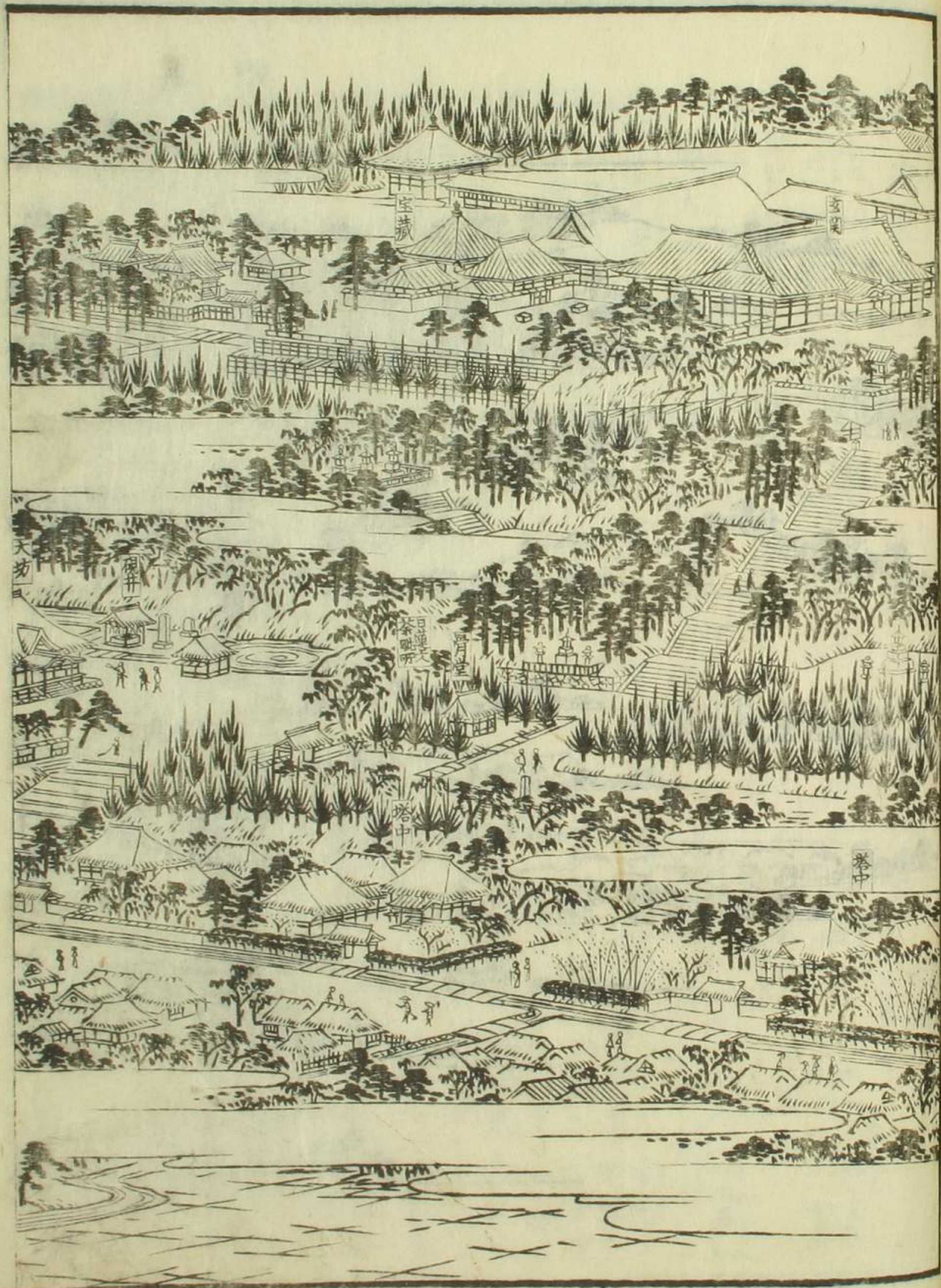
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり

あつてあり  
あつてあり  
あつてあり  
あつてあり







額 長榮山 光悦筆 五層塔 七面堂 宝蔵

檀所 南谷あり此後壇林と云ひく 日蓮大士茶毗所 同所の山際あり

草堂を 狩野探幽法印の墓碑 同所あり 狩野家歴世の墓碑

日蓮大士終焉旧跡 本堂より西の方あり 大士入寂の後宗仲居士を

九老僧日澄上人の附屬 一字の長崇山本行寺 日蓮大士鏡御影當院を

弘安五年九月宗祖大士宗仲居士宅に在り 寂し臨み頃如是未曾有の大導師

我家に入り多ゆ誠は盲龜の浮木にあつたりと云ふ 一度かゝる一別離の

涙止く悲歎のあまり影を遺さむを求む上人夫婦の深信黙止く

終託く自姿を鏡よりの彫刻あり宗仲居士の故世人鏡の影を

同臨滅度時菟柱 彫刻あり宗仲居士の故世人鏡の影を

硯井 宗仲居士の宅にあり 同北五日諸弟子あり 甘美あり 弘安五年九月

講一畢我臨終の期既三七日の中あり 佛像経巻等と集め安國論を

祖師一代の妙存の秘記を著し 旅立御影を此池上に入らる十月十三日此地に

六老僧等入寂 其項宗仲居士の像を造立せんとす 宗祖日蓮大士石塔 左の方

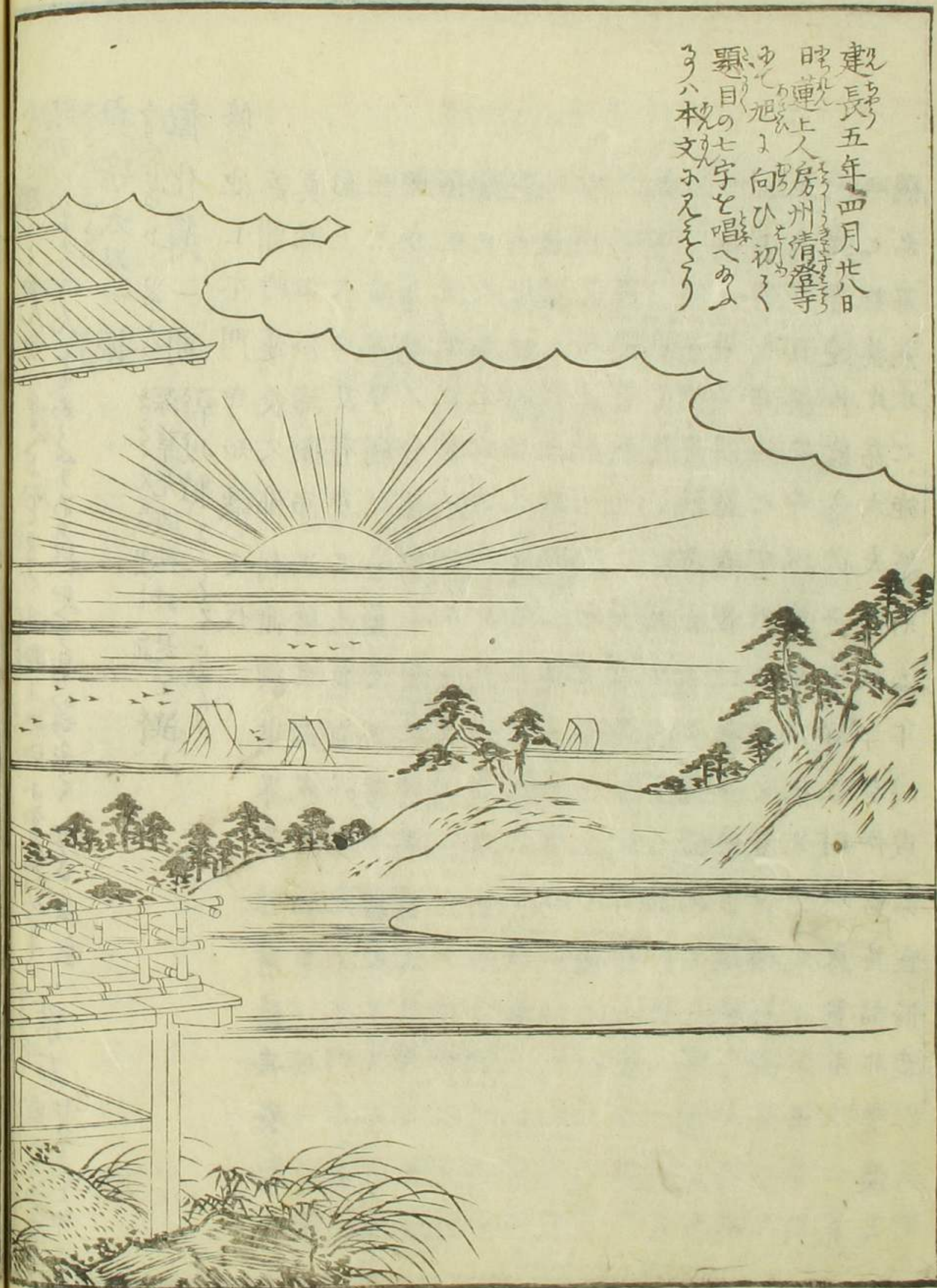
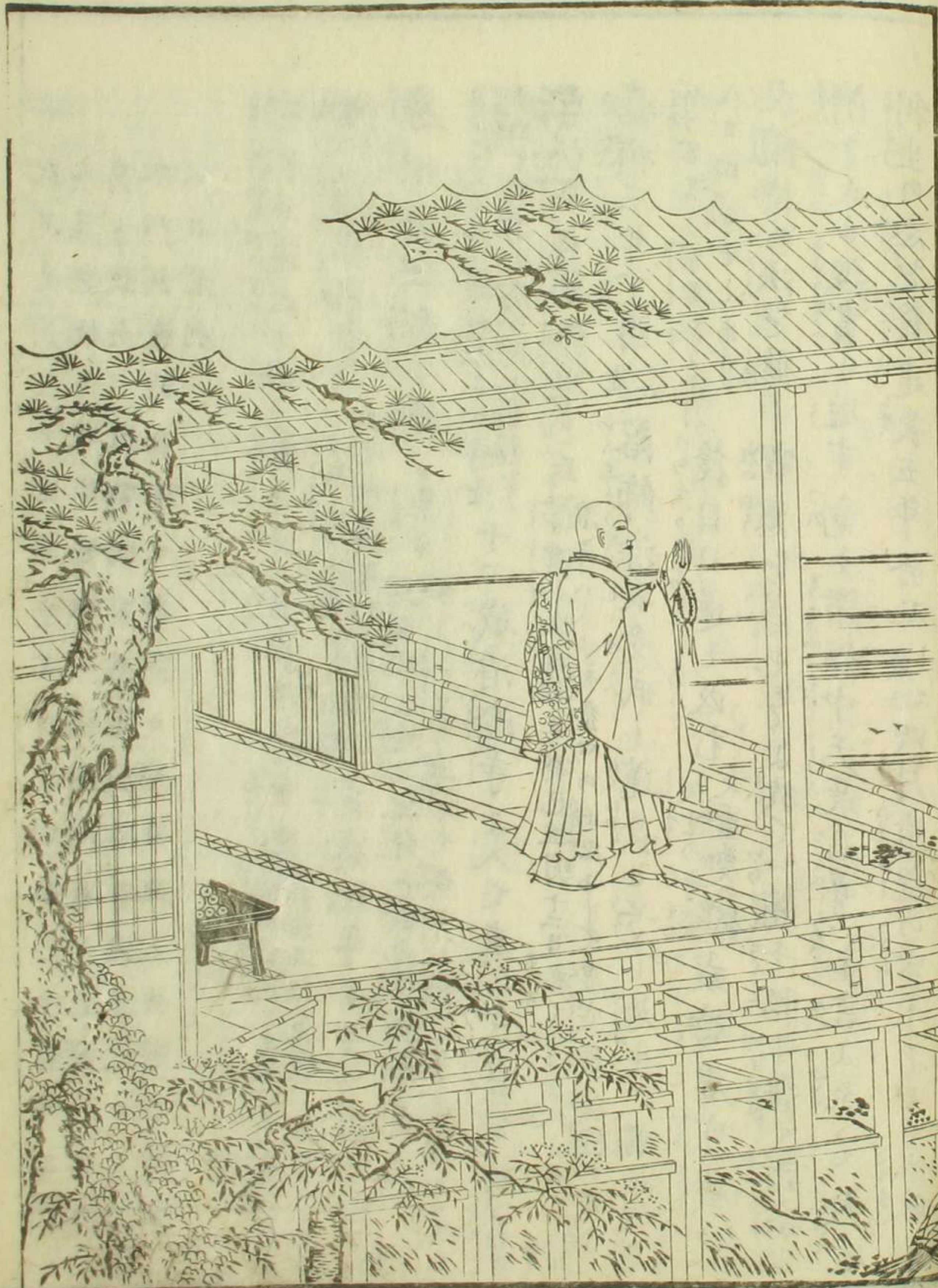
頂の池上右傍門大夫志宗仲墳墓 同所右の側は建石の玉垣を

朗賢院日崇聖人弘安

五年九月八日

此池上に入らる十月十三日此地に





趣長五年四月廿八日  
暁上人房州清澄寺  
暁の旭の向ひを初  
暁の目七字を唱へ  
多八木文ふえをり

氏況是長久之世昇平之時乎因茲乃今普叩檀門  
廣募樂施一正欲報佛祖之德酬國家之恩諸人傾誠  
萬方致志一振鶴樹寥落重興祇林衰微人々入清  
本門同樂於長遠之壽箇々到彼池上共遊乎清涼  
之日者也

宗祖日蓮大士姓ハ藤原父ハ貫名次郎重忠始三國氏トモ重忠ハ遠州刺史

母ハ清原氏あり一ハ畠山の氏族トモ山崎貞應元年壬午二月十六日

房州長狹郡小湊左近衛五位兼良の嫡子トモ生る

創立モ所謂小湊の誕生寺ト云胎ノ託モト夢トク後孕ビ故ニ善日磨ト名ツク

學ビ名を樂王磨と云宗要抄天福元年癸巳五月十二日初テ寺ヨリ入トあり

嘉禎三年丁酉歲六落飾染衣受戒一蓮長と号し是生と唱ふ命善

八日出家宗要抄十月後自日蓮と改む又靈夢の應或時虚空蔵此

求聞持の法を修し靈應を感も於て一聞千悟一普く諸宗

濟大ニ徑書通す竟小諸徑中王最為第一金言至る大道

初生の志を發建長五年癸丑歲三四月清澄の室中て七日三昧入

入同廿八日旭日對ハ掌を合せ始法華題目の七字を唱ハ

化迹日弘法の故道善念て清澄を逐同五月

權輿後住同七年卯註法華經を著實相寺ハ

大意を著又文應元年庚申立正安國論を編後記云ク

正嘉應終七月十六日宿屋左衛門光則就て是を前相州平

時頼捧く然其書諸宗を誇又憍慢の文あるをり

是ととを却て大士をて豆州伊東に謫せむ時弘長元年

辛酉五月十二日なり

癸亥五月廿二日牒を下して大士を救を依て復鎌倉に歸る

十三八月大士房州下向安公妙蓮尼同十月三日死師弟新誓あるあり

同十一月十日同國小松原に移る東條左衛門平景信大士の化

手書の妙徑一本を富士の嶺の半服に埋む今徑の奉といふ事あり

鎌倉靈山の嶺に至る雨を祈らんる題目をとり官議して云く日蓮事を佛

經文を寫校して海に投を果して感應あり

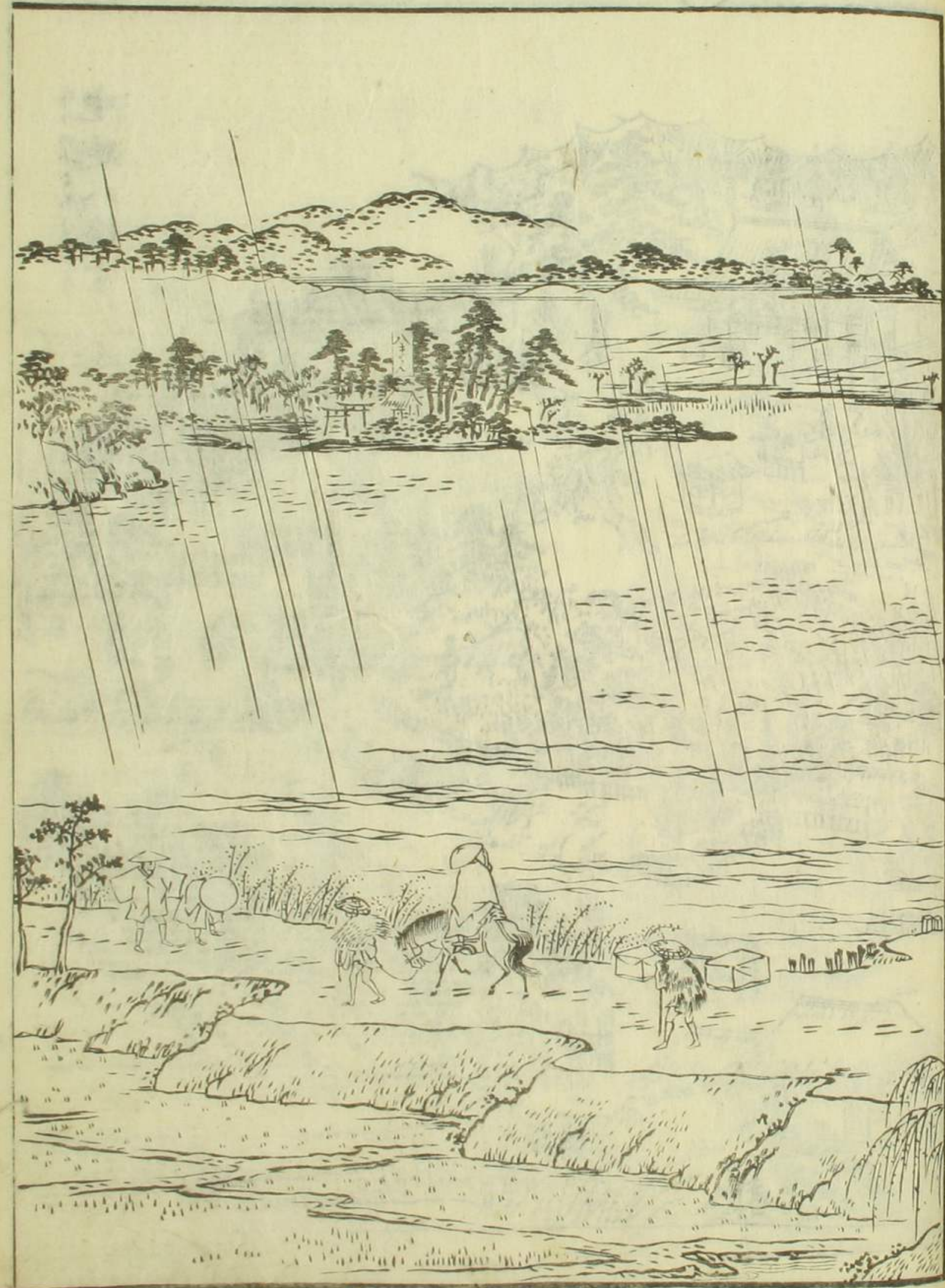
法は托して國家を乱さんとを罪まゝ死に中まると依り同年  
九月十二日執權時宗頼綱は數百の兵士を添へ松葉谷に發向せしめ  
大士をかくめ捕り又日朗等をつゝ六人の輩を地牢に入其夜龍口は於て  
大士の頸を刎んとせしむ 回瀬村寂光山龍口寺其口此時一老嫗あり餅を  
餽ふ盛衰を悲しむ是を大士は供せし此より五百余歳  
世俗の口碑は傳へるの如説よ 靈威あるを以て執權時宗大は驚死を宥め  
佐州に謫せ 鎌倉より高祖を免すの使者と龍の口より怪異を告ぐとせる使者  
又同十三日本間重連の依智の家は至りか其夜辰星庭前の梅樹の上は降る光を  
越つ其靈と樹と星梅山妙典寺と云同十月二十八日佐州松崎の着舟あり其海上  
角田の水面中へ高祖掉せりといひ経題を書きしは又同年十一月朔日大士佐州大野の  
蛇龜動するの勢ひありといひ呼んで遊の題目といふ又同年十一月朔日大士佐州大野の  
塚原の小屋に入る霜雪を花し遊る壬申年五月 同十一年甲戌 歳五再ひ靈威は  
十六日信越を以て興邦の僧等と大に問答せし 同十一年甲戌 歳五再ひ靈威は  
るありあり遂に執權時宗大士を赦し依り三月二十六日鎌倉に入

故は其室狹くして衆を容るるありあつても依り一堂を建て身延  
山久遠寺と云誦經觀念十年一日のゆ 其頃七面の神一対と化し來り  
妙道を守護せんを誓ふ  
弘安五年壬午宗祖齡六十一其秋微疾を患ふ思ふ旨ありとて  
同九月八日身延澤を去り同十八日此池上の地に移り右衛門大夫  
宗仲の宅に入 宗仲は後家と稱し  
手とを今の大地を多 同廿五日より安國論を講しあり  
講畢の後衆は告て云く吾三七日の中は化せんとも悉達太子を  
技提河の辺ゆく八十歳の時涅槃に入らめ我も又當國田波河の辺  
ゆき滅せし若地震せば是其期ありとあつて又日朗は語て曰く  
吾入滅の後墓所は必身延山に築へしと云嘗て十月三日親ら  
本迹大要を書き立像佛 弘長元年大士豆州蒲居の頃田房室より  
居る所の立像の釋迦なり世に隨身佛と稱せし此を考ふ  
附屬する所の立像の釋迦なり世に隨身佛と稱せし此を考ふ  
海中より出現のり附屬書法釋迦の詳あり今浴の杖國精舎あり 安國論官牒二本を  
併せしむる日朗は授与あり 官牒二通の状と同年五月二日護法の状とをいふありん秋  
同八日上行附屬の法門を弘めん為は六萬恒沙の眷屬は像り正しく

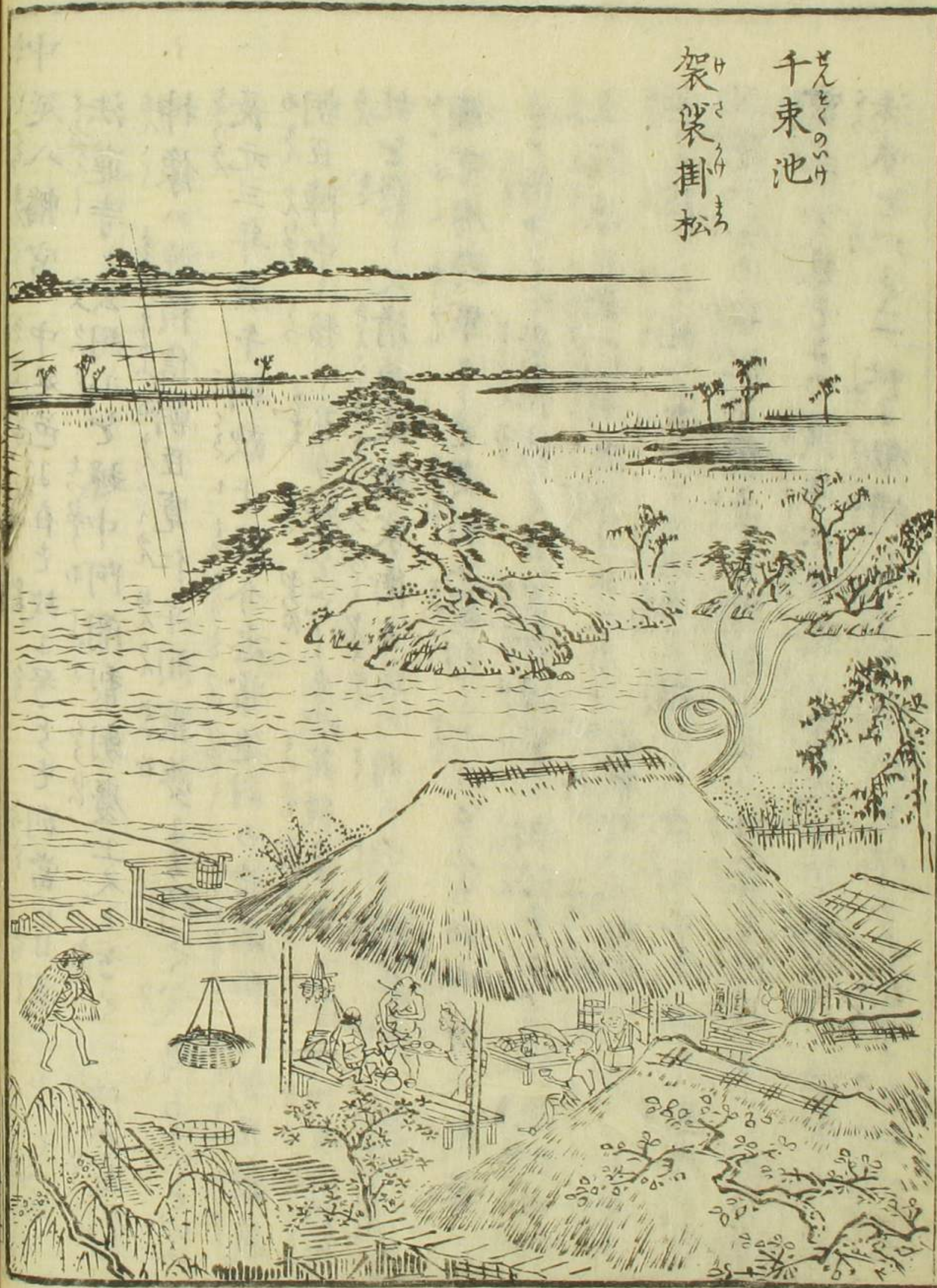
上足六人を定め、所謂且衆の命して云く吾没  
後六子を見らる猶吾と見る如くせよと有り同十二日諸子問訊せ  
遺訓傳々然りと既中侍者をして自ら筆を所の大曼荼  
羅を懸しめ焚香散花持誦愈つゝ十三日黎明地震諸  
弟子皆来り集り大士衆と供り方便品を誦し入佛知見道故の  
句に至り睡りぬ寂を示しめ或人云く壽量品の伴に至り本門寺  
世壽六十一法臘四十六華儀禮は遵ひ山中は闇維を林樹衰衰  
しく人を鶴林の想ありむ同十六日又十一月遺骨を収め身延  
山に送ると云以上宗祖傳の要を採り記す  
千束池 本門寺の西一里余を隔てあり長東西へ三丁を中  
北へ五十歩あり土人云往古此池は毒蛇住り後七面を祭る  
と云又池の側は日蓮上人の腰を懸めひしと称する古松一株  
あり

中延八幡宮 中延邑に在る故に号とせ別當は日蓮宗にて八幡山  
法蓮寺と云用山を越中阿闍梨朗慶上人と号く相傳ふ當社の  
神像ハ源頼信朝臣寛仁年間靈夢よめ感得ありといひ  
長元三年庚午朝敵千葉介忠常追討の時源頼信朝臣頼義  
朝臣陣中より移り敵を亡しめ其後永承六年奥州安部頼良  
乱を發し又清原武衡家衡反逆の時も共頼義朝臣義家朝臣  
鎮守府將軍とて奥州へ發向し亡しめ此御神の衛護に  
ある所中々崇信浅く累世源家は相傳せらる在る原郡の領  
主在る原左衛門尉義宗と云人あり姓ハ源中則ハ幡太郎代に此地を  
縁を依て中延を氏とし又此所は館せり康元元年丙辰鎌倉に於て  
日蓮大士の宗化を聽直は檀越とあり其家は此神像を蔵む嘗  
靈夢を感するの後文永年間日蓮大士を請し法華經に  
法味を以て一社を勸請し自ら日記を作して其子左衛門尉

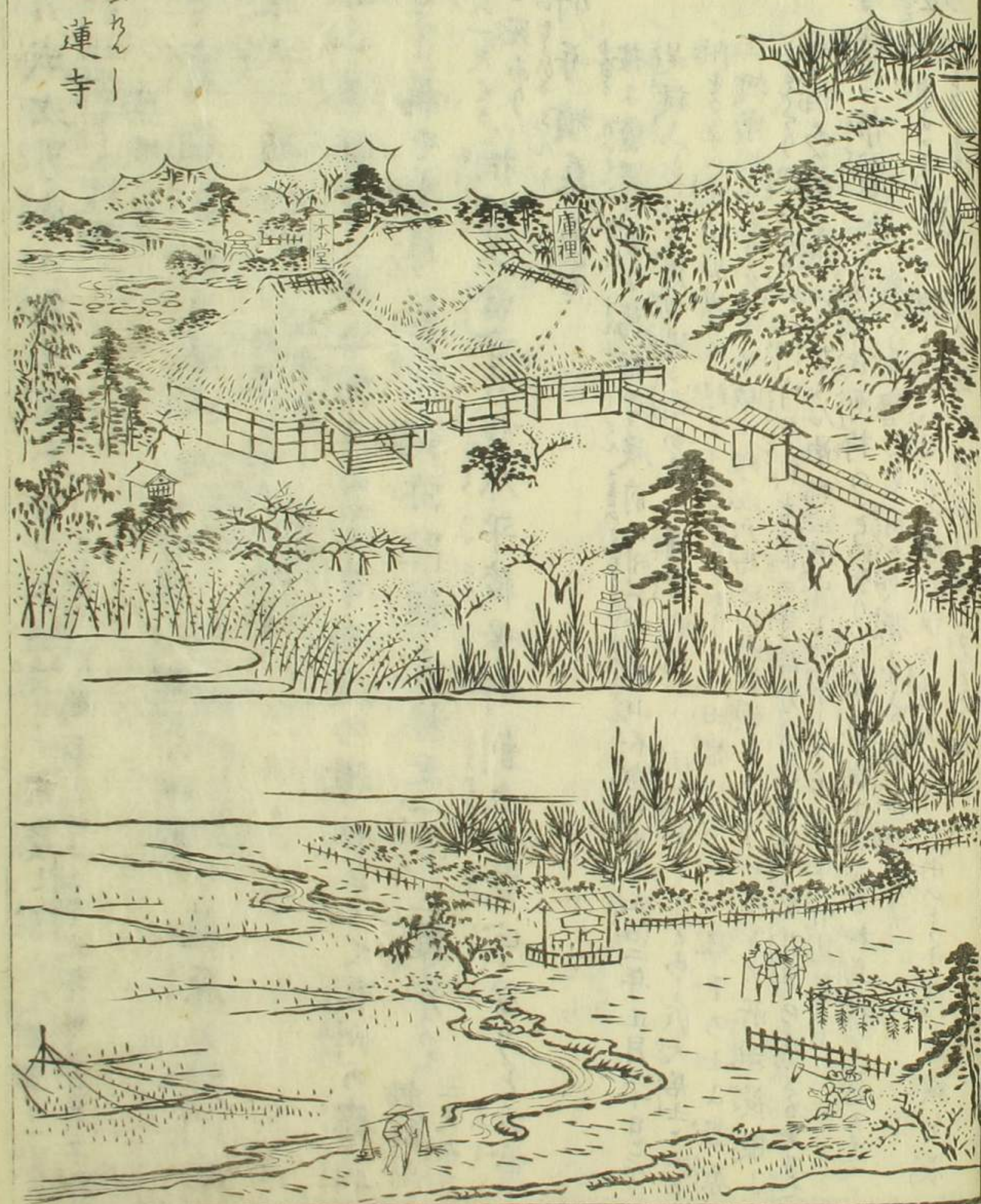




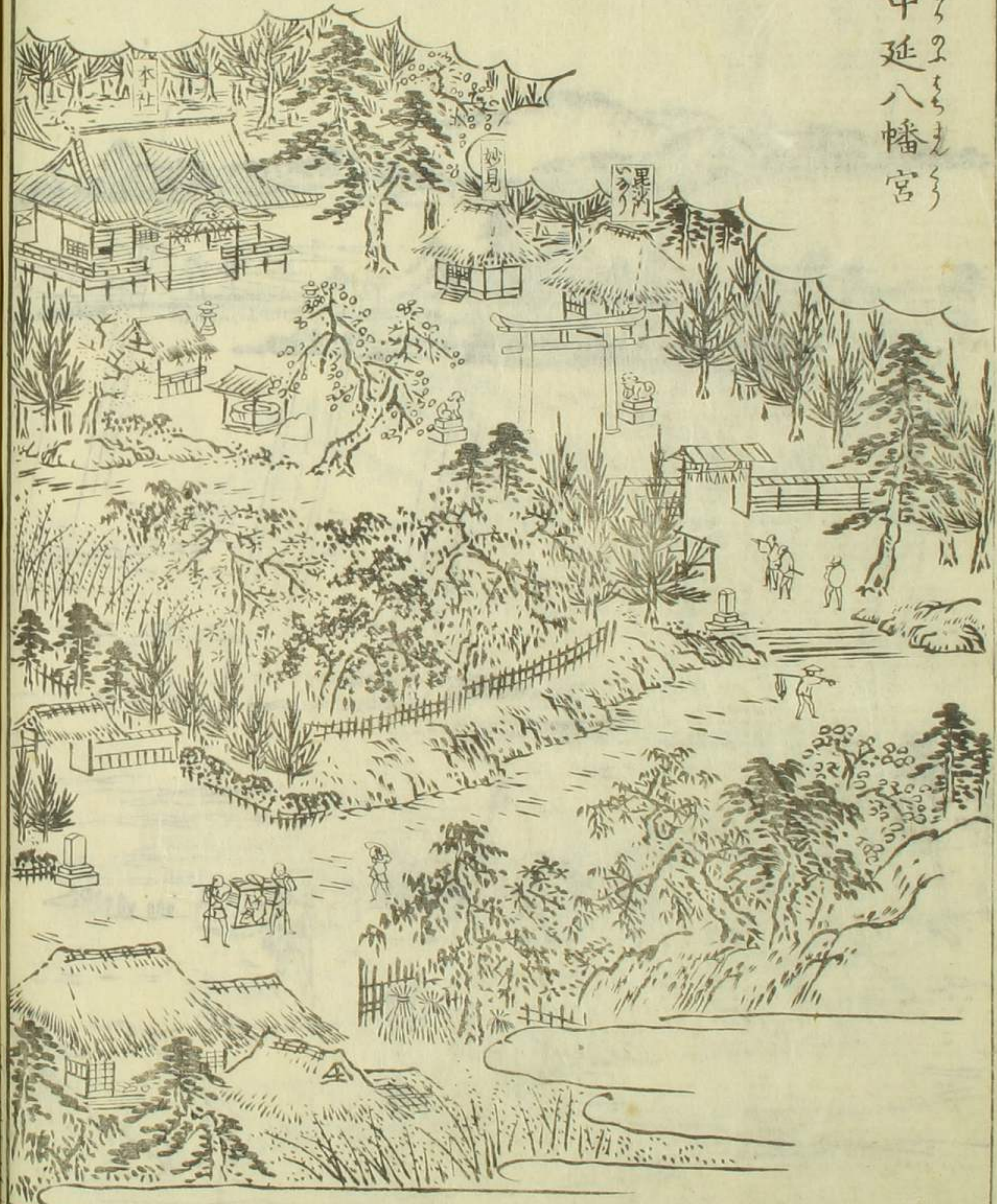
千束池  
架袋掛松



法蓮寺



中延八幡宮



有成次男徳次郎徳次郎薙髪して朗慶と号く九老僧の一員小与ふ正中元年甲子二月二十九日  
化せ則當寺の祖中一墳塔あり

寺寶頼義朝臣讓狀義家朝臣八幡宮の神像を荏原左衛門尉

讓狀一通是も同一神像を越中阿闍梨

慈眼山萬福寺馬込村あり曹洞派の禪林にして相州の徳翁

寺屬を本尊ハ自然銅弥陀觀音勢至一光三尊なり中一長

相傳ハ當寺ハ梶原平藏景時創立の梵宇なりと云靈

牌并墳墓あり

按子靈牌の表ハ萬福寺殿前三州大守香山不捨大居士正治三年正月二十日となり

疑疑ふらくは後世造る所あり鎌倉時世法名あり大居士と云

寺僧あり持持の角角の甚甚古物なり

寺寶布袋鞍梶原氏所持の前論ハ布袋和尚杖を携携

陣貝右大頼朝卿富士の裾野に流

梶原氏肖像面影勇猛なり寺僧ハ景時の像なりと云

證文一通右大頼朝卿建久七年此地に放鷹あり時當寺

馬込八幡宮同所より三丁より坤の方池上道あり

梶原氏宅地同所通を隔て向向あり今農民の園中入土俗

景時の館是も三河守助五郎等の宅地なり

鳳来寺峯の薬師峯村あり峯照山正善寺の持鳳来寺

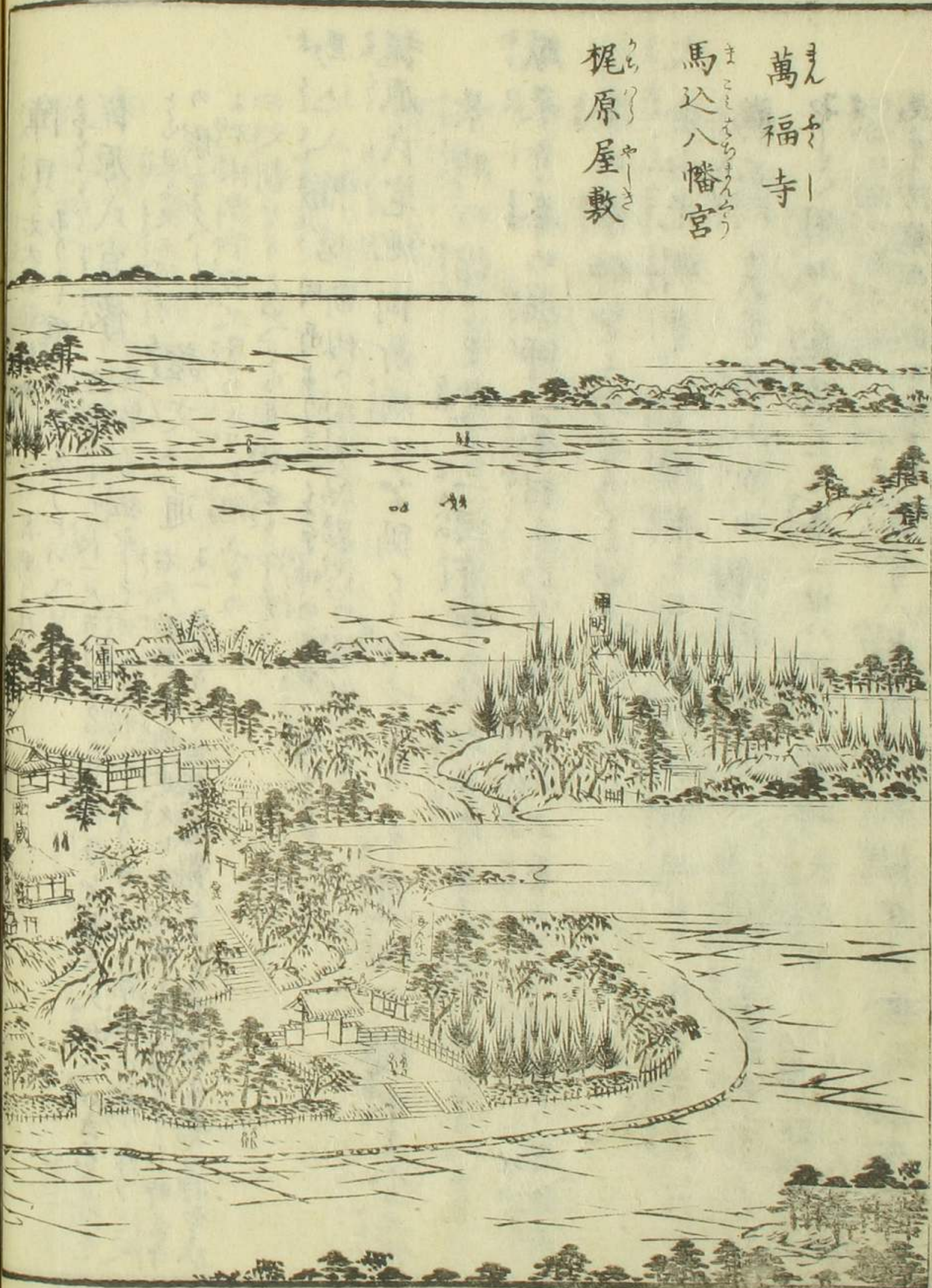
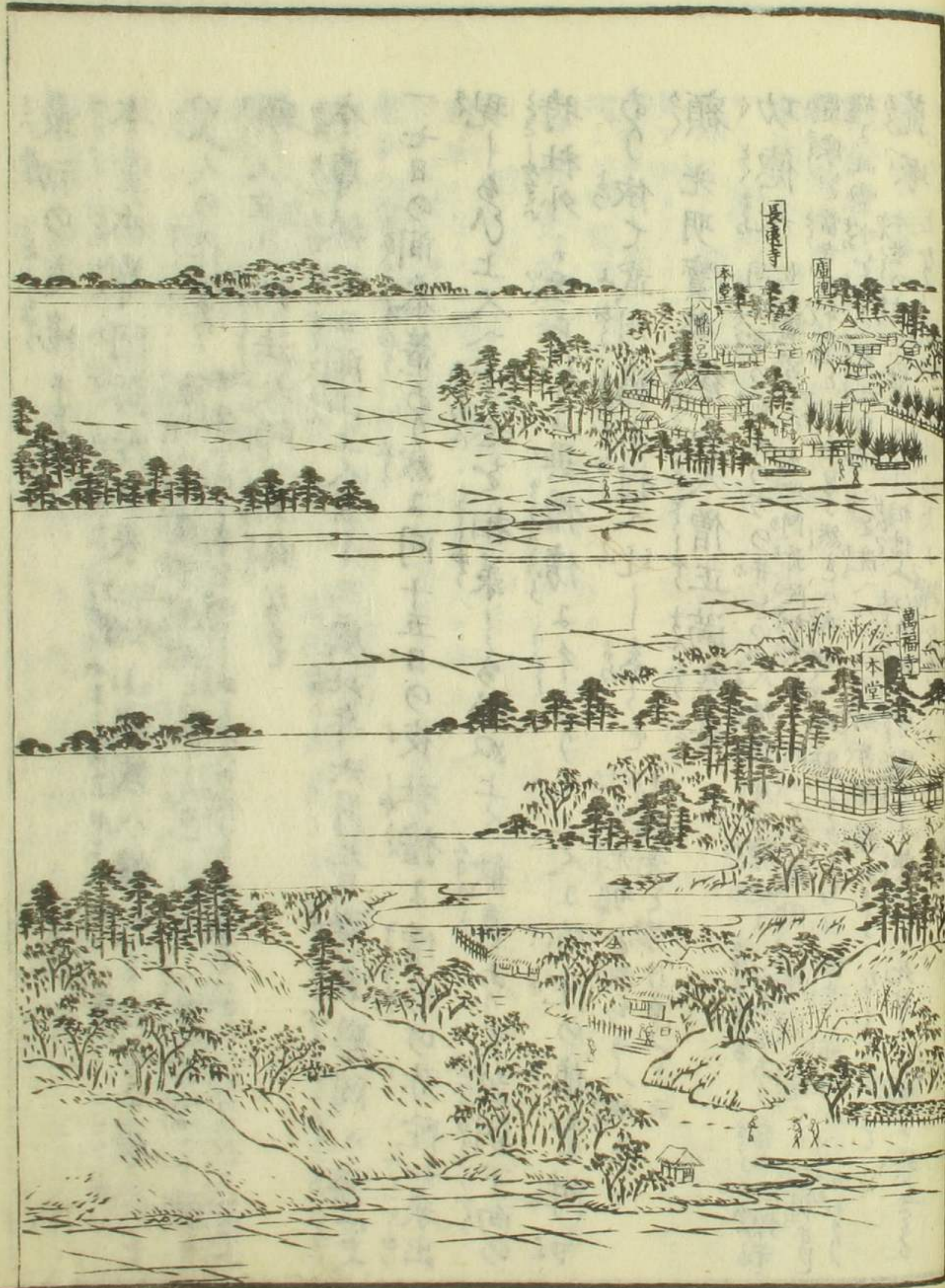
峯の薬師をうのせり

大金山光明寺宝幢院と号新田明神あり五丁沖北此方

鷯木村あり西山派の淨刹なり上古ハ真言宗寛喜年間の草創

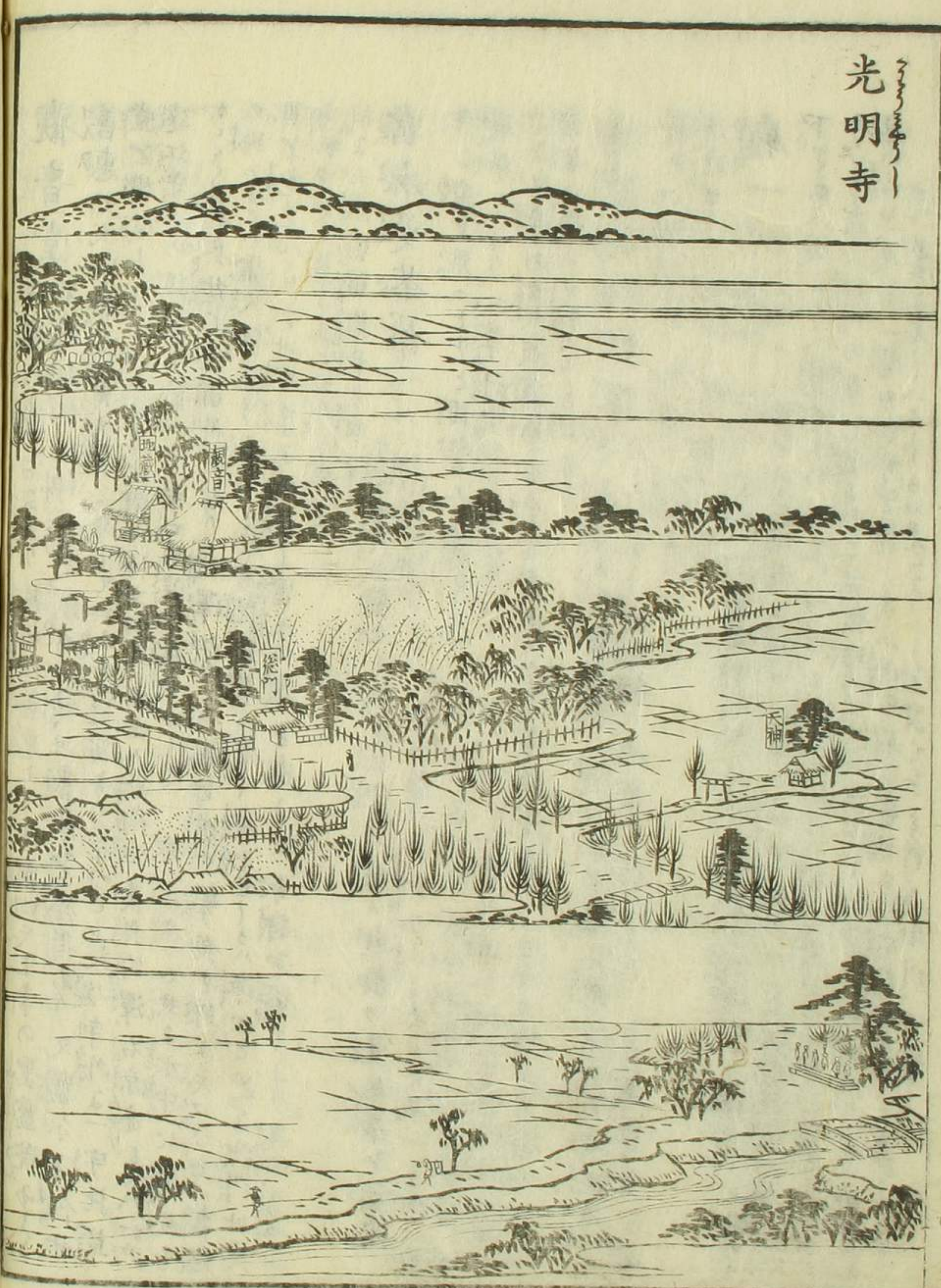
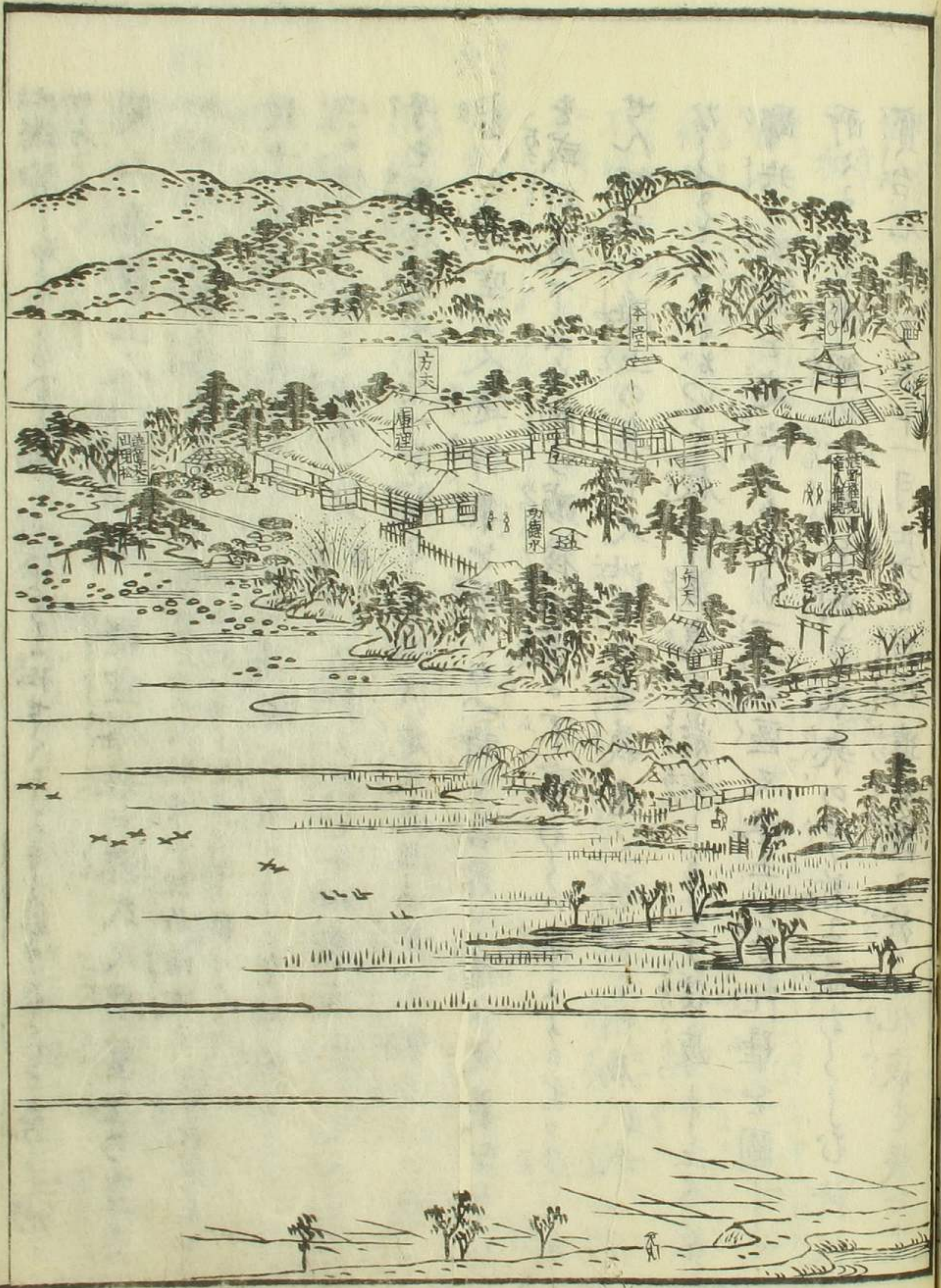
仁治の間箇年當寺に任當寺ハ關東淨教勸寺の權興念佛弘通

是より後鎮西正統相續なり



萬福寺  
馬込八幡宮  
梶原屋敷





光明寺

此詠解... 古く云... 任せ... 記

開山善慧上人 初解脱 諱ハ證空俗姓ハ源氏天曆聖主の皇胤

加州刺史親季の子なる也 證空と云ハ父親季の法名證玄と 治承元年丁

酉十一月九日を生る久我内大臣通親公養て子とて幼齡より菩提

心に住し故に吉水上人 源空の許に投て十四歳薙髮して善恵と

号を性俊逸中て一を聞て千悟に建久九年の春月輪殿下の請よ

よの源空上人選擇集を著しの時も善恵と偕し文義を考定

も或時殿下云く師の滅後此書不審あは誰よりて是を决

せん師云く浄土の奥旨又此書の要義悉く善恵に附屬に我も異

なりすと云ふかひく殿下善恵を崇信しあはる甚厚し上人都

鄙共は伽藍を建立しあはる一十二區又浄土の曼陀羅を圖し

所は収め佛經の印板を開き未來の学者に益あはるむ終に

寶治元年丁未十一月廿六日白川遺迎院に於て化寂を歳七十一

西山善峯寺に居り盛に宗教を弘通あり故に世に西山上人

と稱しあはる 浄宗西山派の太祖と稱せ

當寺往古ハ大伽藍中て關東の高野山と稱し衆人先亡業に逆

修等の石塔婆を建參詣の人も多かりし故也今も古き

石碑石佛の類ハ此所彼所ハ存在せり 寺の大門あり六七丁東の方

不浄の時の崇ありと云田畠耕作 護摩堂屋敷と号す地あり

光明寺池 光明寺の南に添み往古の矢口江川筋ありしと云り今ハ

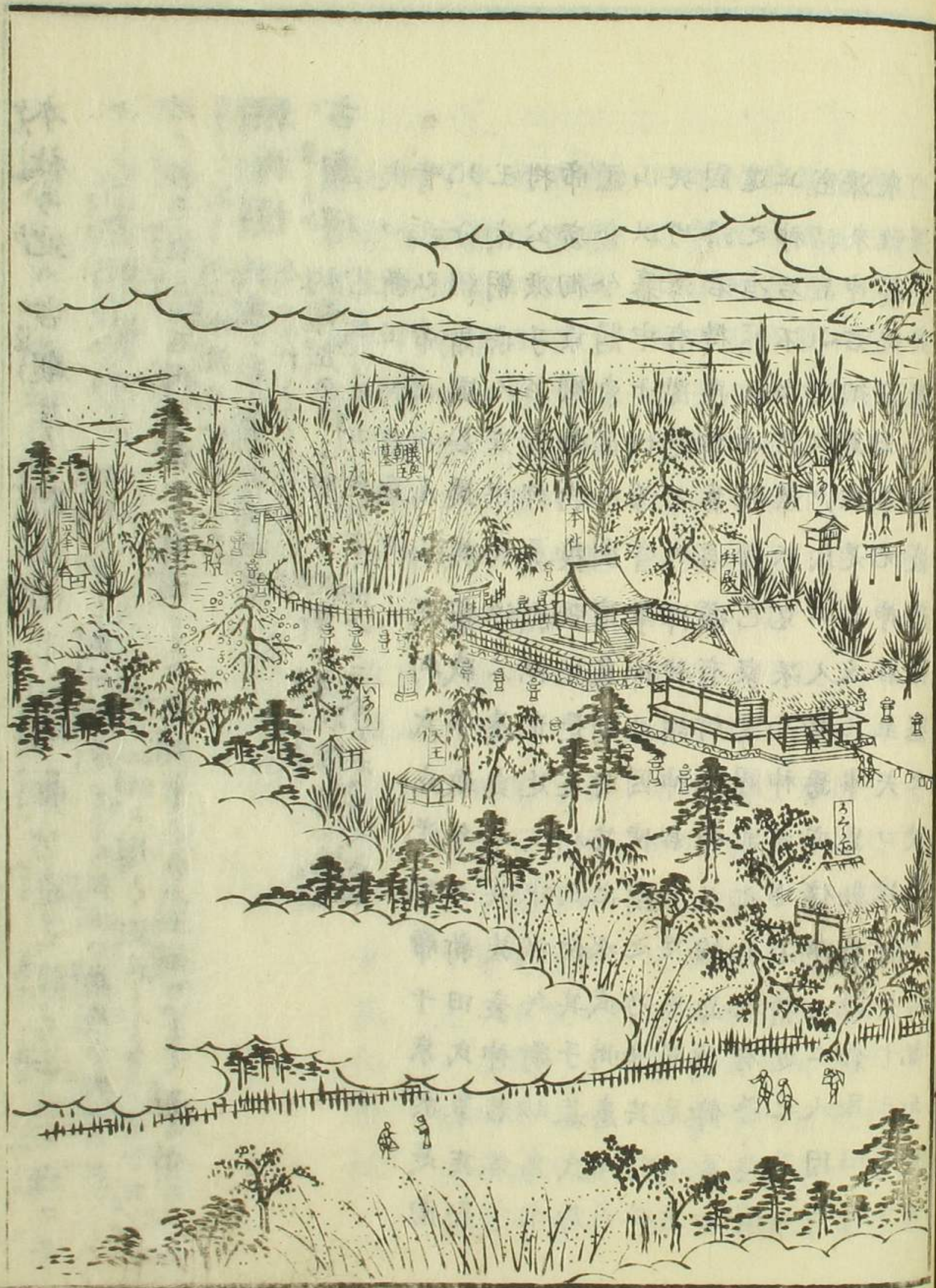
水流替る南の方へ寄て流る池の長と東西貳百余間幅ハ南北へ

五十間ありと云はる 里老傳云記主禪師當寺に住職たり時

新田大明神社 光明寺より五丁南の方矢口邑にあり別當ハ古義の

真言宗小く真福寺と号し高畑室幢院は屬を祭る所の神ハ

新田左兵衛佐義與朝臣の靈あり十日を縁日と云拜殿のを経営





本社の地ハ古廟なり則其田瑞籬を造り設く中ハ一堆の塚

ヤク蒼樹繁茂也此地ハ昔の奥州海道中江ノ流也此地ハ流レテあり是ハ昔の地ナリ

古廟碑 社前左の方ニ建テあり文章ハ服元喬書ハ馬石

竹衆澤密止進國與山鑣帝將王北昔矢口新舊社前左の方ニ建テあり文章ハ服元喬書ハ馬石

與其人衆焉中流舟人伴失墜船具於水没而求之

新田左兵衛佐義興書簡一通

先度以内書ハ仰出クニ丁寧申通シテ色異

修後お後... 貴可令侍達... 十月十一日

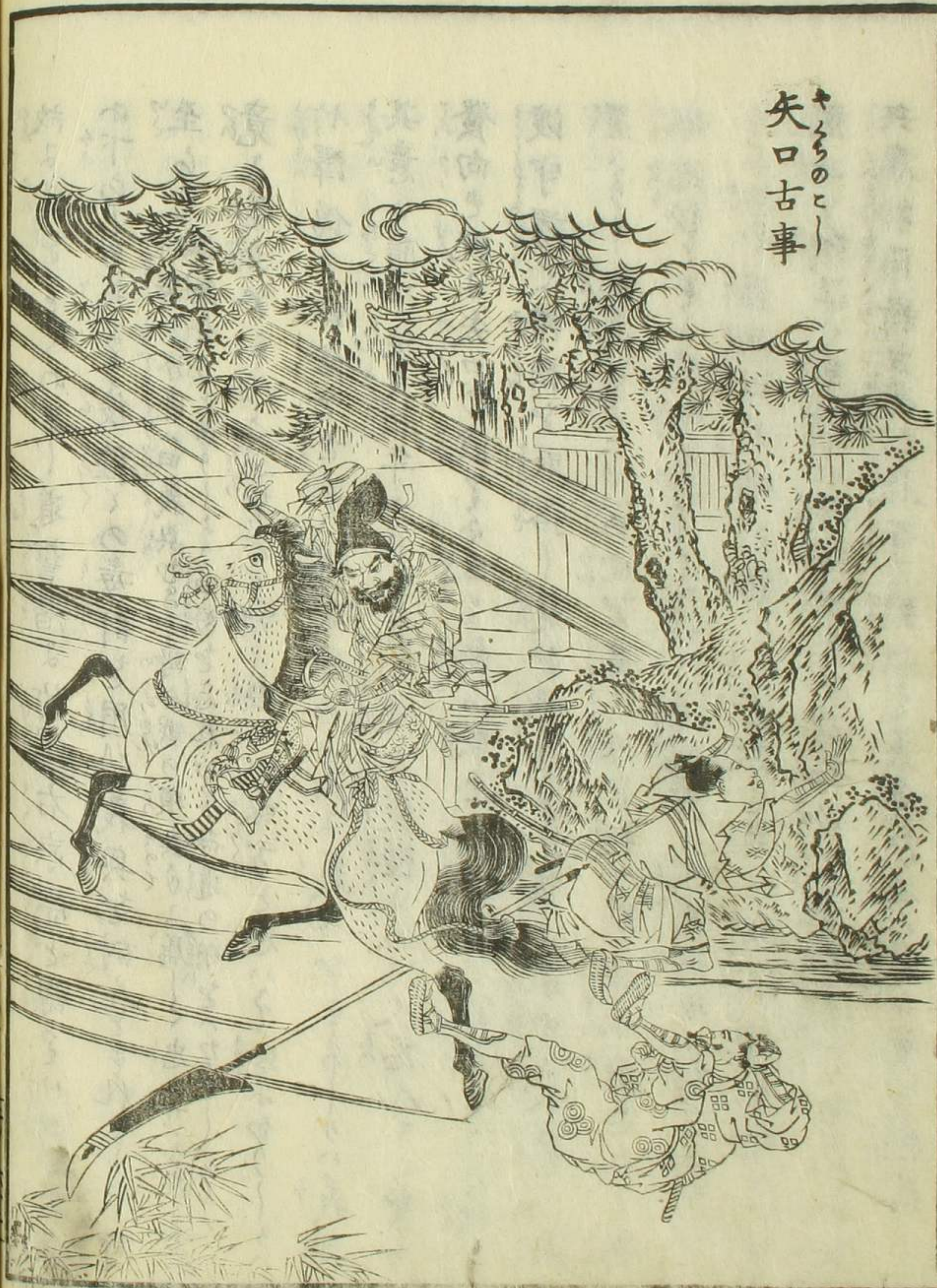
十月十一日

波多能花...

義興判

其の兵古陶器の類... 太平記云新田左兵衛佐義興... 故は是をともくあり道誓潜は竹澤右京亮と謀り竹澤を義興...

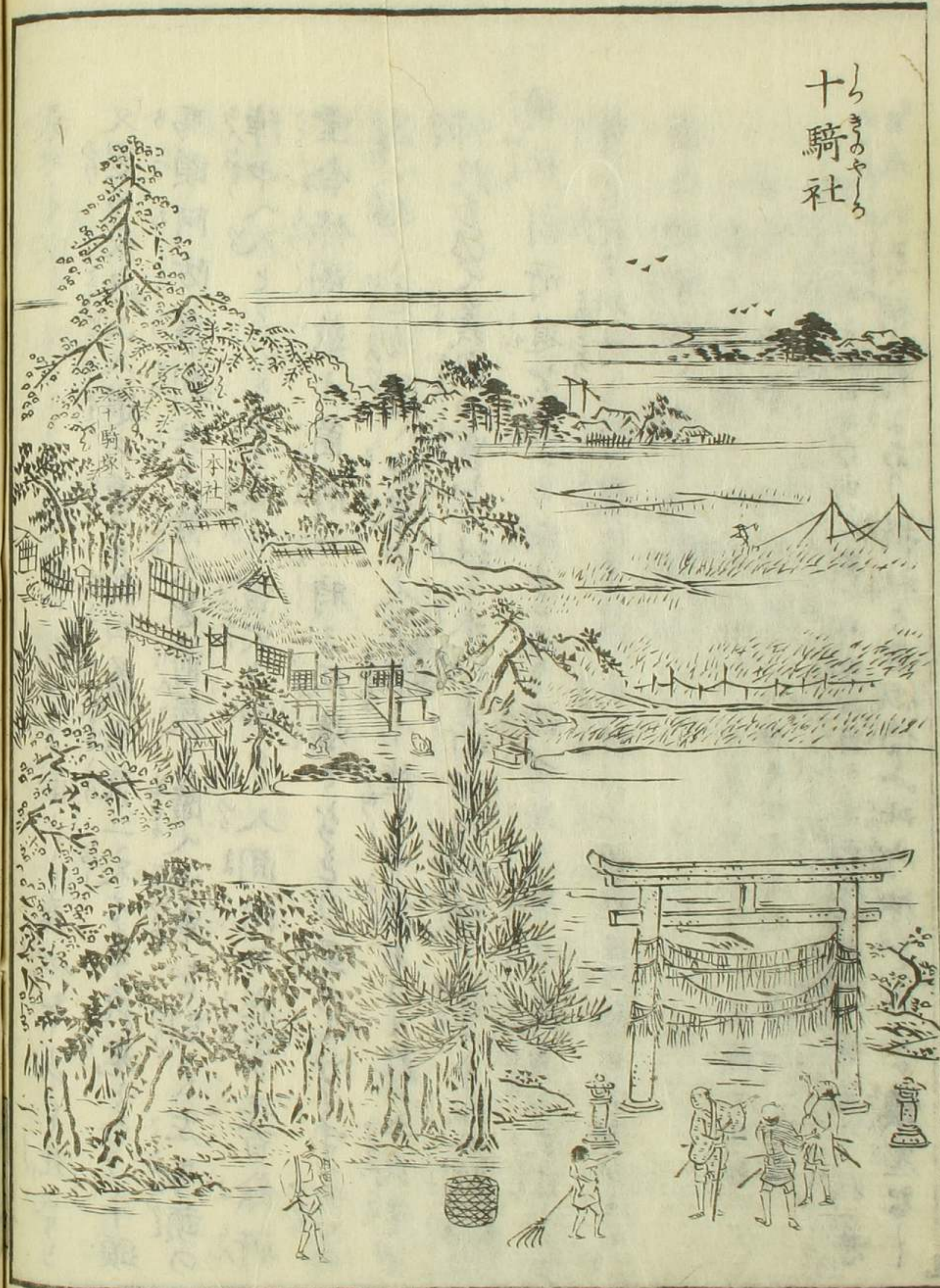
故は是をともくあり道誓潜は竹澤右京亮と謀り竹澤を義興... 舟沈むとせし時向の岸なる江戸遠江守... 兵庫助同新左衛門尉等ハ引組て差違ハ又ハ互ハ首を搔落...



て死しりりり土肥三郎左衛門南瀬口六郎市河五郎三人ハ  
水底を潜かり向むけの岸きに上あり敵三百騎きよりあひ終つま  
主後十三人太平記の書に討死の人主後十三人とあれと義興と共とも討死を  
始はり九人の名を注しり其餘四人の名あり共とも討死を  
其後竹澤及び江戸の両士等らとり其首級を尋出し入間河  
なる基氏の陣へ馳かれ一實驗し入り其後同十月廿三日遠江守ハ  
今度賜たまり一恩賞の地へ下くだむと日暮ひくれ及および矢口の渡わたり  
雷らい頻ひんり鳴なり震ぞきられハ懼おそる馬を走ませとある辻堂つじだうに入いらんとす  
此辻堂つじだうと云ハ鶴木光明寺折しり黒雲一むら江戸頭の上うへに落おち下くだるを雷  
觀音堂くわんおんだうのふりありと云いふ餘あまりハ怖おそる後ごを吃くと顧くみ義興  
電でん月の邊へに鳴なり閃ひらめられハ餘あまりハ怖おそる後ごを吃くと顧くみ義興  
火ひ絨じゆの鎧よろいは龍頭りゆうだうの五枚甲ごまいがの緒おと縮ちぢる白栗毛しろぐりなる馬うまの額ひんは角つのに  
生なたる小乗せうじやう鞭むちと志しり打うち遠江守えんじやうしを弓手きゆうての物ものは好この燈あかりの鼻はな落おち  
下くだりしと云いふ七寸計しちすんけいなる馬うま候ごうと云いふ乳ちの下したへかけぬ  
と射通しやうとうと云いふ思おもひく馬うまより倒たおれ落おちて悶絶もんせつと云いふ後ご者しや共とも興き!

来きせく家いへを歸かへりしと云いふ七日ななひの間水みづは潮うしほる真似まねと云いふ死しりり  
又翌あつの夜よ畠山はたけやま入道にやうだうの夢ゆめは新田あらた義興よしみき長二丈ながにじやうと云いふ鬼おにとあり牛頭ぎゆうだう  
馬頭ばだう阿防あほう羅刹らせつ共とも十餘人じゆじゆにんを前後ぜんごに隨まへ火車ひやうしやを引ひき左馬頭さまのりだうの  
陣中ちんちゆうへ入いりしと云いふ其日そのひ雷火らいかはかゝり入間河いんまがわの在家さいか三百餘軒しやうじゆけん  
堂舎だうしゃ佛閣ぶつかく數十箇すんじゆくわん所ところ一時いちじは灰燼はいせんとなり是こゝのなかり矢口やぐちの  
渡わたり夜よに先物せんぶつ如ごとく往來わうらいの人ひとを隘せまく種たぐひ々の祟たたかりられハ土民とんじん是こゝを  
怖おそれあひて義興よしみきの靈たまを二社ふしや奉ほう祀し新田あらた大明神だいめいじんと崇あつめると云いふ以上いじやう太平記たいへいき  
十騎じゆき社しや同所道どうじやうだうを隔へて向むけあり新田あらた左兵衛さへいゑ佐義興さよしみきの家臣けしん十人じゆにんの  
靈たまを祀まつり此所こゝも拜まつ殿でんのとあて本社ほんしやハ一堆いっすいの荒塚あらかづかのとあり土民とんじん  
登のぼり瀨明神せめいじんと稱なづけ事こと實じつハ先まへ  
十騎じゆきとハ所謂すゐご井彈正忠いだんせいしゆう大島周防守おほしましゆうぼうしゆう南瀬口六郎なんせぐちろくらう  
由良兵庫助ゆらへいこすけ同新左衛門どうしんざゑもん世良田右馬助せらだえますけ市川五郎いちがわごらう  
土肥三郎左衛門とへさんらうざゑもん以上八人の名いじやうはちにん大平記たいへいきは切きりし其餘こゝろの人ひと名な今いまも  
然しかる異本いほんハ松田まつだと市河いちがわ道みち七しち塚づか壹岐いつき權守ごんしゆう進藤しんどう孫まご六む左衛門さゑもん等らの名なあり  
日本武尊祠よまとくすのほ傍かたりあり攝社しやうしやと云いふ相傳あひたづふ此所こゝ神かみと云いふ鎮座ちんざなり

十騎社



奉るるハ尤久ト云此地上古ハ奥州への街道や日本武蔵東

夷征伐の時爰々矢合せりといひ曰此なりといひ矢口の地名も此事に

六郷の川と隔てて稲毛の地は矢向と云邑名あり

題も其時の矢の向ひと云地故よりなり

古川薬師如来堂 古川村にあり新田明神より東南の方二十丁を

を隔つ醫王山世尊院 安養寺と号し新義の真言宗や

高畑村の宝幢院は属を上古ハ東光坊と号せたり本堂の額醫

王山の三大字ハ黄檗高泉の著なり

本堂本尊薬師如来 五尺 左右弥勒釋迦二尊ハ各五尺三寸脇檀十

二神将及び四天王の像も共ニ行基菩薩の作なり

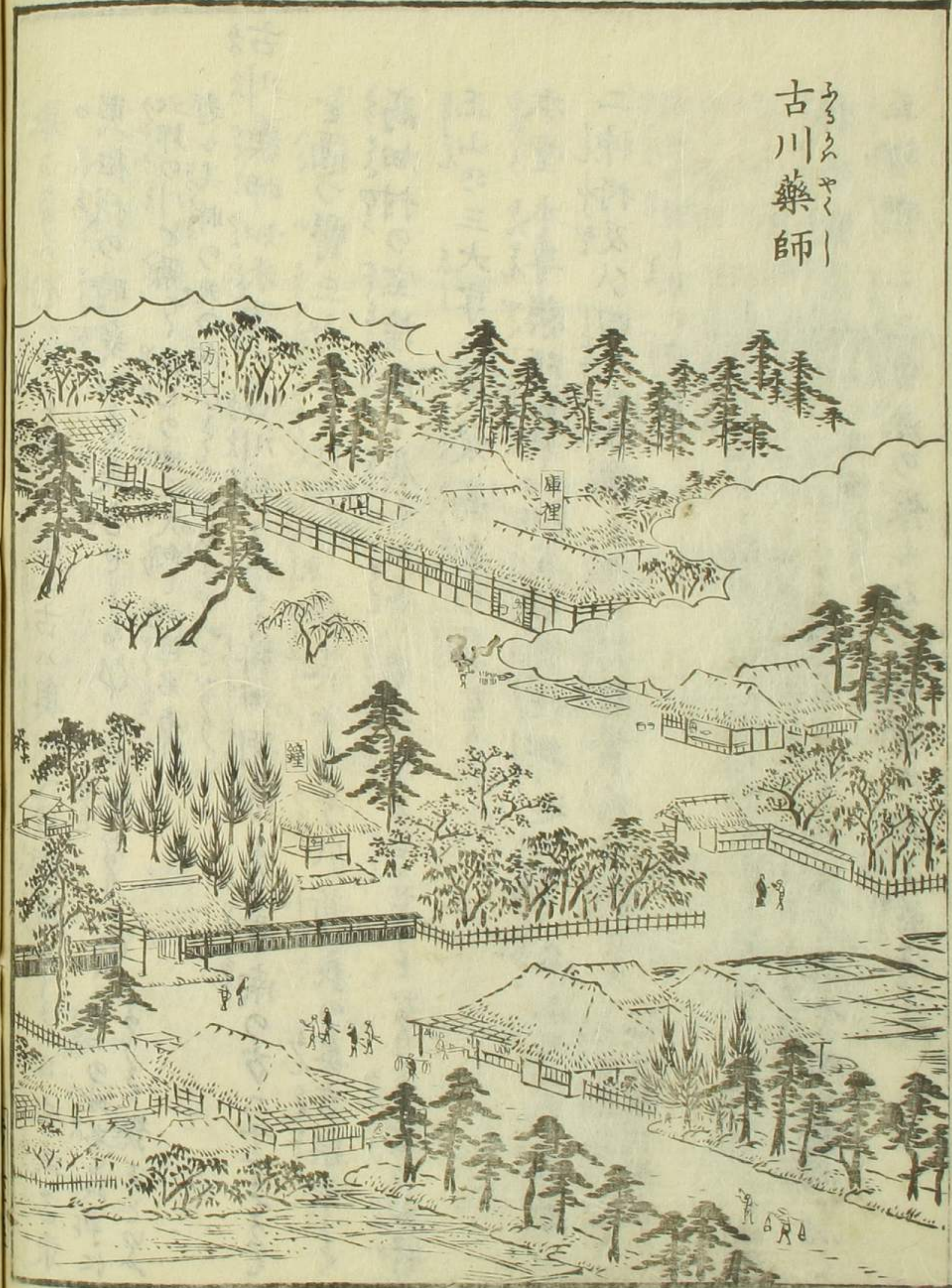
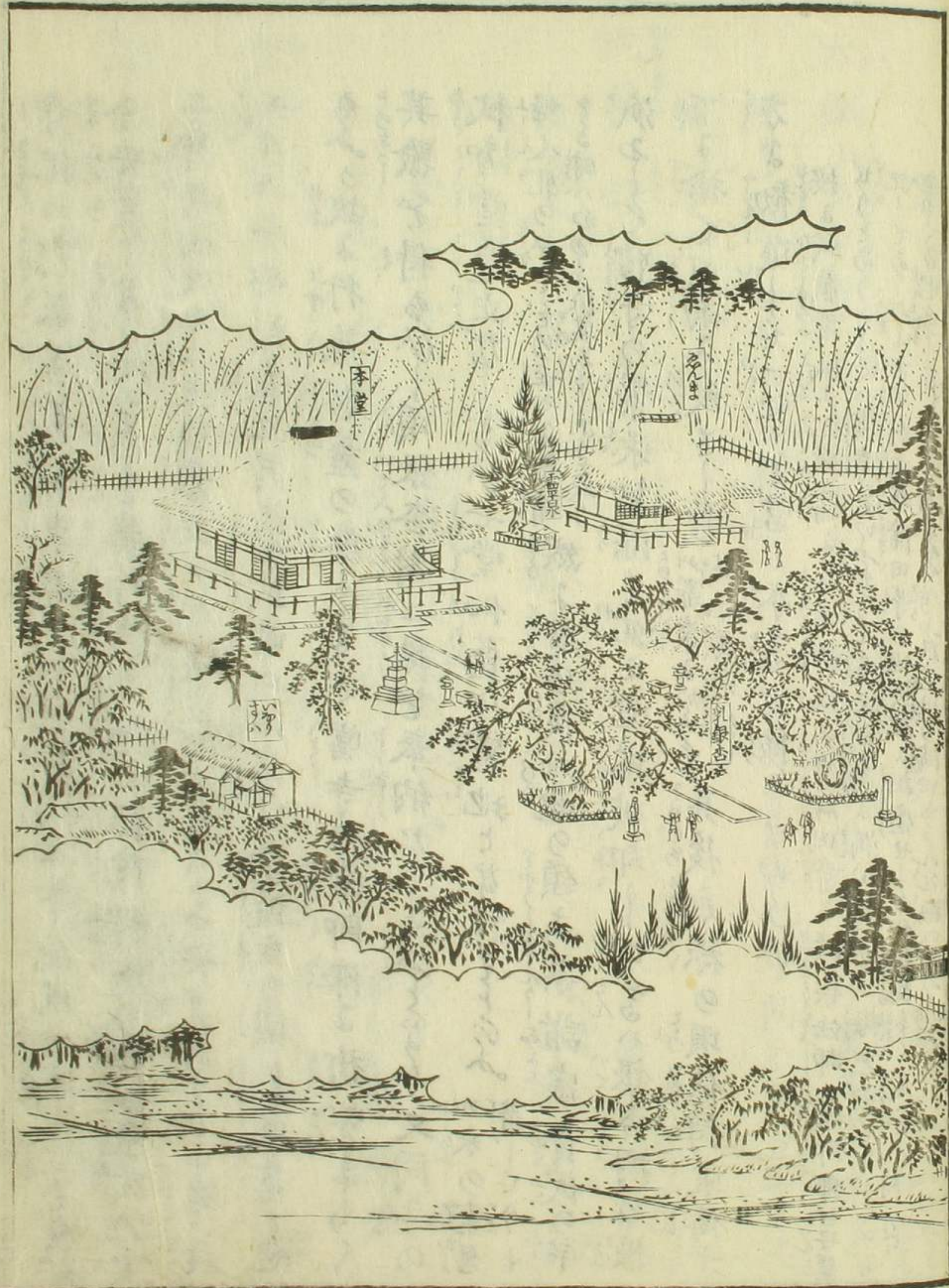
瑞光を現を依く彼木を

以て像林とせり

银杏樹 本堂の前左右ニ樹並立し諸乳のあきりの祈るも験ありと云此靈

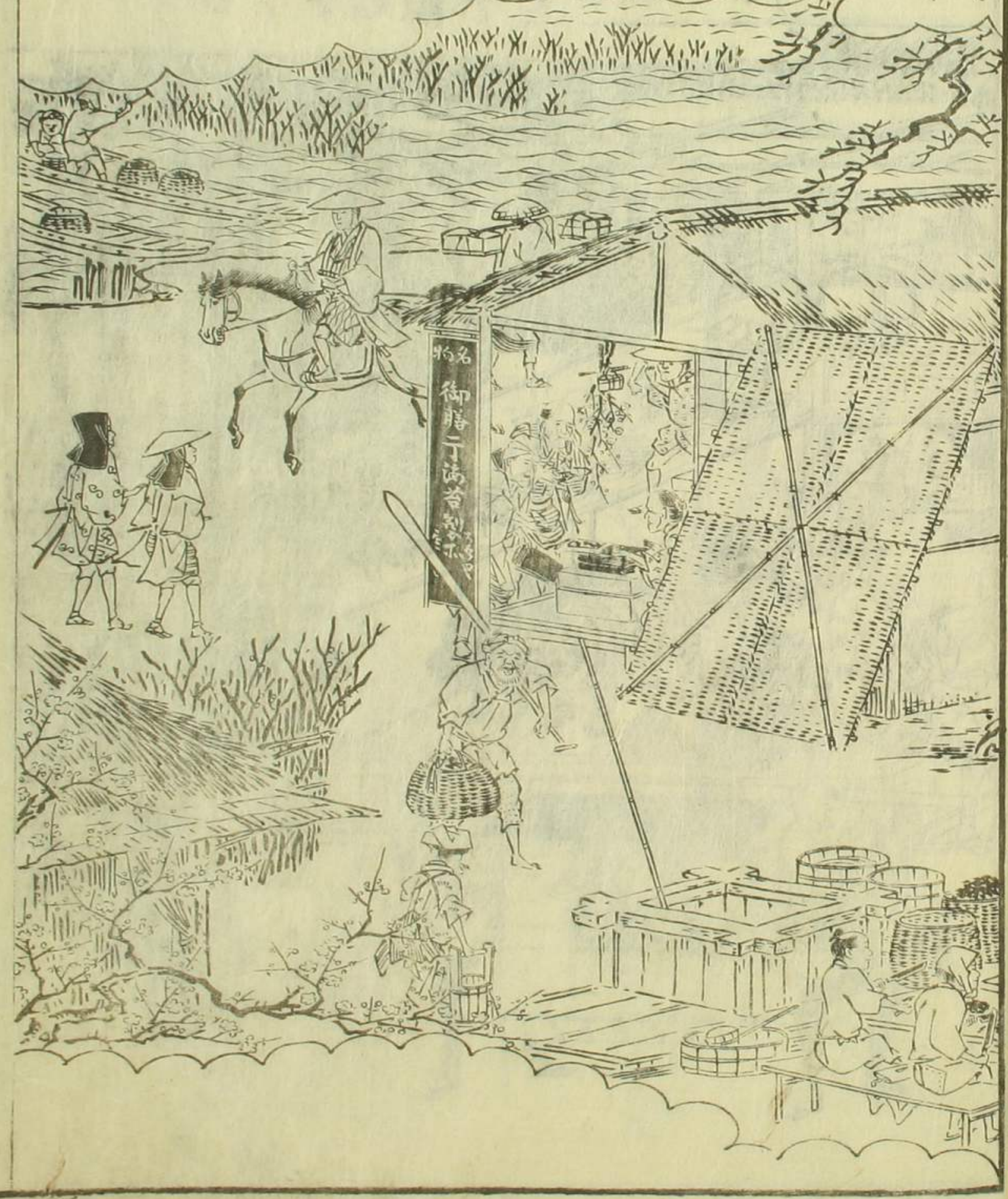
杉本靈泉 本堂の前右の方の椽の下にあり眼疾を患ゆる者此靈水を以て

五智堂 十王愛染の像もあり本堂の右に並ぶ

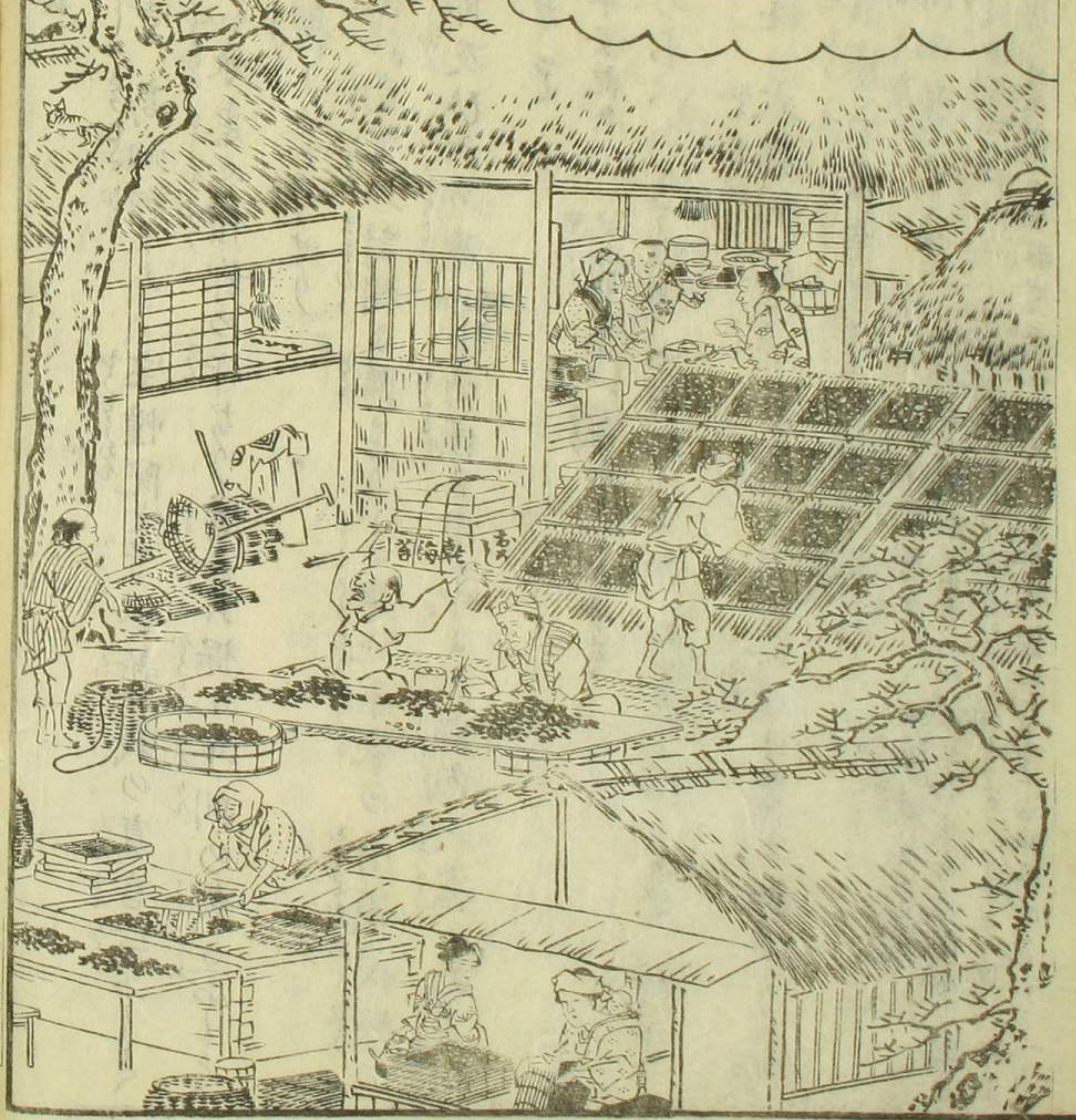




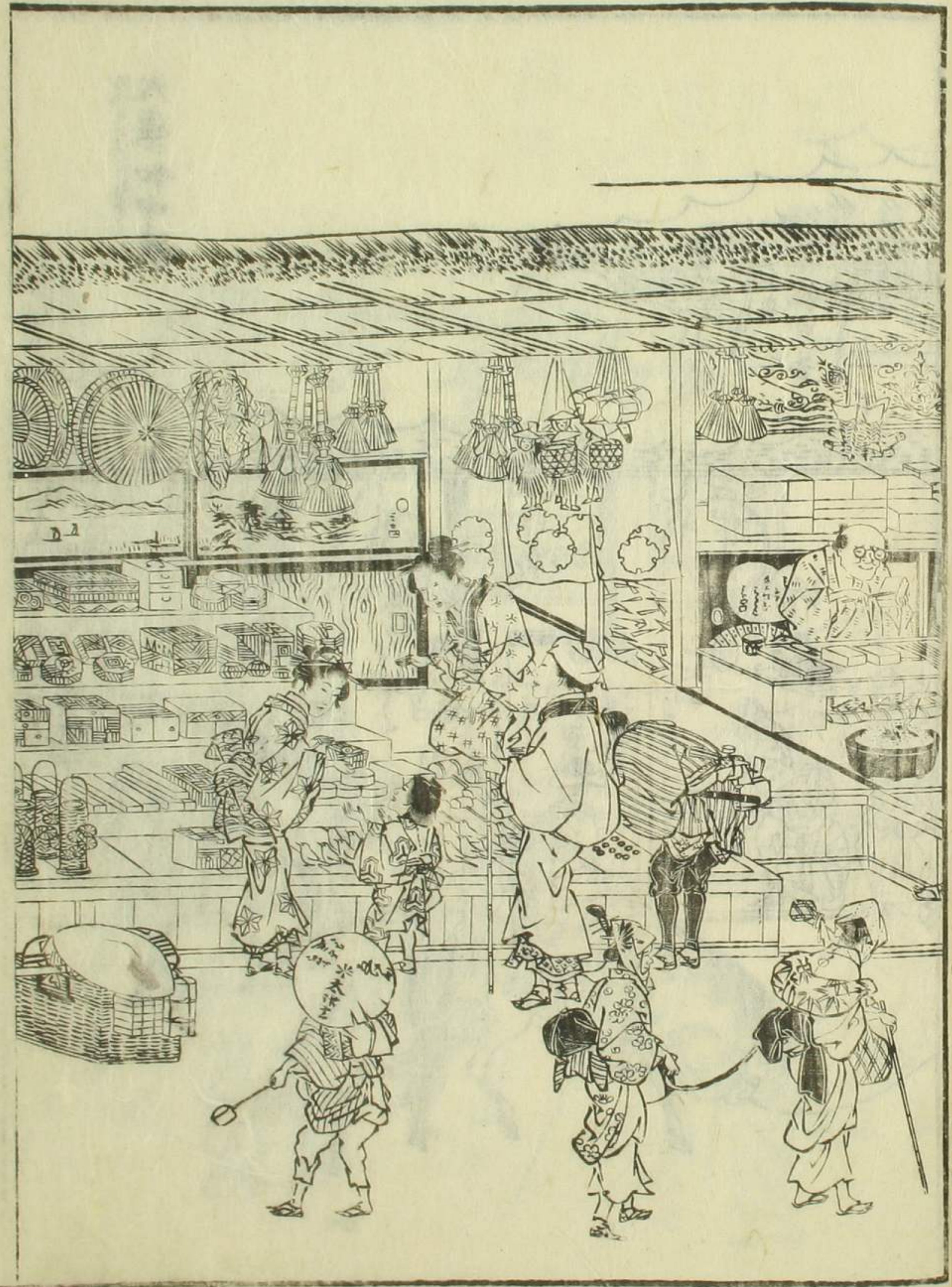
一年の間  
 田置と  
 合味  
 変り  
 高貴の  
 家の中  
 賞  
 送  
 諸国共  
 業  
 着  
 江  
 産



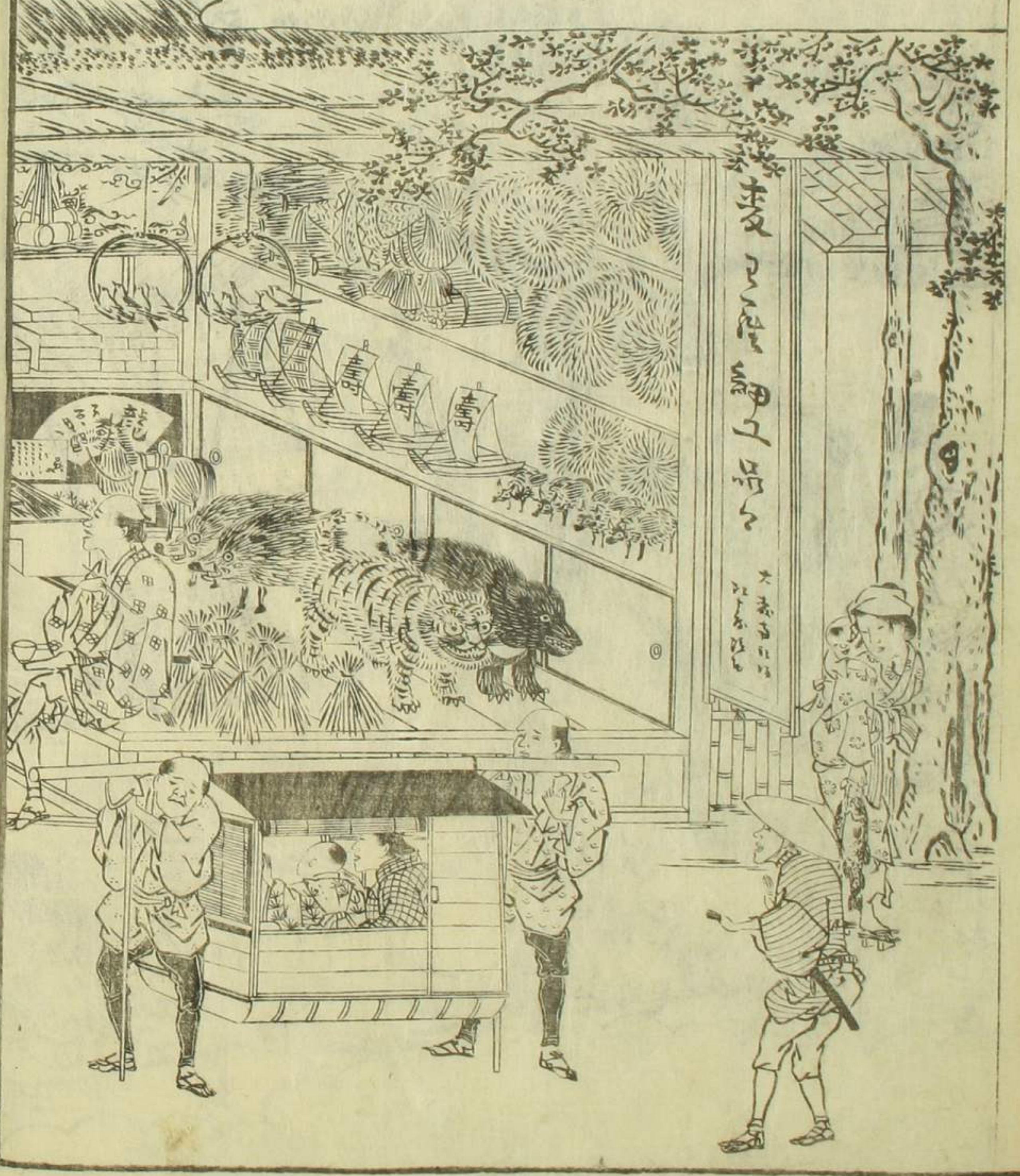
浅草海苔  
 大森品川等の海  
 産せり見  
 浅草海苔と称せ  
 る往古かこの  
 海産せり  
 其旧称を失ひ  
 呼来ま  
 秋の時  
 産  
 建春の時  
 正し止  
 定規と  
 寒中小採  
 他品と

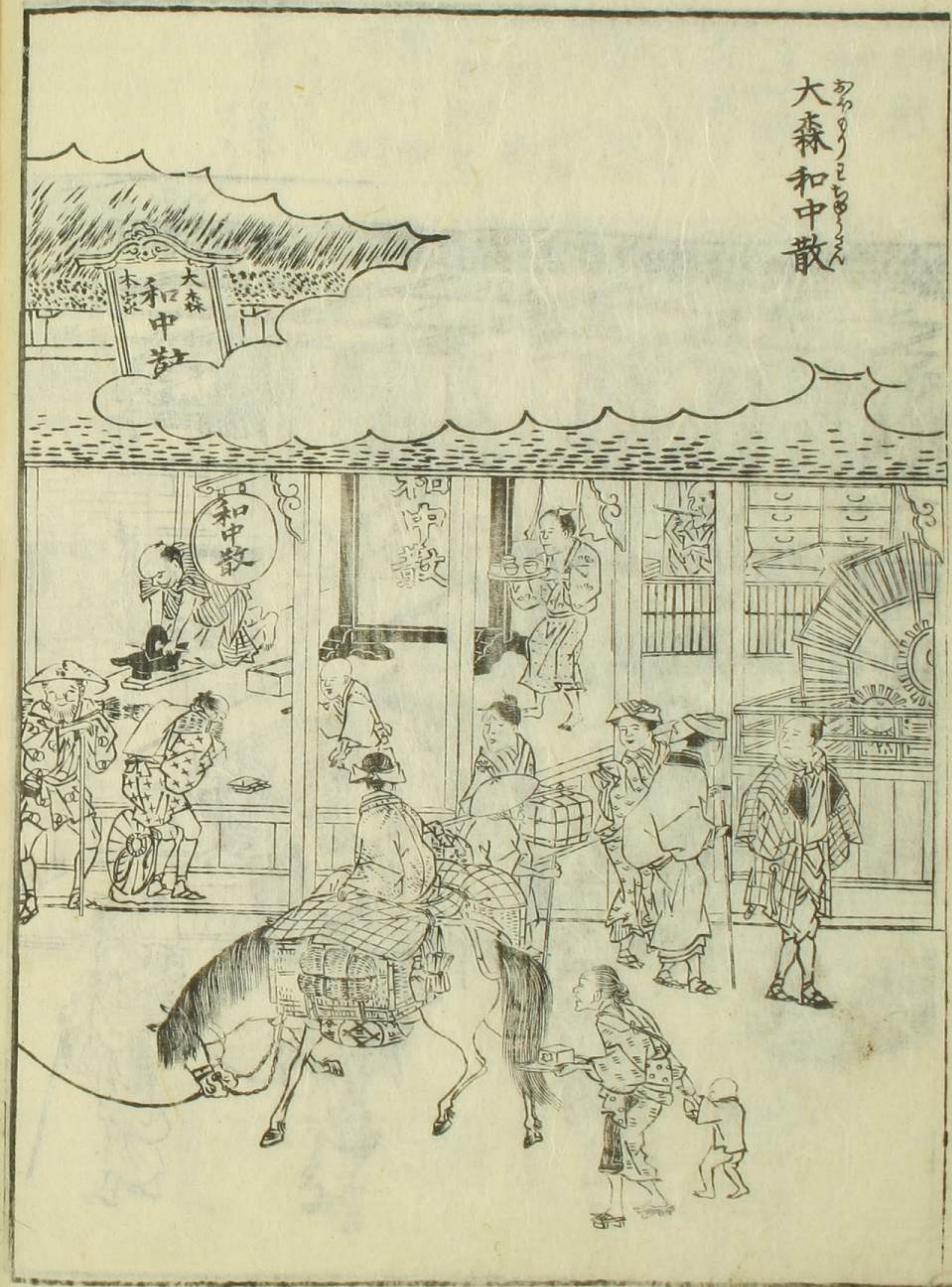
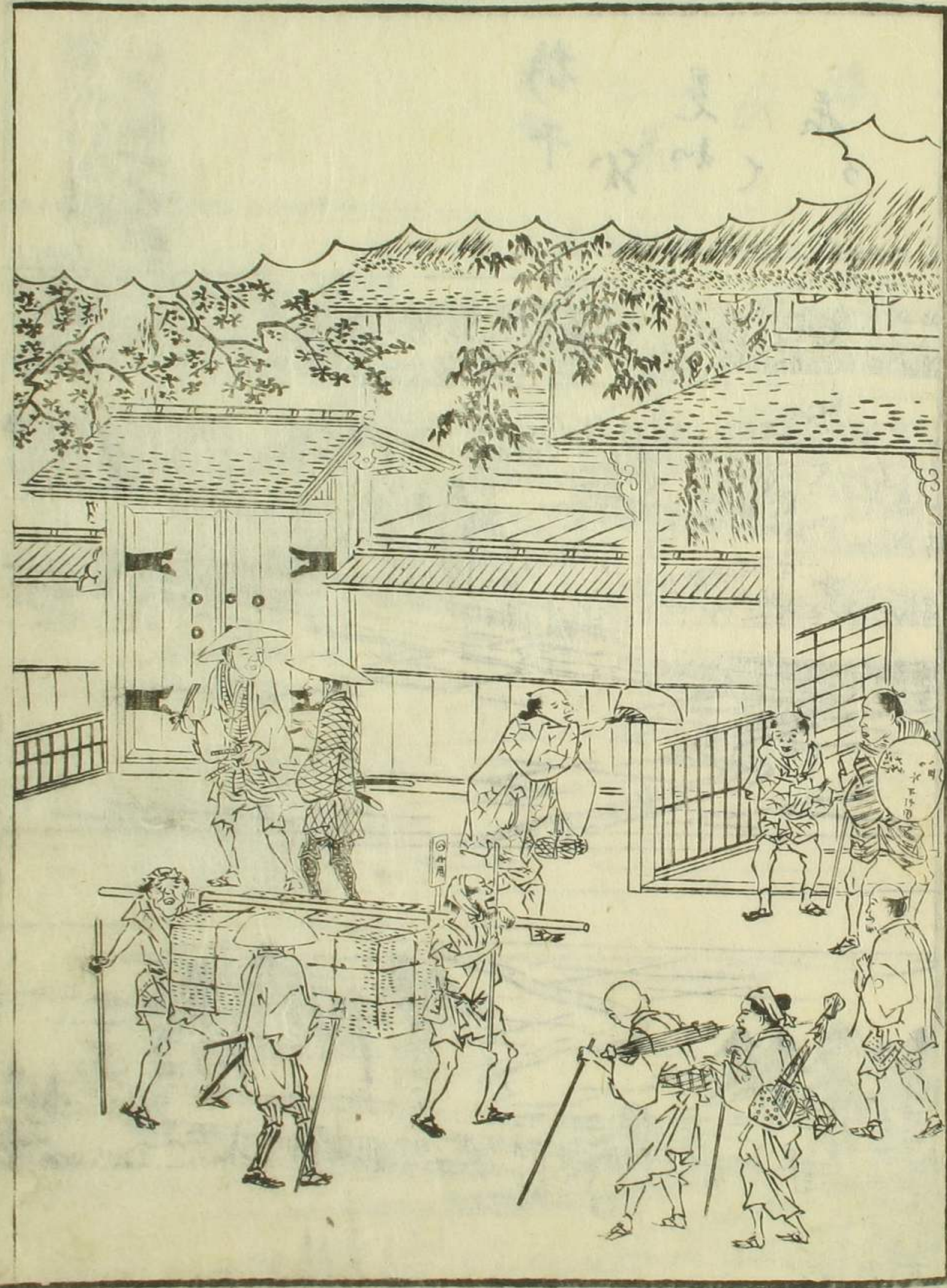




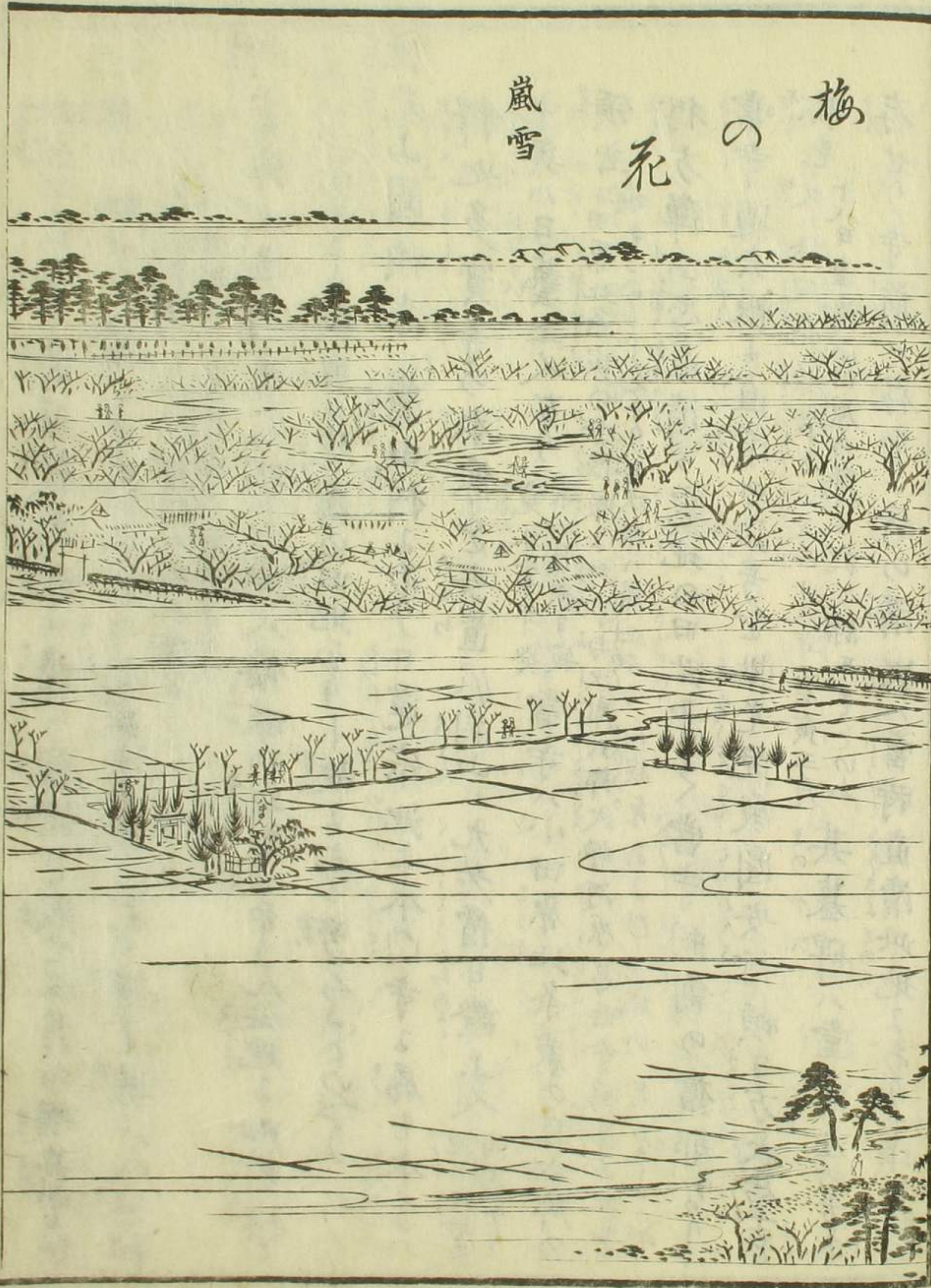


大森村の  
 名産  
 として  
 驚く家  
 多し五  
 小森種  
 の器物  
 製す他  
 邦の人  
 り得く  
 家土産  
 せり



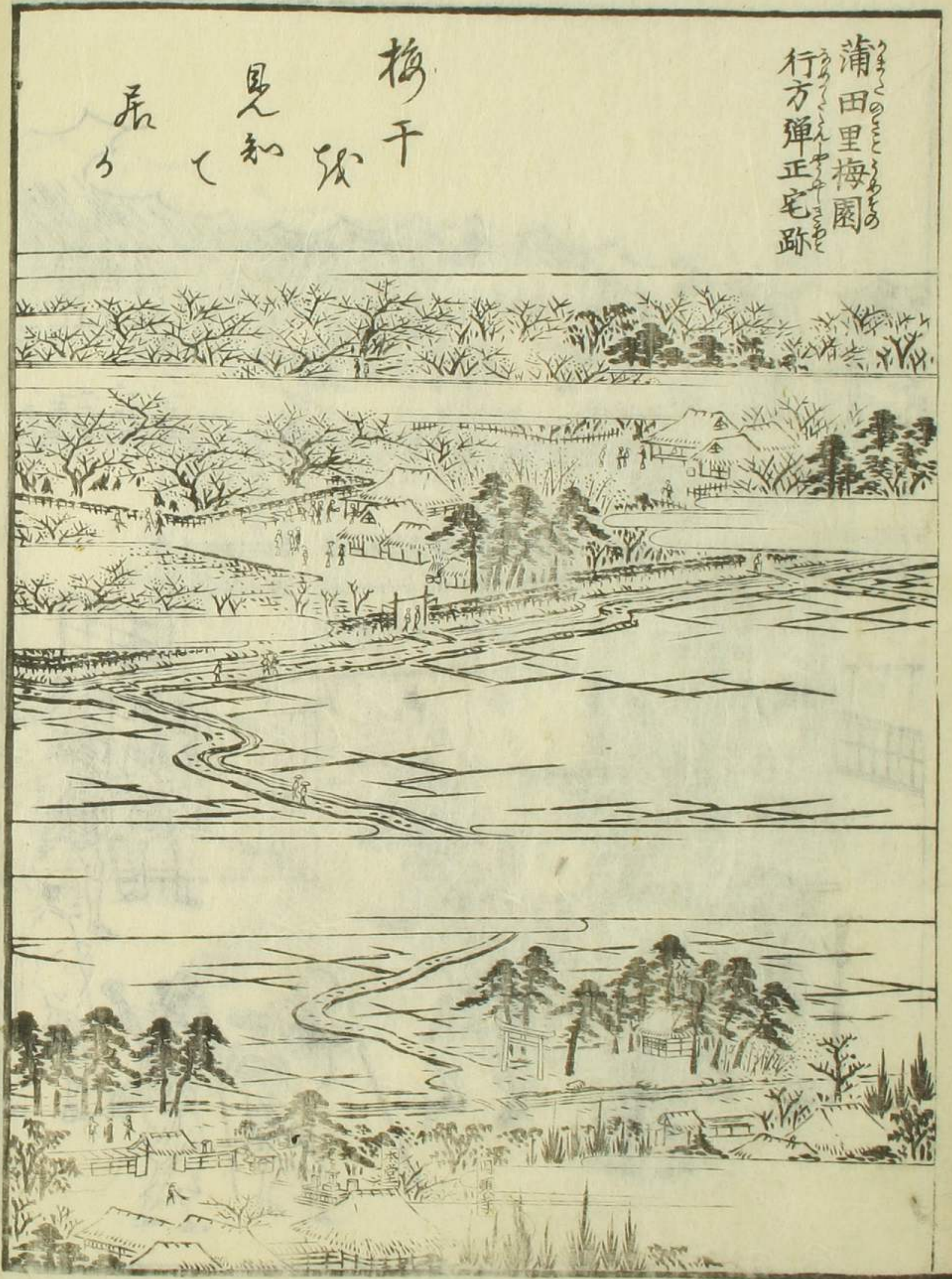


梅の花の嵐雪



浦田里梅園  
行方彈正宅跡

梅干見知  
長く



此地の民家ハ前庭後園共ニ悉ク梅樹を栽テ五月の頃其實を採ル都下ニ鬻クされハ二月の花盛ニ幽香を採リ遊ム人必ク

行方彈正忠明連宅地 六郷八幡塚の辺を云々此地ニ御園村と

性光山圓頓寺 蒲田村ニあり日蓮宗池上本門寺ニ屬シ本尊ハ

釋迦多寶等の木像を安置シ潤山八九老僧日證上人

中興ハ日藝上人なり 寛永二十年癸未二月朔日當寺ハ小田原北条家の臣六郷の

領主小田原北条家の分限帳ニ行方与次郎六郷大師河原葛西寺嶋等の地を

行方彈正忠直清ク宅地の旧跡ニ當寺開創の檀那ナリ

當寺過去帳ニ直清の法号を性光院殿圓安行頓日方大居士と

稱シ父ハ修理亮康親と云天正十八年庚寅三月 其墓碑ハ堂前左の方小

存セリ寺前ニ存スル所の溝堀ハ當時直清此地ニあり一頃の構の

外堀を其儘ニ用ゐると云小田原記ニ永祿九年武田信玄小田原小

人數少キ隙を窺ヒ思ヒよス方ナリ小田原へ押寄るとある奈

下ニ六郷ニ行方彈正居リ一間己ラキこの近所なる八幡を要

害ニ構ヘ稻毛の田島 横田 駒林 等

を引卒ニ橋を燒落シ甲州勢を通ス信玄ハ品川の宇多河石見守

鈴木等を追散シ六郷の橋落ル池上へカケ池上寺を追捕シ池

寺ハ本門寺 此寺の僧と案内者トク矢口の渡を舟ヲ渡シ稻毛の

平間トシ入所へ渡シ稻毛の十六郷を追捕セシ

蒲田八幡宮 同所道の傍ニあり前ニ記セ小田原記の文ニ行方

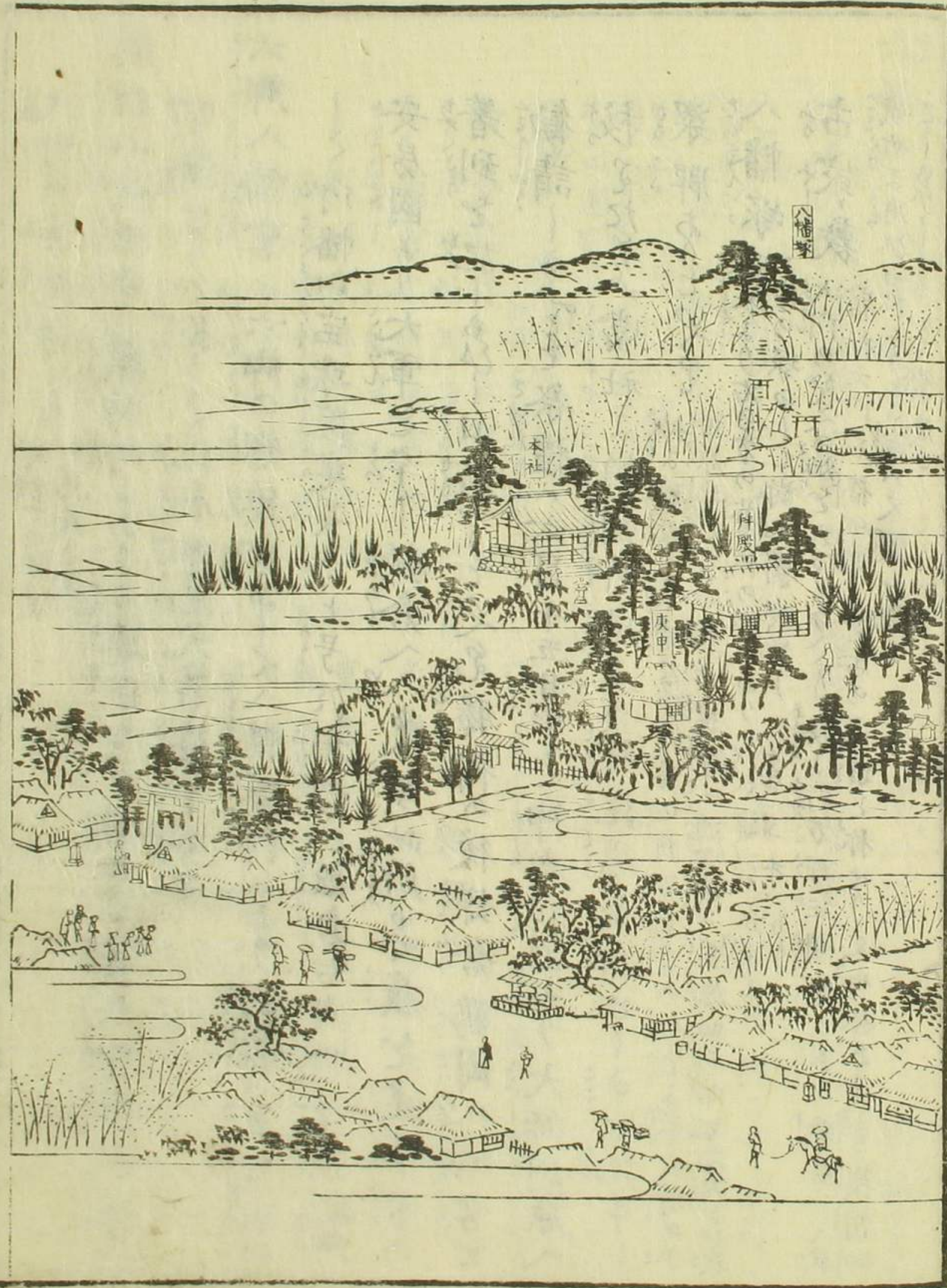
彈正其宅の辺なる八幡を要害ニ構メとあるハ當社の跡ナリ

按ニ三代實録ニ貞觀六年八月十四日戊辰詔シ武藏國

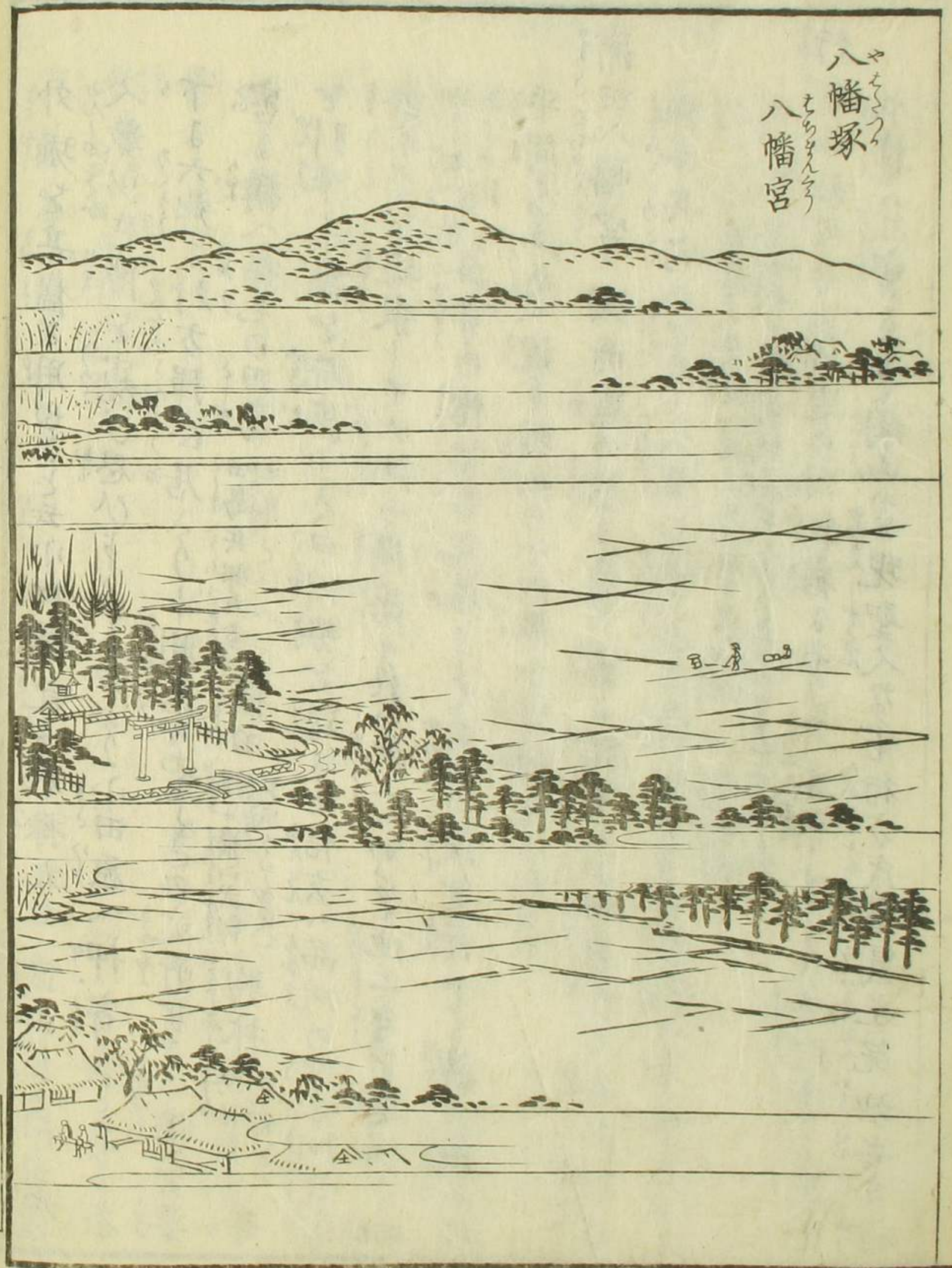
後五位下蒲田神を以テ官社ト列セトスル也當社の跡ニあり

行方山妙安寺 海道の内新宿ニあり日蓮宗也本門寺ニ屬シ

本尊ハ三寶ニシテ開山ハ日現聖人ナリ行方氏室圓光院妙安日行



八幡塚  
八幡宮



大塚の菩提所と云天正十七年丑十月晦日あり

朗羽山長照寺 獵師町あり日蓮宗なり當寺は豊太閤秀吉公此

守佛なりと稱し北辰妙見大菩薩を安ん

六郷八幡宮 六郷の惣鎮守なり八幡塚村あり別當八真言宗の

安房國より大軍を卒し鎌倉へ入る頃此所を鎌倉右府將軍頼朝卿

著到を記しあひ日跡ありと之を勝利の後鎌倉鶴岡八幡宮と

勸請しあふとを祭禮ハ六月十五日中て神輿羽田より大師河原へ

移りたまふ當社は頼朝卿建立の時梶原奉行せしむと記せし

梁牌ありと之を按は梶原ハ景時なり馬込村万福寺の条下ハ奉る所の小

八幡塚本社あり右の方の蒼林の中あり 旗立杉社也

古家敷大塚のかたの畑とあり 按は行方彈正明連家の祖なり

旗竹は用ひられしと云ふ或ハ又鞭を地と

六郷渡 八幡塚の南あり此川ハ多摩川の下流中て八幡塚あり

河崎の驛への渡りなる昔ハ橋を架せし享保年間田中丘隅と

りる人の工夫あり洪水の災を除んる橋を止め舟渡せしと終り

田中丘隅ハ俗稱休愚右衛門嘉古と稱し冠帯老人と号し水理ハ達也相州酒匂川

書を著し今上平間村の田中山妙光寺と 東海道名所記ハ此橋の長と百二

十間とあり 東路の四大橋といふ江州瀬田参州狹路同吉田及ハ此六郷の橋也

癸未記行 六郷橋 癸未記行 六郷橋 癸未記行 六郷橋

注云俗説 畠山重忠嘗居于此雖不考于旧記然重

忠者武州甲族而屢往來鎌倉則不可無其理故首

河崎及此云 郷里俗稱重忠居此村重忠武州七黨

長攻野戰報君恩攀龍附鳳勇功士往事愆々遺

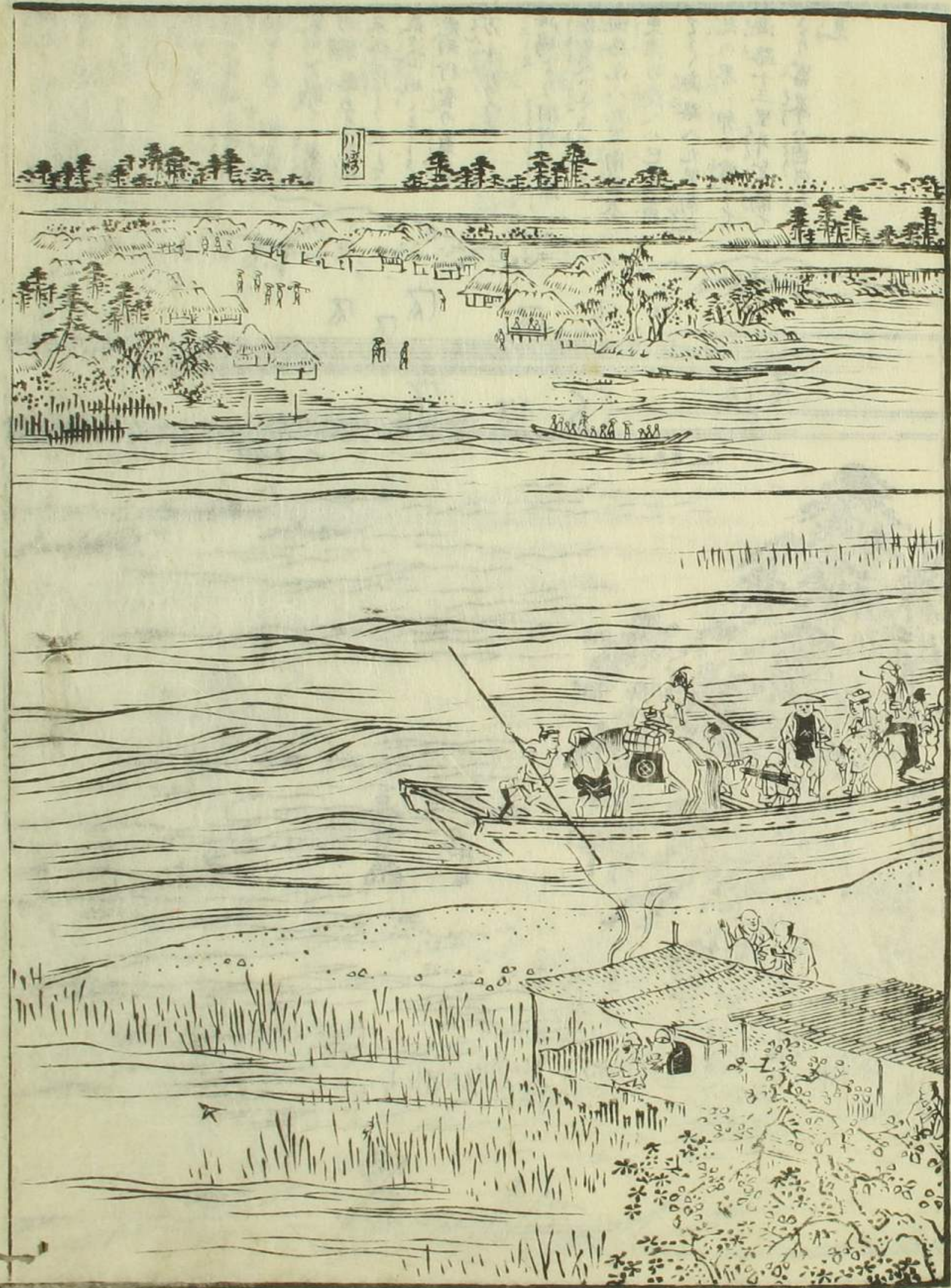
躐同輿馬劍牙僕從喧異域來朝投化者万歲高

會可處士農工幾過皆是名走與利奔可笑

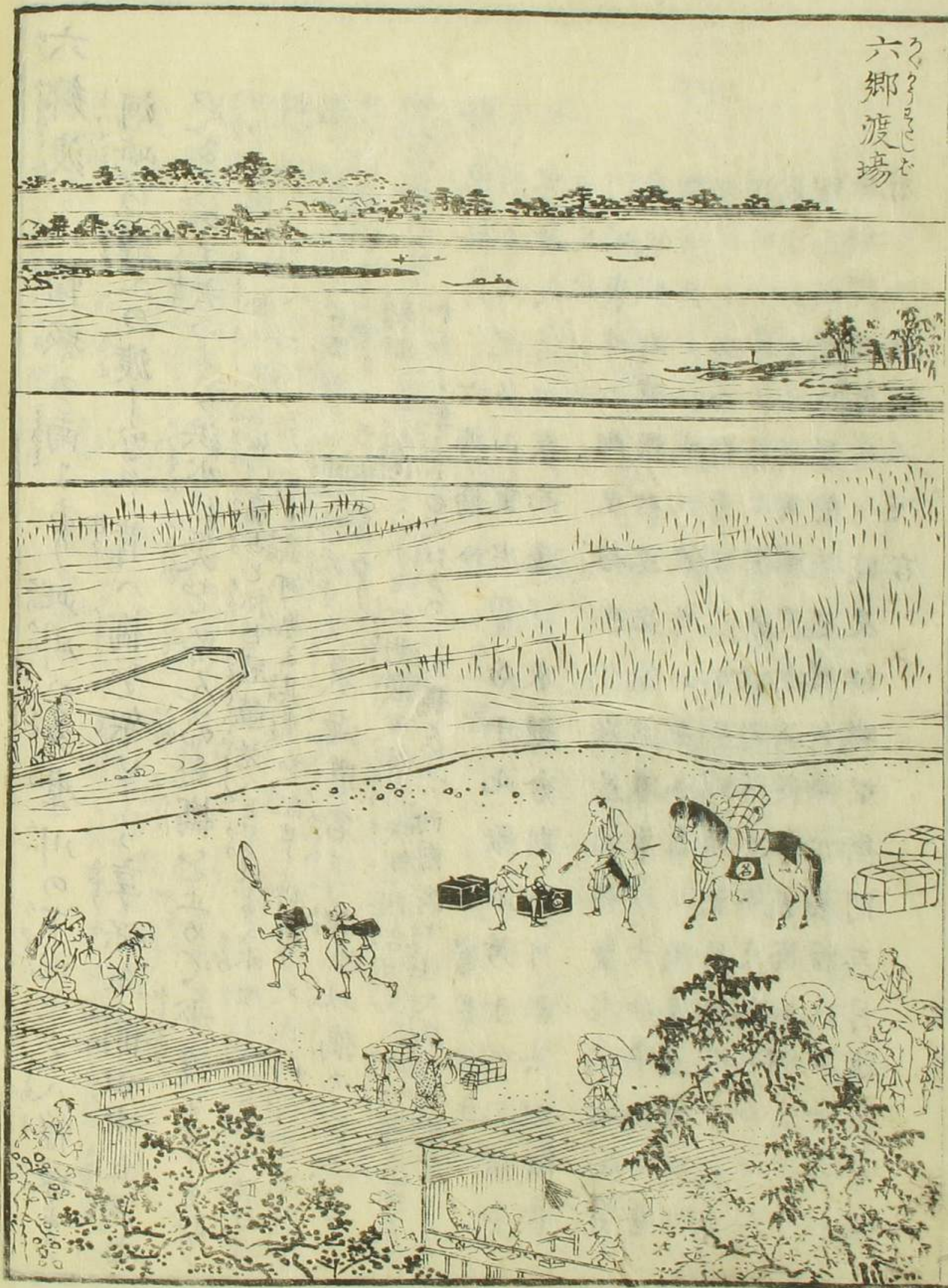
尾生尊子何用禪徒弄胡絲玄霜鴻盡朝裴氏丁

印吟成女許渾菊花過後自斯出顧視江城殆消魂

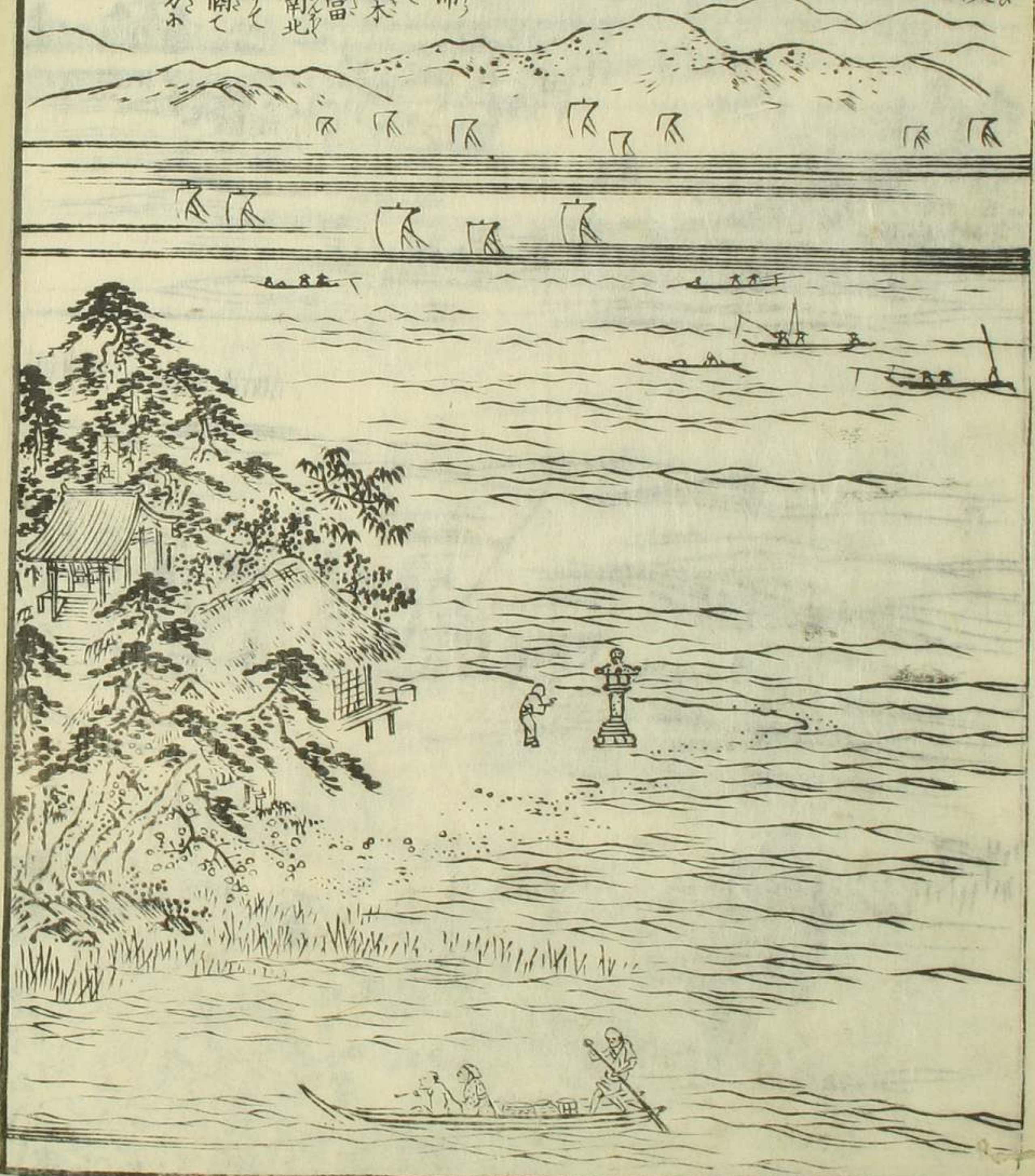
早梅開時自不可入言及江城望衡門三月遠征幸歸



六郷渡場



此地の眺望最秀美なり東海漫々として旭日の芳容を山に掛りあり南に玉川混濁して清流の富峰の雪水映らるり西に海老取川と隔て東海の驛路ありく往來俗便あり北に筑波山城とて飛雨行雲の氣象万々なり



羽田  
辨財天社





要 鳴辨財天社羽田村の南の洲崎はあり故に羽田辨財天とも称せり  
此羽田の浦を扇の濱と云ふ故に此地を要島と云ふ 別當ハ真言宗中々金生山龍王蜜院と号し中々  
 辨財天女の像ハ相州江島本宮巖窟辨財天と同躰中々弘法大師の  
 作なりとのへ此靈像昔江戸有馬侯藤原純政の家ニ傳へて尊  
 信ありし小當社海誓法印の時靈夢ニ感ずる所ありて以て宝永八年  
 辛卯四月此本宮を此地ニ遷し置るとなり  
田川大竜寺開山香國禪師正徳三年ニ誌す所の社記と有馬家の

縁起異同 又當社は如意寶珠一顆を安置せり天然の石のふく其質  
金銀銅鉄の類あり 相傳ひ武州日原山ハ弘法大師開創の地なり山中ニ大日  
 靈水と稱するあり水中一顆の宝珠を存せ然も往古此宝珠玉  
 川の流るるをひ羽田の辺に止る水中昼夜靈光を現は依土人  
 ありんて因を下し是を得る後社を建て崇敬を當社是ありと  
 云云 畧縁起ハ康治二年の春當社の南の大河に網引して一顆の  
宝珠をぬき 故に玉川と名つけ玉川作才天女と稱しまた  
 社殿を經營するとも屢風波の災はかゝるも永く保るあり  
 別當海誓阿闍梨法華經全部の文字を一字一石小  
 書寫し此海底に沈めて島を築き宝殿を建立せその感應也  
 ありん夫より己降青松鬱蒼とて繁茂し庭上苔む竟不  
 風波の難を免るを得るとなり

江戸名所圖會天璇之卷

早稲田大学図書館

011688984868